

平成 15 年度国庫補助事業

芦屋市内遺跡発掘調査概要報告書

芦屋廃寺遺跡（第 89 地点）

寺田遺跡（第 171 地点）

清水遺跡（第 22 地点）

金津山古墳（第 12 地点）

2010 年 3 月

芦屋市教育委員会

平成 15 年度国庫補助事業

芦屋市内遺跡発掘調査概要報告書

芦屋廃寺遺跡（第 89 地点）

寺田遺跡（第 171 地点）

清水遺跡（第 22 地点）

金津山古墳（第 12 地点）

2010 年 3 月

芦屋市教育委員会

序 文

本書は、昭和29年以来発行を継続している文化財調査報告の第83集です。内容は、平成15年度に国庫補助金を得て実施されました個人住宅の建設に伴う発掘調査の主要な記録報告です。芦屋という地域を物語る人々の生活を示す諸資料を、研究をされている全国の方々、関係機関への参考資料として、また、広く県民、市民一般の方々への遺跡保存についてのご理解をいただくため、まとめました。

平成7年に発生した阪神・淡路大震災までに第25集を発行し、震災後は事業量も増大して第26集～第83集の58冊を数え、発掘調査記録の公開に努めてまいりました。

文化財の保存と活用に役立てられ、その保護への取り組みがより一層活性化し、普及促進されるよう、望んでやみません。

ご協力いただきました地権者をはじめとする市民のみなさま、調査をご指導いただいた多くの方々に厚くお礼申し上げます。

平成 22 年 3 月31日

芦屋市教育委員会

教育長 藤 原 周 三

例 言

1. 本書は、芦屋市教育委員会が平成15年度国庫補助事業として実施した市内遺跡発掘調査の概要報告書である。調査費および遺物整理費は、総額35,500,000円で、国1／2、県1／4、市1／4の補助率である。
2. 調査対象遺跡は、当該年度に届出があり、確認調査や本発掘調査が必要となった10遺跡16地点である。なお、既に報告書を公刊している2遺跡4地点（徳川大坂城東六甲採石場岩ヶ平刻印群第79・81地点〔森岡・竹村編2006〕、元塚確認調査・第2次確認調査〔竹村・白谷編2005〕）および調査内容から詳細な報告を要しない4遺跡7地点（山芦屋遺跡N11地点第2次確認調査、津知遺跡第200地点本発掘調査、津知遺跡第206・215・217地点第2次確認調査、堂ノ上遺跡第8地点確認調査、若宮遺跡第40地点第2次確認調査）については、第1章において概略を簡潔に述べるにとどめ、割愛した。
3. 平成15年度に実施した発掘調査は、芦屋市教育委員会文化財課主査（学芸員）森岡秀人、同課学芸員竹村忠洋、同課嘱託（学芸員）坂田典彦、同課嘱託（学芸員）白谷朋世の4名（当時）が担当した。国庫補助事業に関わる事務については、文化財課課長西川孝夫、主査田中尚美が担当し、同課臨時的任用職員である亀井佳代・宮根恵子がこれを補佐した。
平成21年度に実施した報告書（本書）の編集・作成作業は、芦屋市教育委員会生涯学習課文化財担当主査（学芸員）森岡、同課学芸員竹村、同課嘱託（学芸員）坂田・白谷が担当し、同課嘱託（学芸員）平山裕之がこれを補佐した。事務については、同課課長補佐細井良幸、同課課員春木和子が担当し、同課臨時的任用職員である田中智美・力武麻喜江がこれを補佐した。
事業の実施に際しては、文化庁文化財部および兵庫県教育委員会文化財室から指導・助言を受けた。
4. 発掘調査および遺物・資料整理作業（平成15年度）、報告書（本書）編集・作成作業（平成21年度）には、上記した職員・嘱託の他、下記の臨時的任用職員、文化財ボランティアが従事した。また、平成16年度には、出土遺物の一部について実測作業を実施している。
相澤敦子・天羽育子・池田計彦・梅本素子・岡本美樹子・喜多川綾・楠 貴大・久保ふく子・桑原育世・小島静子・近藤奈保子・須田佑子・住本孝太・高橋美代子・竹林裕一・多田尋美・中井みどり・長江真和・仲谷由利子・西岡崇代・前田ひさ子・前田礼子・宮本 舞・山田みゆき・山本麻理・横森美和子
5. 本書の執筆と編集は、森岡・竹村・坂田・白谷の4名が行い、平山が補佐した。執筆分担については、目次および本文末節に氏名を掲げた。本文中の遺跡名・地名・行政用語・法令については、平成15年度当時のものを使用し、第1・3章については、刊行段階の現状を記した部分がある。
6. 校正作業は、森岡・竹村・坂田・白谷の他、天羽・桑原・西岡・山本が担当した。
7. 方位について、真北を用いたものには挿図中の方位マークに「T. N.」と、磁北を用いたものには「M. N.」と表示した。なお、磁北は真北より6°40′西に振っている。また、標高については、東京湾平均海水準（T. P.）で表示している。
8. 標準土色帖で判定した褐色の「褐」字は、本書では「褐」を代字として使用した。
9. 発掘調査および整理作業の過程で、下記の方々からご助言・ご教示を賜った。記して感謝いたします（五十音順・敬称略）。
勇 正廣・北垣聰一郎・関野 豊・藤川祐作・古川久雄・松田和義・村川行弘・山村 薫・山本徹男・渡辺邦雄

目 次

第1章 平成15年度埋蔵文化財発掘調査の経過

第1節 総 説	(森岡秀人)	1
第2節 芦屋市の地理的位置と地質・地勢について	(森岡)	2
第3節 歴史的な変遷と市域の確立	(森岡)	2
第4節 埋蔵文化財保護の展開と国庫補助事業による市内遺跡調査	(森岡)	3
第5節 埋蔵文化財保護のための調査体制について	(森岡)	3

第2章 発掘調査の概要

第1節 芦屋廃寺遺跡(第89地点)	(坂田典彦・森岡)	5
1. 調査に至る経緯		5
2. 調査地をとりまく環境		5
3. 発掘調査の概要		7
4. 小 結		12
第2節 寺田遺跡(第171地点)	(白谷朋世・竹村忠洋)	13
1. 調査に至る経緯		13
2. 調査地をとりまく環境		13
3. 発掘調査の概要		14
4. 小 結		20
第3節 清水遺跡(第22地点)	(坂田・森岡)	25
1. 調査に至る経緯		25
2. 調査地をとりまく環境		26
3. 発掘調査の概要		26
4. 小 結		30
第4節 金津山古墳(第12地点)	(坂田・森岡)	31
1. 調査に至る経緯		31
2. 調査地をとりまく環境		31
3. 発掘調査の概要		31
4. 小 結		41

第3章 まとめ

第1節 平成15年度の調査成果の特徴	(森岡)	43
第2節 芦屋廃寺の寺域と諸施設の広がりについて	(森岡)	43
第3節 芦屋川扇状地の発達と衰微をめぐる寺田遺跡の推移	(森岡)	44
第4節 墳形・周濠形態からみた金津山古墳の特質とその追認	(森岡)	45
第5節 むすび	(森岡)	48

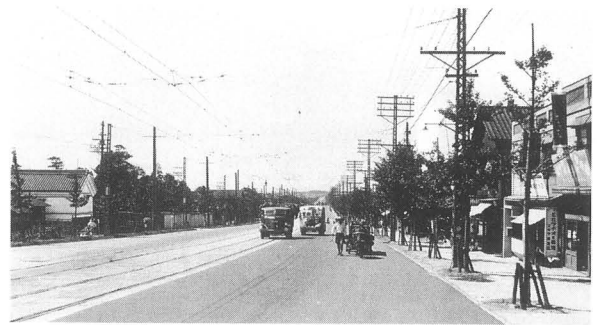
引用・参考文献	49
---------	----

報告書抄録	53
-------	----

第1章 平成15年度埋蔵文化財発掘調査の経過

第1節 総説

兵庫県芦屋市は、交通機関の至便性により阪神間有数の住宅都市として弛まず発達し、柱礎の生活環境にウェイトを置いた街づくりが奔馳して行われてきた。その下地として大正時代に進められた上下水道の整備工事や各種ライフライン設備の早期の布置があり、昭和9年(1934)や昭和13年(1938)に発生した精道村時代の大風水害を乗り越えつつ、昭和15年(1940)11月10日には剿疾、町を超越した市制施行を果たして、戦後は国際文化住宅都市として発展してきた。市誕生当時の人口は41,925人を数えるが、現在は昌慶し、面積18.57km²の狭隘な市域に93,496人の市民が近称に庭園都市宣言を行った美しい街並と透き通る溪声、叢生する六甲連山や湾岸沿いの数多き操船を眺めつつ日々生活を爽然と営んでいる。平成7年1月17日に発生した阪神・淡路大震災は、本市にとって予期せぬ多大な蹉訛となったが、早くも15年の歳月が経過した。芦屋という地名は、既に『万葉集』の巻九にみえ、奈良時代に遡るほど古い。近世にはこの芦屋以外に打出・三条・津知の三村があって、明治22年(1889)以降、合して精道村と呼ばれてきたが、大正末年～昭和初年頃には、駅名や公共機関名としてよく認知されている芦屋村への改称を考える動向も存在した点は注視すべきであろう。「芦屋」は、古代にはもっと広域のエリアを指しての地勢や景観と深く関わる地名であったと思われる。高橋虫麻呂の歌に登場する「菟名負乙女の奥津城」は、西灘・東明・住吉に所在する東西の求女塚、処女塚の古墳時代前期の3古墳を指し、葦の屋を冠することからすれば、それらをカバーしてなお余りある地域を包括すると見て大過ない。地理学者の島之夫が能因法師の詠んだ「葦の屋の児昆陽の渡りに日は暮れぬ、いつち行らん駒にまかせて」の歌や「葦のやのいさこの山のそのかみにのほりて見れば布引の瀧」(読人不知)の歌などを拠り所として、少数例ながらまさしく古代菟原郡の広がりが見伊丹市域に相当する川辺郡稲野村を東の世界として、西方は現神戸市の東半域あたりまでのエリアがカバーされるとみる言説を開陳しているが、頷ける考証であろう。中世以降に頻用される「蘆屋」は、イネ科の多年草である葦群落より見劣りする植物上の含意を彷彿とさせるが、地域呼称としての範囲は当然柔軟な動きを伴ったと見るべきであろう。古代における葦屋郷の存在は、まさしく視覚的な郷心と不可分であり、海原・大原・菟原を包摂する葦の屋の広大なイメージは既に瓦解している。しかし、島による戦前の指摘が慧眼と受け取れるのは、打出より青木までを「芦屋浦」、西宮より住吉までの中



第1図 昭和初期の阪神国道

灘、住吉より生田へと至る大灘を括る総称として「芦屋灘」と呼ぶ地名概念が広く地誌類に普及していること〔寛政8年刊「摂津名所図会」〕をもって、灘の語源も芦屋灘に起源ありとする点であり、芦屋という地域呼称の成り立ちや流動的変遷を歪曲することなく科学的に精緻に考究する作業は、なお職務としても私たちに重く課せられた課題とみるべきだろう。

芦屋地域は、踪跡・伝承・物語・和歌・謡曲・軍記など国文学史の上でも特筆に値する作品を育んできた土地である。古来芦屋は人々の移住や立ち寄り、遊興など流動性に加え、中央との接触に富んだところでもあり、叙事詩的に見ても象徴的かつ美しい言葉が文学史の上に数多く残されている。蓋し第二次世界大戦の最中である昭和19年(1944)に町名改正を積極的に行ったことも特異な行為であり、在原業平やその父阿保親王への所縁を求めた急ぎの施策であったことが酌量されよう。旧小字名の田中・徳塚・平足・走り田が伊勢物語に基づき業平町に、樋ノ口新田・中新田が雲林院(謡曲)に拠り公光町に、久保・親王塚・地造り・堀ノ内・川端・卿ノ本が阿保山親王寺縁起を礎として親王塚町に改変していったことや、東京隅田川に架行する業平橋を多分に意識して名付けられた芦屋川の業平橋もその一環と言えるが、忽々たる社会にあって、近代史としての由来も次第に霧散しつつある。翻るに遺跡の調査は自ら多くを語ろうとはしないが、土地に鍬を入れ、過去の未知なる情報を土中から得、現出する生々しい驚倒の物質資料を歴史の生き証人として市民の地域遺産の枠組みに位置づけ、その記録を保存し、現代・未来の人々へ継承していく第一歩と言える。そして、土地に根をしっかりとおりした歴史の数々を通して、郷土芦屋の歩みに誇りと心に喪失しつつある豊かさを取り戻す糧の一翼を担うものでもあるだろう。日来、遺跡の保護には、ロゴスや法律の世界を超えた市民の崇高なる理念と共有資産として保持する地宝に対する某かの誇りと勇気が牽引力、推進力となっていることは言うまでもない。

(森岡秀人)

第2節 芦屋市の地理的位置と地質・地勢について

芦屋市は大阪湾に臨む高距932m弱を測る六甲山地の南麓に東西2.4km、南北8.5kmの短冊形に近い狭い市域を展開させ、東は西宮市に、西は神戸市に境を接し、大阪湾に面している。六甲山地は衝上断層の成因により床の間に屏風を立てたように背後に急激に迫り、急流河川が複合扇状地を形成して海岸平野は頗る狭隘である。農業用地の発達はかなり段階を踏んだことが窺われ、近世までの集落は街村や塊村の形態を採って大規模な広がりを持つものではない。しかし、東西交通の回廊としての機能は官道が通過した旧摂津国段階に既に確立し、古代山陽道をはじめ、江戸時代の西国街道の活発な往来など、幹線の交通を背景とした当地域の発達が多くの証左をもって跡付けられる。市域は東端が東経135度19分39秒（堀切川河口）、西端が東経135度16分5秒（六甲越えにのこし峠付近）、南端が北緯34度42分56秒（芦屋川河口）、北端は北緯34度46分52秒（仁川水無谷茨谷尻）であり、市域の重心点を求めるなら、その西方500m付近に六甲山中芦屋川峡谷の巨石弁天岩が存在することになる。市域の基盤は古生層と花崗岩から成り、その上を大阪層群や段丘礫層が被覆し、最後に沖積層が形成される。硬質砂岩や頁岩の互層から構成される古生層は地盤の隆起に伴い浸食を受け、残存部が花崗岩体上に乗っかっている状態で点在分布する。踏青により会下山や金鳥山などの六甲山地前山では上部古生層、下部花崗岩の浸潤関係が確認できる場合があり、両者接触の部位には花崗岩の進入に起因して強度の熱変成作用が認められ、ホルンフェルス（変成岩）に変化している。花崗岩成立の順序は布引花崗岩→六甲花崗岩の前後関係にあり、前者は鷹尾山の南麓台地辺りで初現してより以西に頻出する。花崗岩体は芦屋川水車谷近辺で既に地下230mを超える変位した深さにあって、明らかに芦屋断層の影響を受け降下しており、海岸線付近で1000m弱の低位置になるほどの急崖面が伏在している。急峻な六甲山地には、山体の崩壊過程のバッドランドを成



第2図 昭和10年ごろの山手方面の航空写真

す部分が目立ち、岩屑の供給とともに巨円礫と化した転石が豊富である。中生代白亜紀後期に誕生したこの花崗岩は、遺跡の面から見れば、横穴式石室や礎石、徳川大坂城の石切場などに盛用されており、建材としては近代建築や現代建築に、また民家の階段・石垣、種々の石造物などにも多用されている。（森岡）

第3節 歴史的な変遷と市域の確立

省約ながら、市域の成り立ちを俯瞰しておきたい。現在の芦屋市の前身は、精道村であり、明治21年（1888）に市制・町村制が公布され、大日本帝国憲法の発布をみた翌22年に芦屋・打出・三条・津知の四村が合併することにより誕生した。江戸時代後半期、この四村は芦屋村と打出村が天領、三条村と津知村が尾崎藩領に仕分けられていたが、明治4年（1871）に幕藩制下を離れ、兵庫県管下に属して経過した。したがって、芦屋市の基盤領域はこの四村のそれぞれのエリアに基礎を置くとみてよいが、領界争議は歴史的には存在した。天文24年（1555）に勃発した芦屋庄二ヶ村持山東西18町をめぐる芦屋の庄民による逃散事件は特筆に値する出来事であり、江戸時代に入って寛保2年（1742）に至って再燃し、寛延3年（1750）に裁定が下されている（山論裁許状）。困窮する社会生活や経済の不穏時期に発生したものと言え、木々の切り倒しや柴作りによる日々の賄い、支えとなる生業の深刻な様子が垣間見える。農業適地の安定は出水の多い芦屋川堤防の完備される猿丸安時時代の天保12年（1841）を待たねばならなかった。しかし、この問題は紆余曲折を経つつ近現代に持ち越されており、明治11年（1878）の図面（官民有地区別之儀に付伺添付）に基づき、西宮から熊笹峠・石宝殿白山権現道、とがが尾をもって境と成すべしとの強い主張が昭和22年（1947）に至って、「西宮市社家郷と芦屋市打出・芦屋共有山との境界」問題申入れの形で浮上した。両市の境界問題の齟齬は積年のものとは言え、双方の見解の開きも大きく、その後も数回に亘る実地の調査や視察を繰り返しているが、先年も日刊紙で根拠となっている古い史料や絵図の重用が話題となった。こうした西宮市と芦屋市の境界を証拠づける絵図が芦屋市役所の副市長室金庫内に厳重に保管されていることを知っている人は数少ない。なお、西宮市との境界の変動は別にもみられ、昭和36年（1961）6月の市境上の日本住宅公団における甲南土地造成に際しての深谷町・高塚町・岩園町の一部の提供や交換行為がみられた点は記憶に留めたい。芦屋の人口動態が激変するのは、大正10年から同14年にかけての時期と思われる。陸地測量部作成の大正12年（1923）測図は住宅の面的増加が際立っており、交通機関の飛躍的整備が要因をなし、鉄道は大正9年の阪急電鉄芦屋川停留所の設置によ

り、主要なものは整備の完了を迎えている。昭和2年（1927）の阪神国道の完成、国道電車の敷設、続く阪神国道バスの開通もその後の変化を増幅させている。大正9年（1920）から大正14年（1925）の統計人口の大幅な変化（11,151人→19,101人）は壮盛倍加する勢いが読み取れ、女性人口の比率の高さも家事使用人の含有傾向を直接反映したものであろう。その後の人口変動の画期は阪神・淡路大震災による想像だにできなかった猛威を受けての結果、発生年の末期に瞬刻、11,000人の人々が激減した時と考えられる。（森岡）

第4節 埋蔵文化財保護の展開と国庫補助事業による市内遺跡調査

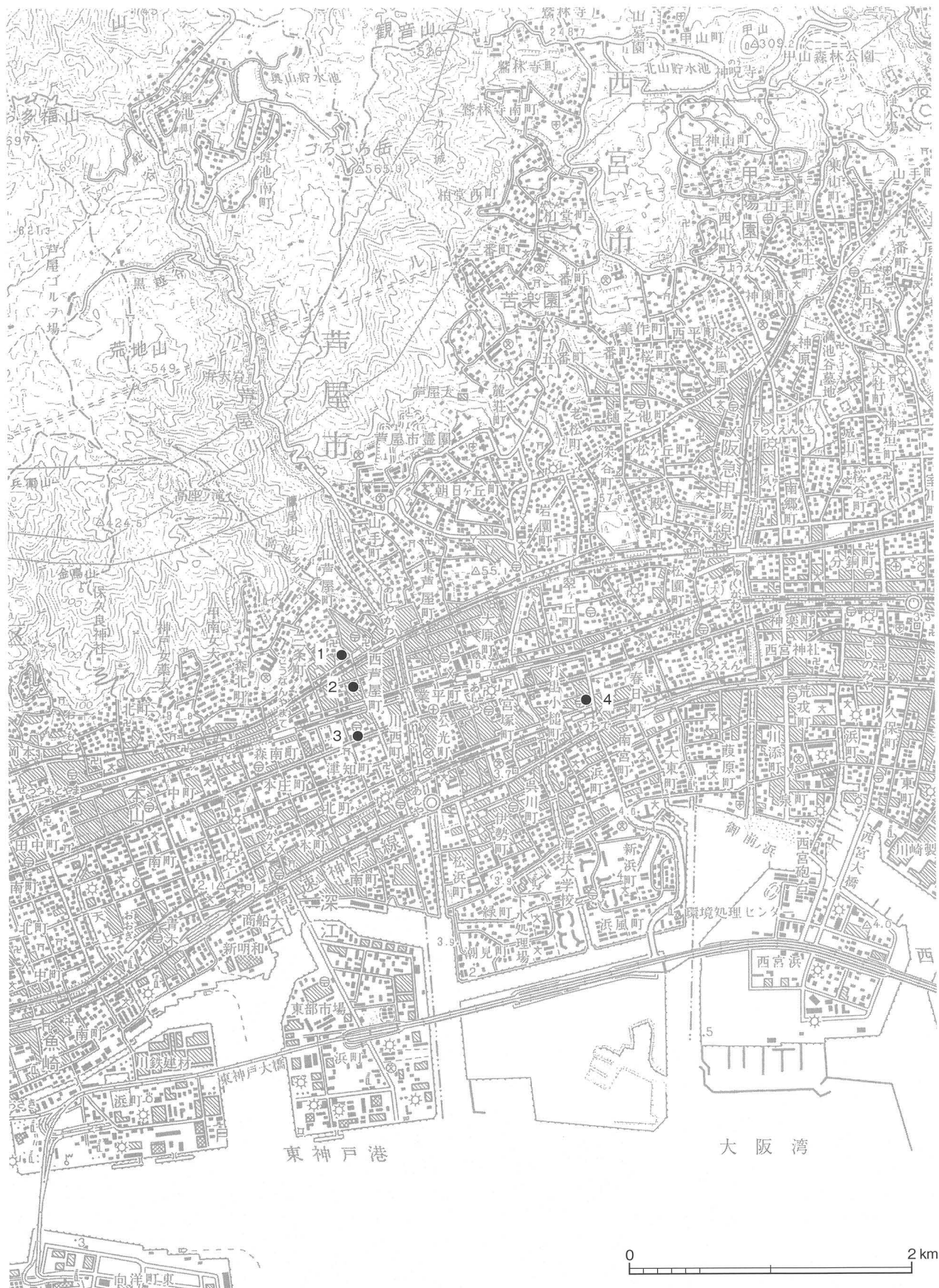
平成15年度には、事業主が調査費を負担した所謂原因者負担による記録保存調査を7件実施している。その内芦屋市が負担した公共工事（公園・道路）を含む共同住宅関連のものについては、事業者と協定を締結し、既に記録保存のための発掘調査報告書を公開している。国庫補助事業としては、確認調査3件、第2次確認調査8件、本発掘調査5件の合計16件の調査を実施しており、遺跡単位で掲げると、津知遺跡（第200地点本発掘・第206地点第2次確認・第215地点第2次確認・第217地点第2次確認）、岩ヶ平刻印群（第79地点第2次確認・第81地点本発掘）、清水遺跡（第22地点第2次確認）、若宮遺跡（第40地点第2次確認）、元塚（確認・第2次確認）、堂ノ上遺跡（第8地点確認）、芦屋廃寺遺跡（第89地点本発掘）、山芦屋遺跡（N11地点第2次確認）、金津山古墳（第12地点確認・第12地点本発掘）、寺田遺跡（第171地点本発掘）の9遺跡13地点を数える。このうち岩ヶ平刻印群の2件の調査については、既に正報告書を公開している〔森岡・竹村編2006、竹村・白谷編2005〕。本書に正報告を収載したのは、その作業が残存していた清水遺跡（第22地点第2次確認）、芦屋廃寺遺跡（第89地点本発掘）、金津山古墳（第12地点確認・第12地点本発掘）、寺田遺跡（第171地点本発掘）の4遺跡4地点5調査である。他の5遺跡8地点は文章化に値する調査成果が得られなかったため、以下、本節で若干触れるに留めたい。

木造2階建て専用住宅新築に伴う津知遺跡（第200地点）の本発掘調査では、2面の遺構面を検出したが、中世の耕作面と判断した。鉄骨造3階建ての専用住宅新築に伴う津知遺跡（第206地点）の第2次確認調査では、布基礎部分の調査区で中世の水田遺構を検出した。木造3階建て専用住宅新築に伴う津知遺跡（第215地点）の第2次確認調査では、2回に亘る面精査を行い、中世の耕作痕などを確認した。津知遺跡（第217地点）の第2次確認調査では、トレンチをL字形に設定し、中世の遺物包含層と水田面を検出した。震災時同様、津知遺跡の調査件数が多い

年度となったが、いずれも下層部の古代以前の遺構情報は視軸に比して満足には得られず、未知のことを多く残した。木造3階建て専用住宅新築に伴う若宮遺跡（第40地点）第2次確認調査では、遺構面1面、ピット6基、溝2条が確認できた。下層には弥生時代や古墳時代の遺構が存在している蓋然性は高い。鉄筋コンクリート造地上5階、地下1階建て共同住宅新築に伴う堂ノ上遺跡（第8地点）第2次確認調査では、東西2地区に分けてテストトレンチを設けて検証を進めたが、中世以下の堆積層の多くが失われていた。ただし、銅鐸出土推定地でもあることから、念のために掘削工事を立会した。住居兼保育所増築に伴い実施された山芦屋遺跡（N11地点）第2次確認調査では、トレンチを3本設定したものの、遺構面や明確な遺物包含層は確認されなかった。しかし、サヌカイト片や須恵器の断片は出土している。芦屋市教育委員会が平成15年度に国庫補助金を得て実施した市内遺跡の発掘調査は、平成15年6月3日付教文第1638号により補助金の交付決定を受けた「平成15年度国宝重要文化財等保存整備費補助金」に基づくものであり、「補助金等に係る予算の執行の適正化に関する法律第14条」の規定に基づき、緊急度の高さに応じ実施した。当該補助事業の実施期間は、平成15年4月1日（着手）～平成16年3月31日（完了）であり、芦屋市教育委員会が事業主体となって遂行した。補助事業の交付決定額は35,500,000円である。（森岡）

第5節 埋蔵文化財保護のための調査体制について

芦屋市内における埋蔵文化財の保護手続きは、平成15年度、文化財保護法第57条の2（土木工事のための発掘に関する届出および指示）並びに第57条の3（国の機関等が行う発掘に関する特例）の規定に基づき提出された周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等の施工に伴う届出や通知の件数が124件を数え、それらへの対処として実施された文化財保護法第58条（地方公共団体による発掘の施行）の規定に基づく発掘調査数は22件となった。市内全体における調査種別は、本発掘調査13件、第2次を含む確認調査9件の実施数であり、この年度の工事立会の件数は57件、分布調査6件となった。なお、平成15年度における窓口・ファックス・メールによる埋蔵文化財包蔵地に関する問い合わせ、照会の類は1231件、開発指導事前協議は224件を数えた。この年度、芦屋市教育委員会の埋蔵文化財専門職員数は、正規2名（学芸員、うち1名は主査）、非常勤嘱託2名（学芸員）の4名で、1チーム2名の2班体制を整えて複数の緊急発掘調査に順次対応した。発掘担当能力を持つ非常勤嘱託の増員1名は、平成11年度からである。（森岡）



1. 芦屋廃寺遺跡 (第89地点) 2. 寺田遺跡 (第171地点) 3. 清水遺跡 (第22地点) 4. 金津山古墳 (第12地点)

第3図 本書収載の発掘調査地点分布図 1/40000 (国土地理院 1:50,000地形図を改変、使用)

第2章 発掘調査の概要

第1節 芦屋廃寺遺跡（第89地点）

1. 調査に至る経緯

芦屋廃寺遺跡は兵庫県下でも名高い白鳳文化期の古代寺院跡である。阪神・淡路大震災後、その周辺でも専用住宅や共同住宅の建設事業が進んでおり、寺田遺跡・月若遺跡と並んで調査件数の多いところである。芦屋廃寺遺跡は寺院址を中心に55,200㎡に広がる複合遺跡で、今年度も包蔵地内での土木工事が若干数みられた。地権者は、平成15年9月26日、兵庫県芦屋市西山町156番地において個人住宅建設計画をあげ、当該地が埋蔵文化財包蔵地であることにより、文化財保護法第57条の2第1項の規定に基づき、発掘届出書を本市教育委員会宛提出した。

本市教育委員会文化財課では計画建物の図面・書類を審査した結果、掘削工事深度が100cmと深く、遺跡の損壊を招くと判断されたため、平成15年10月23日に竹村忠洋を担当者として確認調査を実施した。この確認調査はG.L. -116cmまでの掘削により行われ、浅い所ではG.L. -8.4cmで遺物包含層に達すること、遺構面についてはG.L. -33.9cmで確認できることが明らかとなった。設定したトレンチ数は5基で、調査面積は約8㎡である。なお、埋蔵文化財発掘届出書については、芦教文第204号（平成15年10月27日付）にて芦屋市教育長藤原周三から兵庫県教育長へ進達した。

確認調査を行った結果は上記のとおりであり、平成15年10月23日にはこれを地権者に報告し、併せ本発掘調査の打ち合わせを行う必要があったことから、平成15年10月27日、文化財課にて地権者を交えて担当者を含む事前協議を行った。また、教文第2423号（平成15年10月31日付）にて、兵庫県教育長から地権者宛、「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について（通知）」が届き、芦屋市教育長名にて送り状を作成し、事業者宛通知した。なお、調査期間中の平成15



第2図 調査地位置図 1/5000

年11月12日、兵庫県教育委員会文化財行政室の山本主査が発掘現場を視察し、指導・助言を頂いた。また、森岡秀人・坂田典彦担当の埋蔵文化財発掘調査通知書は、芦教文第227号（平成15年12月4日付）にて芦屋市教育長藤原周三から兵庫県教育長宛送付した。

以上の経緯を経て、発掘調査は平成15年11月4日～11月25日の期間実施した。

発掘作業は、間地工業株式会社に委託した。

2. 調査地をとりまく環境

芦屋市は兵庫県南東部に位置し、古代菟原郡の中に収まる。摂津国の西部に位置する菟原郡は、摂津国管下13郡の一つであり、大阪湾の北岸に面して六甲山地を背負う「中郡」に属し、東は武庫郡、西は雄伴郡（後の八部郡）、北は有馬郡に接している。菟原郡に関する史料の初見は、『行基年譜』にみえる天平2年（730）の記事であり、翌天平3年（731）の『住吉大社神代記』には、「菟原郡一町三段二百九十歩、元名雄伴国」とみえる。この点、菟原郡が8世紀初頭になってからの新設郡ないしは分割郡であった公算も高く、建郡事情や郡域については不明なことが多い。菟原郡は畿内から山陽道に向かう東西交通上の要衝に位置し、陸路が広大な西摂平野から山と海とが迫る地形的狭窄部に一気に入る変換点といえ、とくに東辺の葦屋・賀美二郷はその典型的な地域を占めるといえよう。この地域は、近年の埋蔵文化財調査の増大と進展により古代菟原郡の中核地であったことが判明しつつある。

まず、やや遡って、7世紀後半には、当地域に芦屋廃寺が創建される。創建時に所用された法隆寺式の軒瓦は、1999年に実施された発掘調査で軒丸瓦と軒平瓦がセットになることが判明し、加えて新出型式の高句麗様式軒丸瓦も8世紀以前の資料として確認されている。面違鋸齒文縁複弁八弁蓮華文軒丸瓦と均整忍冬唐



第1図 調査地近景（南西から）

草文軒平瓦の瓦当文様は法隆寺式としては畿内西辺でのモチーフを堅持したものであり、文献史料に登場する兎原郡域における法隆寺領の存在と関係があるろう。目下のところ、郡内唯一の古代白鳳寺院であり、当初は私寺、氏寺的色彩をもっていたにせよ、8世紀に入れば、おそらく郡衙付属寺院、もしくは郡衙周辺寺院といった性格を帯びていたことは推測に難くない。いわゆる「郡寺」としての存在と造寺集団の隔絶した勢力の持続力、影響力は評価すべきであり、その後8世紀を通じて瓦当文様が中央官寺、都宮との結び付きをもってくる点もその公的機能性をなにかがしか物語るのである。また、所用軒先瓦にみられるネットワーク性は、郡内にあっては均整整冬唐草文軒平瓦や単弁十九弁蓮華文軒丸瓦に、郡を超えた広域性では剣状花文軒丸瓦・軒平瓦のセットに見いだされ、8世紀末葉には東は大阪府豊中市の金寺山廃寺（新免廃寺）、西は神戸市長田区房王寺廃寺（室内遺跡）、そして南は大阪市四天王寺に至るまで広がっている事実を確認することができる。言わば、摂津の国域にその広がりをみせるようである。

一方、郡衙については、兎原郡の場合、長期にわたって神戸市東灘区の郡家遺跡の存在が注目されてきた。しかし、近年ではその消長や中心時期の策定の問題などから再検討もなされ、芦屋市域の側でその成立期を考える見解も開陳されている。この点注目すべきは、三条九ノ坪遺跡における「壬子年」（白雉3年、西暦652年）銘木簡の出土であり、この地の律令期直前の7世紀中葉に至っての公文作成を伴う実務処理能力の早熟度をうかがわせる。行政拠点としての郡衙の存在を暗示する資料ともとれ、実務遂行機関が芦屋廃寺の隣接地に誘致された蓋然性も高いのである。それは8世紀に至れば、出土文字史料の形で厳然と姿を現し、郡領「大領」「少領」の往来を証す墨書土器が寺田遺跡において見いだされ、奈良時代後期から平安時代前期にかけての掘立柱建物群などの遺構・遺物の消長にも郡衙としての時期的様相を想定する意見も出されている。

次いで、古代交通の面からみれば、当芦屋地域に葦屋駅が実在したことはさらに本地域官衙群の連携状況を補強するものである。『続日本紀』によれば、和銅4年（711）に摂津国嶋上郡上郡大原駅、嶋下郡殖村駅の二駅がみえるが、兎原郡には駅家の存在をうかがわせる史料がみえない。葦屋駅が文献に登場するのは、『延喜式』巻二八、兵部省の「諸国駅伝馬・畿内」の項にみえる「摂津国駅・草野、須磨各十三疋、葦屋十二疋」の記載（『新訂増補国史大系』第26巻）から、律令制下、七道では三十里（およそ16～20km、現行の約5里）ごとに設置をみた駅家の一つとして姿をみせる。都と太宰府とを結ぶ大路に相当する山陽道そのものの初見史料はかなり遡り、『日本書紀』天武14

年（685）九月戊午条に「直広肆佐味朝臣少麻呂を山陽の使者と為す」とある記事が発点をなすようである。

芦屋は西国交通路の要地であり、畿内西端の重要拠点としての位置を恒常的に保ってきたところである。葦屋駅は東北方約18km（四里半）離れた草野駅（現大阪府箕面市萱野付近）と西方約18kmの距離を置く須磨駅の中間点に存在し、10世紀段階では摂津国内の駅数3の中枢としても機能していた。いま、その所在地を特定することは数説あって、定かではないが、多くの研究者の見解が芦屋川左岸地域より右岸地域の方に比重を移し始めている点は見逃せない。

最近では、「驛」の墨書土器が多数出土した深江北町遺跡にがにわかに注目され始めており、葦屋郷の所在場所とも関連して、近在に葦屋駅跡がみつかる蓋然性が強まりつつある。一説では、葦屋駅前田町内所在説が力説されており、これまで足利健亮や高橋美久二などが唱えていた諸説とともに林立するところとなっている。ただし、官衙域は芦屋川右岸の扇状地上で南北方向にベルトをなすわけでもなく、むしろ、扇状地の高位部と末端の低位部二ヶ所に大きく分離する官衙ブロックが存在するとみなす方が理に即しており、古代山陽道の通過点想定も大別すれば、この官衙ブロックに対応した考証に収斂してきたように受け取れる。

以上、きわめて雑駁な概観となったが、古代摂津国兎原郡の政治的経済的さらに社会的な中枢を暗示する郡衙・寺院・駅家の三つの施設が芦屋川右岸域の扇状地の上を中心とする高燥な場所に集中的な営みをみせることを予測、全般的な環境の説明としたい。

芦屋廃寺遺跡は、本市西端に位置する。六甲前山麓を形成する洪積台地と、400m東を流下する芦屋川、西方を流下する東川（現在、流路固定され地下埋設水路）によって形成された扇状地上に立地する。阪急芦屋川駅から線路北沿いを300m西に進んだ所が、芦屋廃寺寺域中心部に相当する。当地域の標高は、28～35mを測り、背後には城山（標高260m）、会下山（標高200m）がそびえる。それらの環境下から、当地周辺ではいくつかの埋没谷・埋没河川が存在する。遺跡の範囲は、東西200m南北250mを測り、縄文時代から近世にわたる複合遺跡である。また、当遺跡周辺は、遺跡の過密地域であり、東接する月若遺跡、西接する三条九ノ坪遺跡、南接する寺田遺跡を含め、市内遺跡密集地の一角を担う（第2図）。

当地域は、前述した摂津国兎原郡の東部寄りに所在し、芦屋村西ノ坊の地域に属していた。今日遺跡名でもある『葦屋廃寺』は、この地名に由来しているが、実際古代往時にあって上記のように称されていたかは不詳である。創建期は白鳳時代であることが出土遺物・文献・伝承によって明らかになってきている。とくに、道路を挟んだ南東で調査された第62地点では、

おおその伽藍配置が推定できる基壇遺構の一部が確認され、寺域とともに建立・再建・廃絶期の一端が見えてきた。現在までに瓦の分布状況などから、寺域西境界を今回の調査地点の西方30mのところにある南北道と推定している。また、20m程北で発掘調査された第75地点では、「寺」字のスタンプが施された鉄鉢形須恵器が数多く検出されている。墨書とは違い、窯入れの時点で寺院専用供給の生産ラインが出来ていたことがわかる貴重な発見である。

3. 発掘調査の概要

（1）発掘調査の方法

調査区は、建築によって損壊を受ける部分を対象とした。その内、北区61㎡を先行して行い、埋め戻し完了後、南区（駐車場部分）7.5㎡の発掘調査を行った。なお、深掘（下層確認）トレンチは南区に2㎡程度設定した（第3・6図）。

掘削深度は、北区が余掘りを含め設計G.L. -110cm、南区が設計G.L. -40cmである。まず、重機によって表土および埋め戻し土（R地点重複部分）を除去し、以下は人力によって掘り下げた。掘削によって排出される残土は、仮置場に場外搬出し、調査終了後には再度埋め戻し、現状に復した。

測量に用いた基準杭は、任意に打設し、すべての平面図はこれを使用するとともに、平面実測図に記入した。基準高は、本市下水道台帳図記載（平成4年）マ

ンホール天端高T.P. +30.50mから水準測量によって得た。

写真撮影は、35mmフィルム（リバーサル・モノクロ）、デジタルカメラを使用し、記録した。

すべての調査図面・出土遺物は、芦屋市役所分室文化財課三条整理事務所で整理し、保管している。

（2）発掘調査の経過

今回の調査は、紅葉が盛りをむかえ一雨ごとに寒さを増すまさに霜月に行った。記録すべき時事としては、衆議院選挙が行われた。天候は、この時期不安定で、11月10（午後）・11・20日の数日の雨天中止を余儀なくされた。北区の調査を11月19日に終了し、11月21日の一日で南区の駐車場部分の平面調査と深掘調査を完了した。11月25日には現場からの完全撤収に至った。以下に、経過の詳細を日誌抄として記載する。

【調査日誌抄】

11月4日（火）晴れ

調査開始。調査道具の搬入。設計士立会いのもと、調査区の設定を行った。機械掘削は、表土およびR地点埋め戻し土を除去する方針（G.L. -40～-60cm）で進めた。本日で、北区北半分の掘削が終了した。表土・埋め戻し土からは、中世平瓦・巴文軒丸瓦・須恵器片が出土している。関野 豊氏（神戸市教育委員会）来跡。

11月5日（水）晴れ

本日で機械掘削を終了した。西側には、島状に3層が遺存しており、おおそR地点の調査範囲が判ってきた。また、機械掘削床の黒色砂質土上面は、R地点の最終調査面であったことが推測できる。

今後の調査段取りを考慮し、残土排出用ダンプの使用回数の増加を要請した。

11月6日（木）曇りのち晴れ

人力掘削を開始した。西側に遺存する3層を精査した。上面には、古代～近世におよぶ瓦片、須恵器片、土錘、近世陶磁器片が出土している。

11月7日（金）晴れ

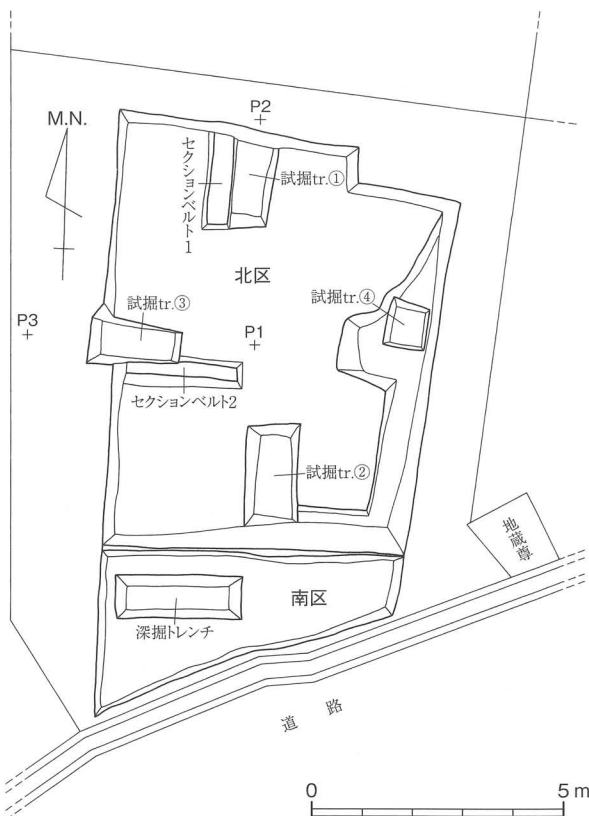
遺存する3層の輪郭がはっきりしてきた。西壁際は、石積み（擁壁の裏込め土か）によって攪乱を受けている。この石積みからは、空き缶やビニールに混じって、弥生土器（後期）が出土しており、付近に弥生時代の遺跡が広がっている可能性が高い。瓦溜まりは、南域で顕著にみられる。

11月10日（月）曇りのち雨

トレンチ内に溜まった雨水の汲み出しと、遺構面1（3層上面）の出土遺物の保護を行った。午後から雨天のため作業中止。

11月11日（火）雨

雨天のため作業中止。



第3図 トレンチ配置図 1/150

11月12日（水）晴れ

遺構面1の遺物出土状況の実測。任意に2箇所を選択し、エレベーション図を作成した。遺物の検出状況は、その大半が3層上面に乗っており、3層内に包含されている印象は受けない。山本誠主査（兵庫県教育委員会文化財行政室）視察。

11月13日（木）曇りのち晴れ

瓦溜まりの遺物をA～Eブロックに分けて取り上げた。3層は、攪乱により調査区のどの壁面にも顔を出さないことから、セクションベルトを残して、下層との対応関係を掴むことにした。R地点の最終面と思われる4層上面で精査をしたが、遺構はない。関野氏、田中主査・宮根臨時的任用職員（文化財課）来跡。

11月14日（金）晴れ

5層上～中位面で、径40cm程度の土坑を2基確認した。土坑内からは遺物が出土していないが、ベース層や4層内出土遺物から、弥生時代後期～古墳時代の遺構であろう。藤原教育長、西川課長来跡。

11月17日（月）晴れ

6層上面まで掘削し、遺構面精査に着手した。今回の最終調査面である。関野氏来跡。

11月18日（火）晴れ

セクションベルト1・2、調査区西壁・北壁土層断面の精査と分層。試掘トレンチ①にかかっていた溝状遺構の確認を行った。結果、溝ではなく浅い落ち込み（自然の起伏）と判断できた。

11月19日（水）曇り

北区の埋め戻しを行う。

11月20日（木）雨

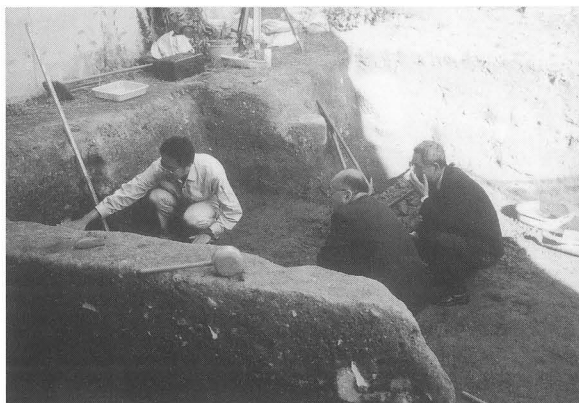
雨天のため作業中止。

11月21日（金）晴れ

南区（駐車場部分）の機械掘削を開始。機械掘削はG.L. -40cmまでを、残りは人力掘削にて掘り下げた。平面調査部分は、盛土内におさまったため、深掘トレンチを設定して下層確認を行った。

11月25日（火）晴れ

調査地およびユニットハウス置場の撤収作業とネッ



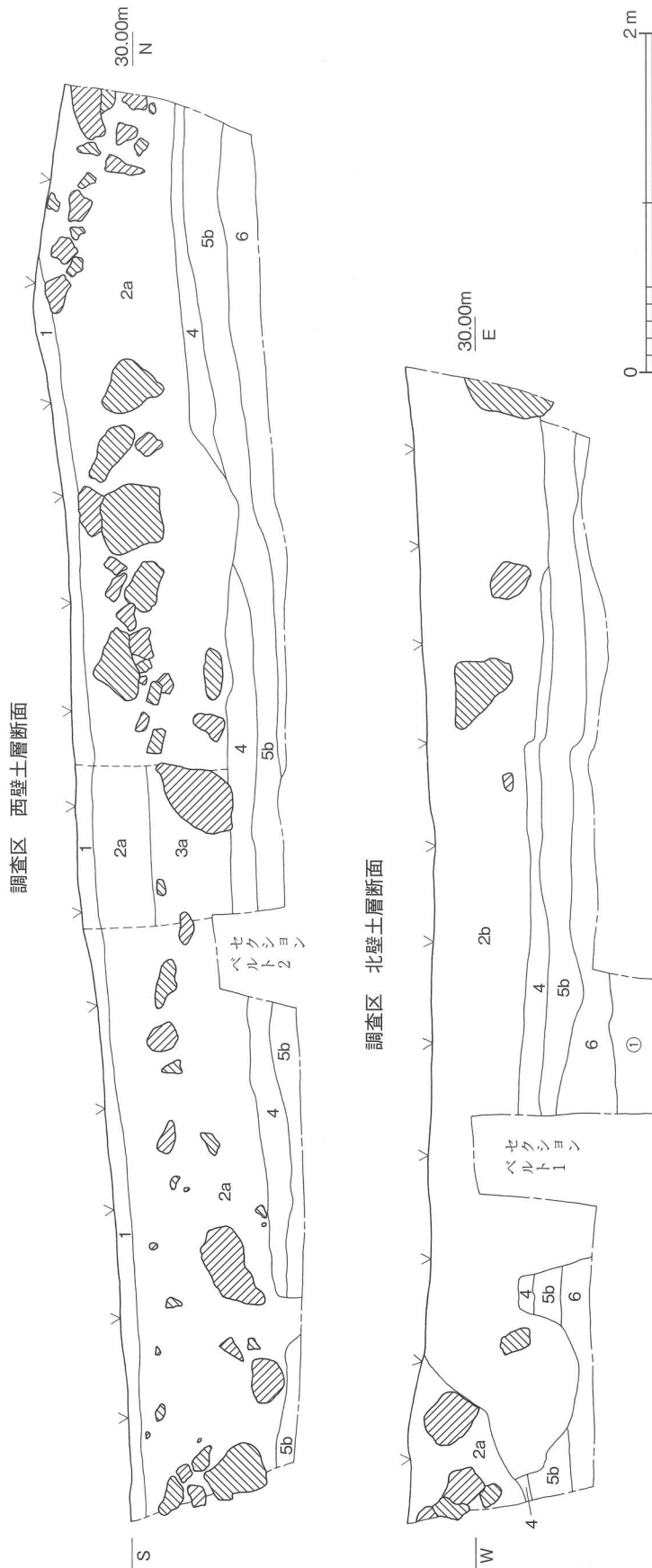
第4図 藤原教育長現場視察

トフェンスの復旧作業を行った。

（3）基本土層

土層番号は、現地表面を含む表土層（盛土・客土）を1層とし、上から順に通し番号でアラビア数字を付した。また、同一層と認められるものでも漸次変移しており、土色・土質に違いがあるもの、異なる複数の層をセット関係でとらえたものは、アラビア数字の後にアルファベットの小文字を付して細分した。遺構埋土は○囲み数字で表記することで区別している。色調は『新版標準土色帖1998年版』（農林水産省農林水産技術会議事務局・財団法人日本色彩研究所監修）を使用した。層序は、調査区西壁の一部分をピックアップし、調査地全体に共通する基本層序の作成を行った（第5・6図）。以下に各層の土質・性格を記す。

- 1層…現地表面を含む表土層（盛土・客土）。現代の盛土および宅地造成時の客土層。
- 2層…a層はR地点調査後の埋め戻し土および填圧土。b層は調査区西壁際の石積み裏込め土。c層は近現代耕作土で灰色（7.5Y4/1）礫混じりシルト質中粒砂。2～5mm大の礫を中量含む。d層も近現代耕作土で灰白色（5Y7/1）粗粒砂。a～d層内からは、ガラとともに古代瓦片や古墳時代須恵器片が出土している。
- 3層…上面が遺構面1。上面ないし上位に古代から近世の遺物を多量に包含する。出土遺物の主体は、中世におけるが、中位～下位からも近世遺物が出土することから、所属年代は近世に相当する。
 - 3a層：灰色（5Y5/1）礫混じりシルト混じり中粒砂。10cm大の礫を不規則に含み、局所的にシルトや砂のブロックがみられる。近世期に、古代～中世の遺物を多量に含む包含層が人為的な要因で二次移動したものと判断する。堆積層自体は、突き固めたようなしまりはない。
 - 3b層：深掘トレンチで確認され、3a層と近似する。遺物相も時期・量ともに類似する。黄灰色（2.5Y6/1）砂礫。3mm大の礫と粗粒砂を主体とし、10cm大の垂角礫と人頭大の礫を上位に含む。湧水が著しい。
- 4層…古墳時代の遺物包含層。当調査区全域で観察でき、調査時の鍵層。暗青灰色（5B3/1）細礫混じり粗～中粒砂。3mm大の礫を中量含む。土師器片、須恵器杯細片が出土している。
- 5層…上面が遺構面2。弥生時代後期～古墳時代に相当する。c・d層は、深掘トレンチで確認したb層の類似層。
 - 5a層：褐灰色（10YR6/1）礫混じり粗粒砂。2mm以下の礫を中量含む。鉄分沈着がみられる。



- 5層…上面が遺構面2。弥生時代後期～古墳時代に相当する。
 5a層…褐灰色礫混じり粗粒砂。鉄分沈着がみられる。
 5b層…暗灰黄色礫混じり中粒砂
 5c層…暗青灰色シルト質細～中粒砂。やや粘性を持つ。植物遺体を若干含む。
 5d層…暗灰黄色礫混じり粗粒砂。上位に鉄分沈着層が観察できる。
 6層…褐灰色礫混じり中粒砂。微細な植物遺体を多く含む。
 7層…暗緑灰色礫混じりシルト質細粒砂。落ち込み埋土①層のベース面。
 落ち込み埋土①層…緑灰色シルト質細粒砂。粘性が強い。

- 1層…現地表面を含む表土層（盛土・客土）
 2層…a層はR地点調査後の埋め戻し土および墳丘土。b層は調査区西壁際の石積み裏込め土。c層は近現代耕作土で灰色礫混じりシルト質中粒砂。d層も近現代耕作土で灰白色粗粒砂。a～d層内からは、ガラとともに古代瓦片や古墳時代須恵器片が出土している。
 3層…上面が遺構面1。所属年代は近世に相当する。
 3a層…灰色礫混じりシルト混じり中粒砂。突き固めたようになりはない。
 3b層…黄灰色砂礫。深掘トレンチで確認され、3a層と近似する。湧水が著しい。
 4層…暗青灰色細礫混じり粗～中粒砂。古墳時代の遺物包含層。

第5図 調査区土層断面図 1 / 40

5b層：暗灰黄色（2.5Y5/2）礫混じり中粒砂。2mm以下の礫を中量、2cm大の亜角礫を極少量含む。須恵器杯細片、弥生土器甕細片、縄文中期末に帰属する深鉢細片などが出土している。

5c層：暗青灰色（10BG4/1）シルト質細～中粒砂。やや粘性を持つ。植物遺体を若干含む。

5d層：暗灰黄色（2.5Y4/2）礫混じり粗粒砂。2mm大の礫を中量含み、上位に鉄分沈着層が観察できる。

6層…上面で弥生土器細片が1点出土。褐灰色（10YR4/1）礫混じり中粒砂。径1cmの白色砂礫を多量に含む。微細な植物遺体を多く含む。

7層…落ち込み埋土①層のベース面。暗緑灰色（5G3/1）礫混じりシルト質細粒砂。3cm大の礫を中量と1cm大の偽礫を少量含む。

落ち込み埋土①層…緑灰色（10GY6/1）シルト質細粒砂。粘性が強い。遺物は出土しなかった。

（4）遺 構

遺構検出は、3・4・5層上面で3度行った。4層上面では遺構が検出されなかったため、3層上面を遺構面1、5層上面を遺構面2と称した。なお、当地点はR地点と重複しており、調査区西半部は4層中位まで調査済みである。以下に、遺構面ごとに詳細を述べる。

遺構面1（第6・7・12・13・15・16図）

遺構は、調査区西半部の島状に遺存する3層上面で検出した。遺構の種類としては、近世に二次堆積し

た瓦溜まりである。検出レベルは、T.P. +29.74mを測る。3層は、頂部平坦面から緩やかな傾斜面を持っている。遺物は、頂部から斜面にかけて貼り付くように出土しており、遺物の上下関係・遺物同士の被りから判断すると、頂部側から下方に投棄されたと思われる。遺物の出土頻度は南斜面がとくに多く、分布に偏りがみられる。出土した遺物には、古墳時代の須恵器杯・古代瓦・中世瓦・羽釜や近世陶磁器などがある。

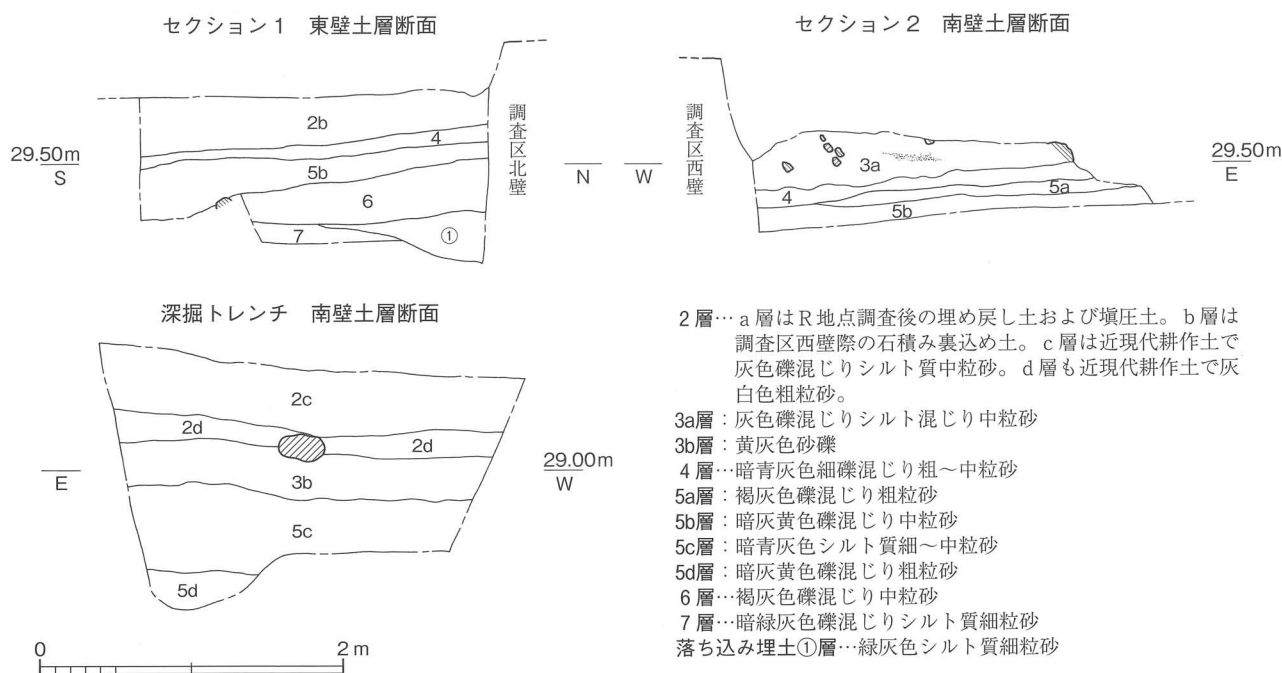
遺構面2（第8・14図）

調査区北東部で土坑2基（SK01・02）を検出した。検出レベルは、T.P. +28.80m前後を測る。SK01は径38cmの正円を呈し、断面は浅い皿形で深さ10cmを測る。遺構埋土は単一層で、灰黄褐色（10YR4/2）礫混じり粗粒砂である。3mm以下の礫と10cm大の亜角礫を含む。SK02は、東半分を攪乱によって欠損する。残存径は35cmを測り、断面は逆三角形を呈する。埋土は単一層で、赤灰色（2.5YR5/1）礫混じり粗～中粒砂である。遺構埋土から遺物は出土していない。

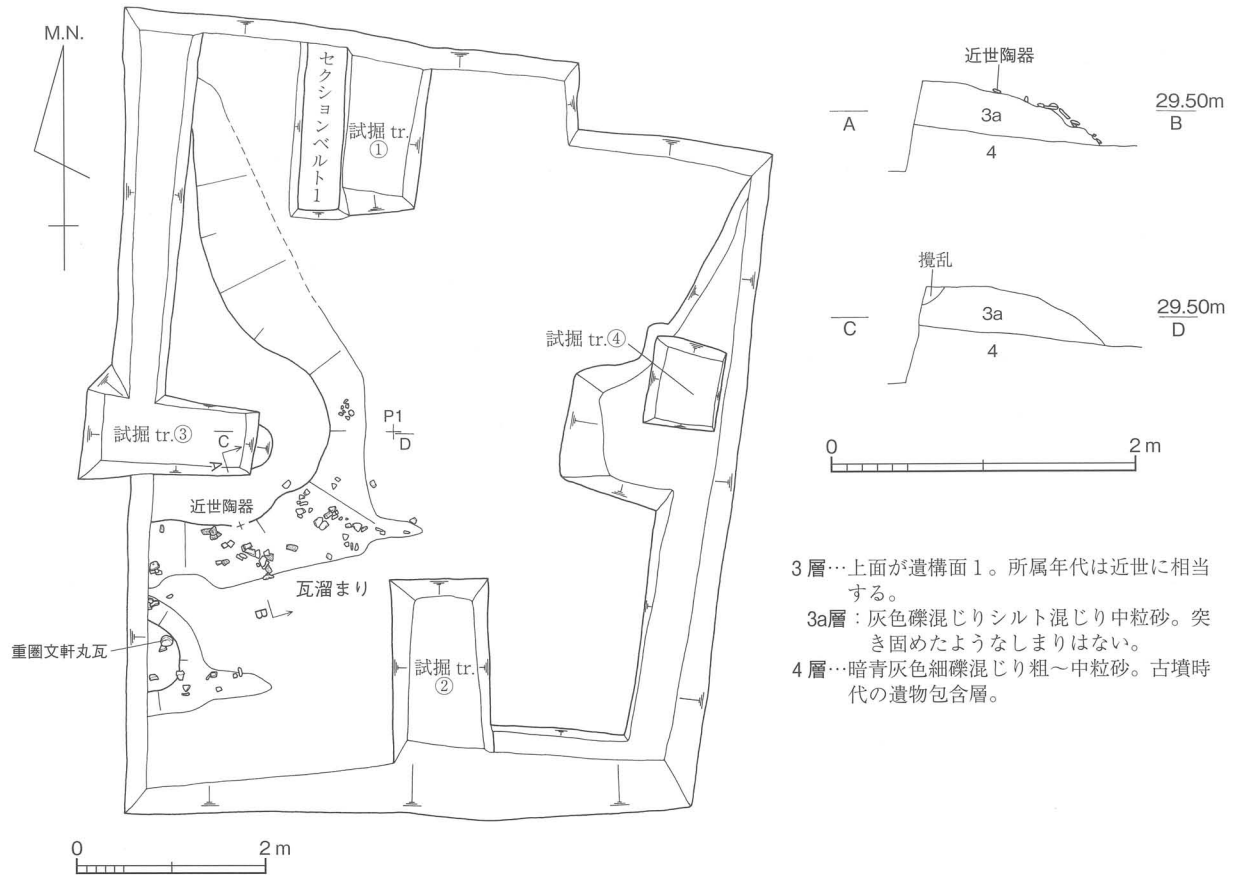
ベース層である5層は、褐灰～暗灰黄色礫混じり中～粗粒砂で比較的安定した土壌である。当層からは、須恵器杯細片、ハケ甕・タタキ甕細片、縄文中期末に帰属する深鉢細片などが出土している。遺構所属時期は、下限を採り古墳時代としておく。

（5）遺 物

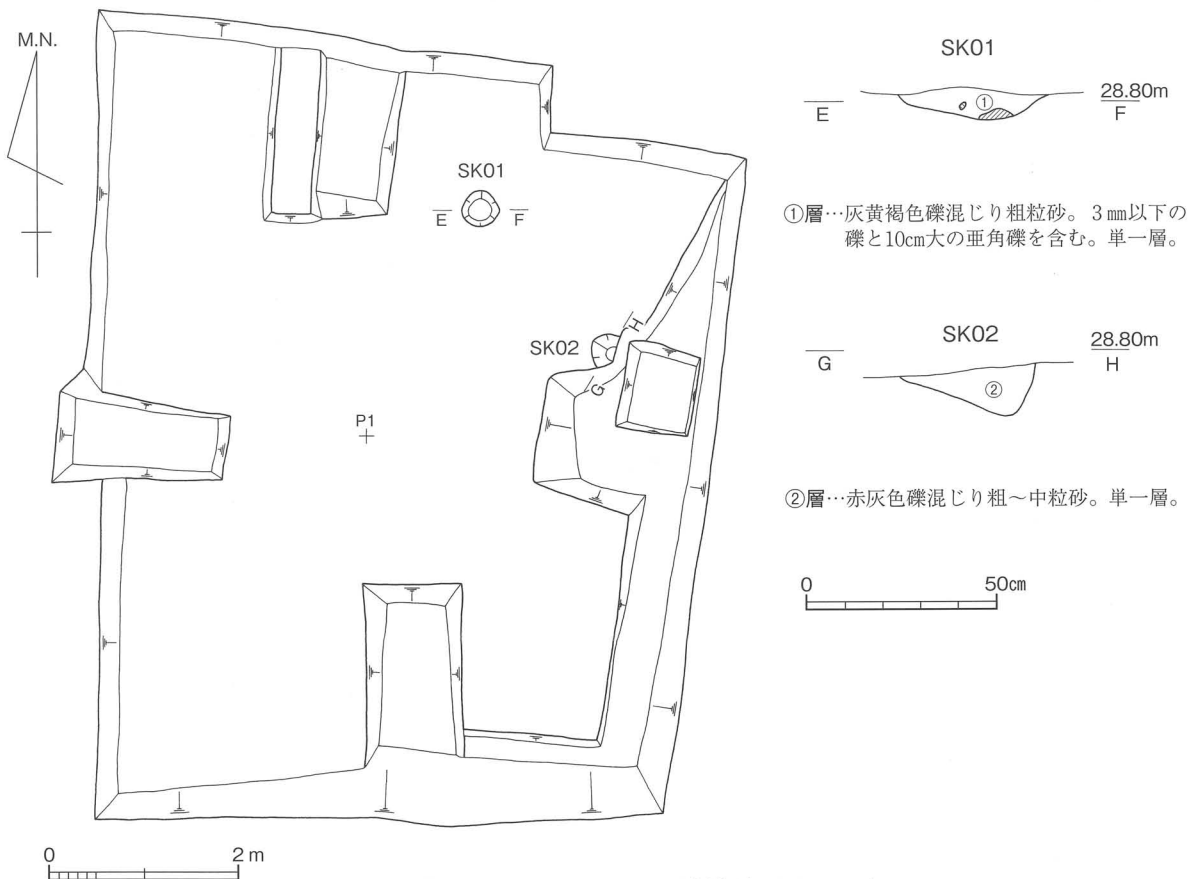
今回の調査によって出土した遺物は、弥生土器・土師器・須恵器・古代～近世の瓦・近世陶磁器があり、総数は27ℓ容量のコンテナで3箱分である。上記した



第6図 セクションベルト・深掘トレンチ土層断面図 1 / 50



第7図 遺構面1平面図 1/80・セクション断面図 1/50



第8図 遺構面2平面図 1/80・遺構断面図 1/20

ように、遺物量のもっとも多かった遺構面1が近世に再堆積していることから、近世に帰属する遺物が大半を占める。しかし、芦屋廃寺中心域に相当する当地点であるだけに、古代の瓦や、古墳時代～古代の須恵器も混在する。また、既往調査でも多々確認されている下層に遺存するであろう縄文～弥生時代の包含層の有無に関しては、掘削深度が及んでいないが、若干の弥生土器が出土していることから、本地点の下層に弥生時代の包含層が遺存している可能性を遺物の視点からも考えることができる。

特記したい遺物は、第9・10図に示す重圏文軒丸瓦である。瓦当面部分のみ遺存しており、軒丸部は欠損している。外縁をなす三重めの重圏文は1/10程度を残し欠損するが、面径は推定15.6cmとなる。色調は、灰白色を呈し、胎土に2mm以下の白色粒を中量含む。

有芯部分は径0.9cm・高さ0.5cmの半球形状で、1.3cmにおいて、厚さ1.1cm・高さ1.0cm・径3.75cm（重圏文の内径）の重圏文が回り、さらに、1.4cmにおいて、厚さ1.2cm・高さ0.95cm・径8.6～8.8cmの二重めが回り、1.4cmにおいて、厚さ1.2cm・高さ8.5cm以上の重圏文で外縁とする。比較的角ばり、厚ぼったい印象を

与える重圏文であり、昭和42・43年に行われた調査でも出土例がある〔村川・藤岡1970〕。

4. 小 結

遺構面1では、当調査地点の立地から、基壇の可能性も考えられたが、3層の所属時期と性格から瓦溜まりと判断した。しかし、二次的に移動したにせよ、これだけの遺物を包含していることは芦屋廃寺の中心域を掘っていることにほかならない。今回の調査では創建期の遺物は出土していないが、重圏文軒丸瓦など増築や葺き替えを示す遺物が出土している。また、芦屋廃寺の下層には幅広い時期におよぶ縄文遺跡が広がっていることが解っており、今回の調査でも微量ながらそれを踏襲するデータを得ることができた。

掘削深度に限りがあったため、平面調査では5層上面までしか確認できなかった。周辺の調査からも下層には古代以前の遺構が遺存している可能性が考えられ、今後設計G.L. -100cm (T.P. +29.5m) 以下に損壊が及ぶ場合は、再度確認調査が必要であり、その結果により本発掘調査を実施する。

(坂田典彦・森岡)



第9図 瓦当拓影 約1/3



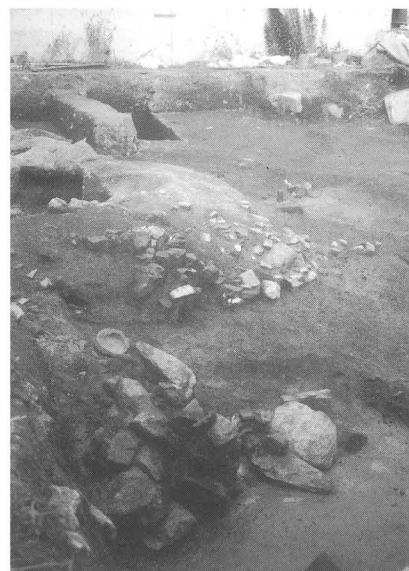
第10図 瓦当接写



第11図 西壁土層断面



第12図 遺構面1 (南東から)



第13図 遺構面1 (南から)



第14図 遺構面2 (南から)



第15図 試掘tr. ③南壁 (北から)



第16図 セクションベルト1 (西から)

第2節 寺田遺跡（第171地点）

1. 調査に至る経緯

芦屋市西芦屋町28番1（敷地面積168.91㎡）において、鉄骨造2階建個人住宅の建築計画が進捗したが、当該敷地は周知の埋蔵文化財包蔵地である寺田遺跡の分布範囲内であることから（第2図）、文化財保護法第57条の2第1項に基づく届出書が平成15年（2003）11月12日に建築主より本市教育委員会に提出された。本市教育委員会は受理した届出書をもとに建築計画の内容を審査し、基礎工事に伴う掘削によって遺構や遺物包含層が損壊を受ける可能性があると判断し、文化財課学芸員竹村忠洋を調査担当者として、平成15年12月9日に遺構・遺物包含層の有無や包含層深度と工事掘削深度との関係調べるために確認調査を実施することになった。

調査の結果、当該敷地においては、現地表下22cm（設計基準レベル－50.3cm）以下に古代から中世にかけての遺物を含む包含層が6層以上あり、現地表下80cm以下は、特に古代の遺物の包含量が多く、かつ、耕作面3面および、ピットや土坑を伴う遺構面が3面以上存在することが明らかとなった。

確認調査結果と工事計画を照らし合わせると、建物基礎部分は、調査地内設定の設計基準レベルから－37cmまでしか掘削しないため、遺物包含層に達しないものの、敷地南端に東西方向で設けられる擁壁については、設計基準レベルから－161.4cmまで掘削する計画のため、掘削が遺物包含層並びに遺構面に達し、埋蔵文化財が損壊を受ける可能性が極めて高いことから、損壊部分を対象とした調査が必要と判断された。

以上の理由から、損壊を受ける擁壁部分を対象として、第2次確認調査を実施することとなり、文化財課学芸員竹村・同課嘱託白谷朋世（学芸員）が調査を担当することとなった。

発掘作業は、東海アナース株式会社に委託した。



第1図 調査地現況（東から）



第2図 調査地位置図 1/5000

2. 調査地をとりまく環境

寺田遺跡は市域の西部、芦屋市三条南町・西芦屋町に広がる縄文時代後期から近世に至る複合遺跡である。地形的には芦屋川と東川が形成した扇状地上に立地し、遺跡の範囲は東西400m・南北300mに広がり、総面積は58,000㎡を測る。寺田遺跡は昭和35年の市道工事によって確認され、昭和59年に初めて第1地点で発掘調査が行われ、今回の調査は171地点目である。

既往の調査では縄文時代の明確な遺構は未確認である。弥生時代については、遺跡西部（東川以西）に前期の貯蔵穴や土坑などの遺構がみられる（第16・17・133・142地点）。中期になると、遺構の検出はみられるが、その分布は前期よりも東（東川以東）に移り、散漫になる（第55・95・127・130地点）。後期前半についても遺構は乏しいが、後期後半から終末期にかけては竪穴住居をはじめとする様々な遺構が多く検出され、その範囲は弥生時代中期よりさらに東に拡大する（第40・55・95・105・127・128・130地点）。古墳時代の遺構も多く検出されているが、特に古墳時代後期から飛鳥時代には遺構の分布域が最も広くなり、東川を挟んで両側に拡大する。竈を有する竪穴住居や掘立柱建物などの多くの遺構が検出されている（第40・55・77・95・127・130・132・139・142地点）。奈良時代になると、遺構の分布域は南西部にその比重を移す（第1・16・52・55・77・95・127地点）が、相変わらず多くの遺構がみられる。第1地点では奈良時代末から平安時代初めの総柱の掘立柱建物群が確認されている。また、第90地点では奈良時代の土器が多量に出土した。その中には「大領」「少領」などを記した5点の墨書土器が含まれている。しかし、平安時代には遺構の分布は次第に縮小し、弥生時代前期同様東川以西に偏り、中期以降の遺構は乏しくなる。その後、鎌倉時代に入ると再び遺構が多く検出されるようになり、その分布は東川以東に移動する（第40・95・117・119・127・130・132地点）。もっとも、中世の遺構は遺跡の北東部に集中する傾向があり、第104地点では室町時代後期に埋没し、近世以降、幹線用水路として機能した東川が流下する谷地形がみられた。

今回の調査地点周辺部は、すぐ東に位置する第40地点で弥生時代中期以前の断面が「V」字形で東西に走る溝、弥生時代後期後半の竪穴住居5棟、古墳時代後期の掘立柱建物1棟、鎌倉時代の掘立柱建物を構成した柱穴群など、多くの遺構が検出されている。また、第40地点の北側に位置する第127地点で弥生時代中期初頭の土坑や溝、古墳時代後期の竈を有する竪穴住居や掘立柱建物、奈良時代から平安時代初めの掘立柱建物群などが確認されている。その西に続く第132地点でも弥生時代中期前半の溝や土坑、弥生時代後期から終末期の竪穴住居を含む遺構、古墳時代中期の竪穴住居が確認されるなど、寺田遺跡の中でも多様な時代の遺構が集中している場所といえる。

さらに、寺田遺跡の周辺には月若遺跡・芦屋廃寺遺跡・三条九ノ坪遺跡・三条岡山遺跡・冠遺跡等が存在しており、本市においては最も遺跡が濃密に分布する地域である。

3. 発掘調査の概要

(1) 発掘調査の方法

建築主代理者である積水ハウスの担当者立会の下、計画建物の基礎に影響を及ぼさないように、擁壁工事部分に限定して調査区を設定した。排土を置く場所の制約から一挙に掘削することができないので、調査区の東側を先ず調査し、その後、西側を反転掘削した。調査区東側をⅠ区、西側をⅡ区とよんで区別している(第3図)。Ⅰ区は東西16m、南北1.5mの長方形で、確認調査時の1トレンチを含み、調査面積は24㎡である。Ⅱ区は東壁で南北1.5m、西壁で南北1.1m、東西13.6mの細長い台形で、調査面積は17.7㎡である。

擁壁工事の掘削深度は設計基準レベル-160cmであるので、そのレベルまで掘削し、遺物包含層や遺構の様相の把握を行った。Ⅰ区については、中世以前の遺構面と考えられる5層上面(第1遺構面)検出のため、5層直上層である4層まで重機で掘削し、その後は人力掘削によって遺構の検出に努めた。検出した遺構面は第1遺構面以下、6層上面(6層が薄いので、一部は7層上面)検出の第2遺構面、7層中において検出した第3遺構面、8層上面検出の第4遺構面の計

4面である。一方、Ⅱ区は調査地の地形の制約から、重機掘削が困難であったので、現地表面から人力掘削を行い、各層の遺物の包含状態を確認するとともに、Ⅰ区同様、5層上面以下、各層界において遺構の検出を図った(第4図)。その結果、第1遺構面は5層上面で、第2遺構面は6層上面で、第3遺構面は7層上面で、第4遺構面は8層上面で検出できた。

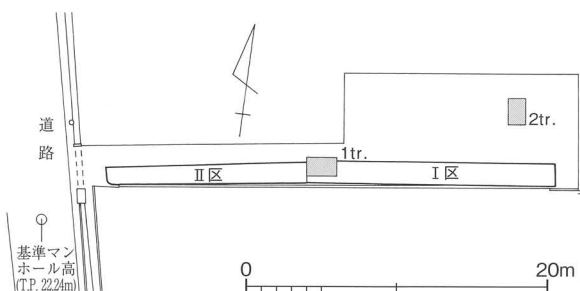
さらに、第4遺構面で検出した竪穴住居(SH01)については、竪穴住居覆土を除去して検出した床土上面と、この床土を除去して検出した8層上面でも、遺構を検出している。

記録は、35mm白黒・カラーボジの2種類のフィルムを用いて写真撮影を行った。実測図は、光波測距器を用いて調査区平面図を縮尺1/100で、各遺構面平面図を縮尺1/50で実測し、必要に応じて、縮尺1/20または縮尺1/10の遺構平面実測図や遺構土層断面図も作成した。また、北壁および東壁の土層断面図は縮尺1/20で作成した。調査地北側道路中央を基準レベルとし、基準高は、当該敷地の周辺に設置されたマンホール上面高(T.P. 22.24m)から水準測量により得て、調査時の基準レベルをT.P. 24.00mとした。

(2) 発掘調査の経過

現地における発掘調査は、平成16年(2004)1月30日(金)に開始し、同年2月27日(金)まで、実働20日で行った。この間、寒波の襲来や小雪の舞う日もあったが、幸い天候に恵まれたので、順調に調査を進めることができた。

初日の1月30日に、フェンスやコンテナハウス等を設置し、現場を設営した。翌週の2月2日は雨であったため調査区の設定のみを行い、3日にⅠ区の掘削を開始した。Ⅰ区の調査は3日から16日まで行い、記録保存終了後、ただちに埋め戻しを行った。16日には並行してⅡ区の掘削を開始し、26日までⅡ区の調査を行った。Ⅱ区の調査終了後、埋め戻しを行い、翌27日に現場を撤収するとともに、終了立会を行って、現場での作業をすべて終了した。



第3図 調査区配置図 1/500



第4図 人力による掘削風景

（3）基本土層

確認調査時に探入した1トレンチの北壁において、土層の堆積を良好に観察することができたので、現表土を1層として、上から順に土層番号を付した。今回の調査でも原則的にこの土層番号を踏襲し、基本土層は1～8層である（第5・6図）。色調や土質に若干の違いが観察されたものは、土層番号にアルファベットの小文字を付けて細分している。なお、遺構埋土やブロックは○囲み数字で表示することで区別している。今回検出できた土層は東西方向に関していうと、ほぼ水平堆積であり、1～7層は遺物包含層である。一方、最下部で検出した8層は、遺物の包含は確認できていないが、大阪層群や段丘礫層のような明確な地山ではない。また、5層以下の層は花崗岩起源の粗砂を多く含む傾向がみられた。土色は、『新版標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議事務局・財団法人日本色彩研究所監修）を参考にして記録している。

1層は灰黄色を呈する現表土層で、瓦やコンクリートといった旧建物に伴う攪乱もこれに含まれる。層厚は概ね20～30cmである。

2層は確認調査時に淡褐灰色砂質土として認識した耕作土である。今回の調査では、色調差の明確な部分は2a層と2b層に二分した。2a層はにぶい黄橙色（10YR6/3～10YR6/4）砂質土で、層厚は16cm程度である。Ⅱ区西部で2a層の下位に確認した2b層は灰黄褐色（10YR6/2～10YR5/2）砂質土で、2a層や3a層より黄灰色がかかる。層厚は2a層とほとんど同じである。2a層は耕作土、2b層は耕作土床土と考えられる。

3層は確認調査時に淡灰色砂質土として認識した耕作土である。今回の調査においてはⅠ区東部では確認されず、Ⅰ区西部以西に広がっている。さらにⅡ区西部では、部分的にやや褐色分の強い部分があり、層厚も厚くなることから、褐色分の強い部分を3b層とし、他を3a層として区分した。3a層は灰黄褐色（10YR6/2）～にぶい黄橙色（10YR6/3）砂質土で、層厚は12～22cmを測る。2b層よりも灰色がかかる層である。3b層はにぶい黄橙色（10YR6/3）～にぶい黄褐色（10YR5/3）砂質土で、層厚は約10cmである。3a層とその下の4a層が混じったものであろう。

4層は確認調査時に茶褐灰色砂質土として認識した耕作土である。今回の調査では、Ⅰ区において層厚50cmを測るが、西になるほど薄くなり、Ⅱ区西部における層厚は概ね10cm程度である。上位ほど鉄分により褐色がかり、下位ほど灰色がかかるので、色調によって3つに細分した。上から、褐色（7.5YR4/4）～褐灰色（10YR5/1）を呈する4a層、黄灰色（2.5Y5/1）～灰黄褐色（10YR5/2）を呈する4b層、黄灰色（2.5Y5/1）～灰色（5Y5/1）を呈する4c層で、いずれも粗砂混じり砂質土である。4層から出土した遺物は土師器・須恵器・黒色土器・瓦器・緑釉陶器・瓦で、12世紀後半

から13世紀を下限とする。4層の性格は、中世以後の耕作土と考えている。

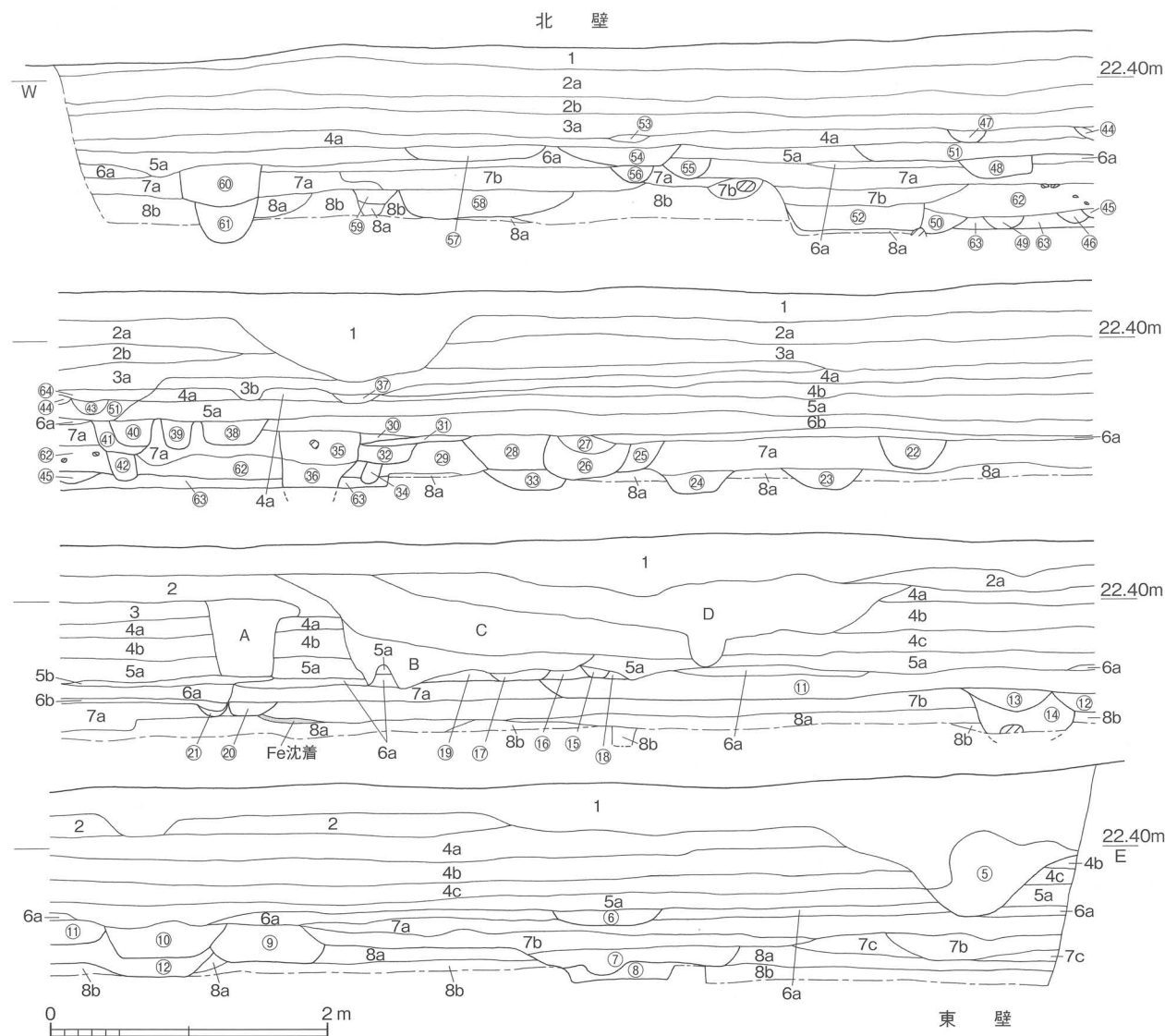
5層は確認調査時に茶灰色砂質土として認識した層で、弥生土器・土師器・須恵器等の包含が濃厚である。主体となる遺物は飛鳥時代～奈良時代のものであるが、少量ながら黒色土器や瓦も出土しており、出土遺物の下限は概ね平安時代前半と考えられる。今回の調査では、4b層よりさらに鉄分が少なく灰色みが強い5a層と、5a層の下部に部分的に確認できた、鉄分の沈着が顕著な5b層に区分している。5a層は褐灰色（10YR5/1）～灰黄褐色（10YR5/2）粗砂混じり砂質土、5b層は明褐色（7.5YR5/6）～暗灰黄色（2.5Y5/2）粗砂混じり砂質土で、層厚は合わせて10～20cmである。この5層上面を第1遺構面として遺構を検出した。

6層は確認調査時に暗茶灰色砂質土として認識した層で、5層同様、古代以前の遺物の包含が濃厚である。その内容は弥生土器・土師器・須恵器で、奈良時代に下限をおく。6層はⅠ区では層厚が5cm程度と薄い、Ⅱ区ではやや厚くなり、最も厚い部分では層厚20cmを測る。6層上面を第2遺構面として遺構を検出しようとしたが、Ⅰ区では6層自体が極めて薄いために遺構検出時の精査段階で7層上面に達してしまっただけが多く、Ⅰ区の第2遺構面検出遺構の多くは7層上面において検出されたものである。

7層は確認調査時に黒褐灰色砂質土として認識した層で、遺物の包含はやや少なくなっている。上部からは須恵器や瓦も出土しているが、7層全体に包含されているのは、弥生土器ないし土師器である。層厚は30cm程度で、土色や土質にばらつきがみられたため、今回の調査では3つに細分している。最も色の濃い7a層は黒褐色（10YR3/1）～黒色（10YR2/1）粗砂混じり砂質土である。7a層よりやや色の薄い7b層は、褐灰色（10YR4/1）～黒褐色（10YR3/1）粗砂混じり砂質土である。7b層より灰色がかって粗い7c層は褐灰色（10YR4/1）粗砂混じり砂質土である。これらは総じて土壌化が進んでいる。

ところで、Ⅰ区では7層上面から約20cm掘り下げた段階で精査したところ多くの遺構を検出したので、これらの遺構をまとめて第3遺構面検出遺構として扱っているが、Ⅱ区では7層上面において検出した遺構面を第3遺構面としている。

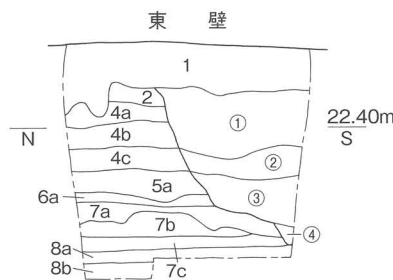
8層は確認調査時に茶褐灰色砂質土として認識した層である。今回の調査では、土壌化の程度によって二分している。土壌化の進行している8a層はにぶい黄褐色（10YR5/4）～褐灰色（10YR4/1）粗砂である。一方、土壌化していない8b層はにぶい黄橙色（10YR6/4）～灰黄褐色（10YR5/2）粗砂～シルトで、水流による自然堆積層のため、土質に粗細の差がみられる。8層上面で検出した遺構面を第4遺構面としている。



- 【土層註記】
 1 現表土層
 2a におい黄褐色 (10YR6/3~10YR6/4) 砂質土
 2b 灰黄褐色 (10YR6/2~10YR5/2) 砂質土。2a・3a層よりも黄白色がかかる。
 3a 灰黄褐色 (10YR6/2)~におい黄褐色 (10YR6/3) 砂質土。2b層よりも灰色がかかる。
 3b におい黄褐色 (10YR6/3)~におい黄褐色 (10YR5/3) 砂質土。3a層に4a層が混じったようで、やや褐色分が強い。
 4a 褐色 (7.5YR4/4)~褐灰色 (10YR5/1) 粗砂混じり砂質土。他より鉄分が多く沈着しており、より茶色がかかる。
 4b 黄灰色 (2.5Y5/1)~灰黄褐色 (10YR5/2) 粗砂混じり砂質土。4a層より鉄分が少なく、灰色がかかる。
 4c 黄灰色 (2.5Y5/1)~灰色 (5Y5/1) 粗砂混じり砂質土。4b層よりさらに灰色がかかる。
 5a 褐灰色 (10YR5/1)~灰黄褐色 (10YR5/2) 粗砂混じり砂質土。4b層より鉄分が少なく、灰色みが強い。
 5b 明褐色 (7.5YR5/6)~暗灰黄色 (2.5Y5/2) 粗砂混じり砂質土。5a層に鉄分が多く沈着した部分。
 6a 褐灰色 (10YR5/1)~灰黄褐色 (10YR4/2) 粗砂混じり砂質土
 6b 6a層+褐色 (7.5YR4/6)~におい赤褐色 (5YR5/4) 粘性砂質土。焼土状のブロックを多く含む。
 7a 黒褐色 (10YR3/1)~黒色 (10YR2/1) 粗砂混じり砂質土
 7b 褐灰色 (10YR4/1)~黒褐色 (10YR3/1) 粗砂混じり砂質土。7a層よりやや色が薄い。
 7c 褐灰色 (10YR4/1) 粗砂混じり砂質土。7b層より粗く、灰色がかかる。
 8a におい黄褐色 (10YR5/4)~褐灰色 (10YR4/1) 粗砂。8b層が土壌化したものか。
 8b におい黄褐色 (10YR5/4)~灰黄褐色 (10YR5/2) 粗砂~シルト。水流による自然堆積層。
 A 黄灰色 (2.5Y6/1~2.5Y5/1) 砂質土
 B 黄灰色 (2.5Y6/1)~灰黄色 (2.5Y6/2) 砂質土
 C 暗灰黄色 (2.5Y5/2) 砂質土
 D 灰黄色 (2.5Y6/2) 砂質土

- | | | |
|-------------|------------------------------------|--------------------------------------|
| ① S D01埋土① | ②⑥ S K16⑥埋土 | ④⑥ S H01-P 9埋土 |
| ② S D01埋土② | ②⑦ 褐灰色 (7.5YR4/1) 礫混じり | ④⑦ におい黄褐色 (10YR4/3) 砂質土 |
| ③ S D01埋土③ | ②⑧ 粗砂質土 | ④⑧ S P89埋土 |
| ④ S D01埋土④ | ②⑨ S K16⑧埋土 | ④⑨ S H01-P10埋土 |
| ⑤ 近現代掘削 | ②⑩ S K16⑦埋土 | ④⑩ S H01-P11埋土 |
| ⑥ S P05埋土 | ②⑪ S K16⑥埋土 | ④⑪ S K13埋土 |
| ⑦ S K09埋土 | ②⑫ S K16⑤埋土 | ④⑫ S K18②・③埋土 |
| ⑧ S P35埋土 | ②⑬ S P107埋土 | ④⑬ 褐灰色 (10YR6/1)~灰黄褐色 (10YR6/2) 粗砂 |
| ⑨ S K10埋土 | ②⑭ S H01-P 2埋土 | ④⑭ S P53埋土 |
| ⑩ S K07埋土 | ②⑮ 黒褐色 (10YR3/1~10YR3/2) | ④⑮ S P79埋土 |
| ⑪ S K06埋土 | ②⑯ 粗砂混じり砂質土 | ④⑯ S P96埋土 |
| ⑫ S K11埋土 | ②⑰ S H01-P 3埋土 | ④⑰ S K14埋土 |
| ⑬ S P28埋土 | ②⑱ 灰黄色 (2.5Y6/2) 粗砂 | ④⑱ S K19埋土 |
| ⑭ S P41埋土 | ②⑲ S P92埋土 | ④⑲ S P104埋土 |
| ⑮ S K02埋土・粗 | ②⑳ S P91埋土 | ④⑲ S P72埋土 |
| ⑯ S K02埋土・細 | ③⑰ S P90埋土 | ④⑲ S P108埋土 |
| ⑰ S K02埋土・粗 | ③⑱ S P93埋土 | ④⑲ S H01覆土 |
| ⑱ S K02埋土・細 | ③⑲ S H01-P 7埋土 | ④⑲ S H01覆土 |
| ⑲ S P23埋土 | ③⑳ におい黄褐色 (10YR4/3) 砂質土 | ④⑲ におい黄褐色 (10YR4/3) 砂質土 |
| ⑳ S P28埋土 | ③㉑ S H01-P 3埋土 | ④⑲ 土+褐灰色 (10YR6/1)~灰黄褐色 (10YR6/2) 粗砂 |
| ㉑ S P95埋土 | ③㉒ 褐灰色 (10YR6/1)~灰黄褐色 (10YR6/2) 粗砂 | ④⑲ におい黄褐色 (10YR4/3) 砂質土 |
| ㉒ S P99埋土 | ③㉓ 褐灰色 (10YR6/1)~灰黄褐色 (10YR6/2) 粗砂 | ④⑲ 土+褐灰色 (10YR6/1)~灰黄褐色 (10YR6/2) 粗砂 |
| ㉓ S P100埋土 | ③㉔ S H01-P 8埋土 | |
| ㉔ S K16⑧埋土 | | |

第5図 土層断面図 1/50



第6図 北壁土層 (南東から)

(4) 遺構

遺構はⅠ区・Ⅱ区ともにそれぞれ4面検出した（第7～12・16～24図）。ただし、ベースとなる層が若干異なるので、Ⅰ区とⅡ区に分けてその概略を述べる。なお、各遺構の法量や埋土の様相等は遺構一覧表（第1表）に記している。

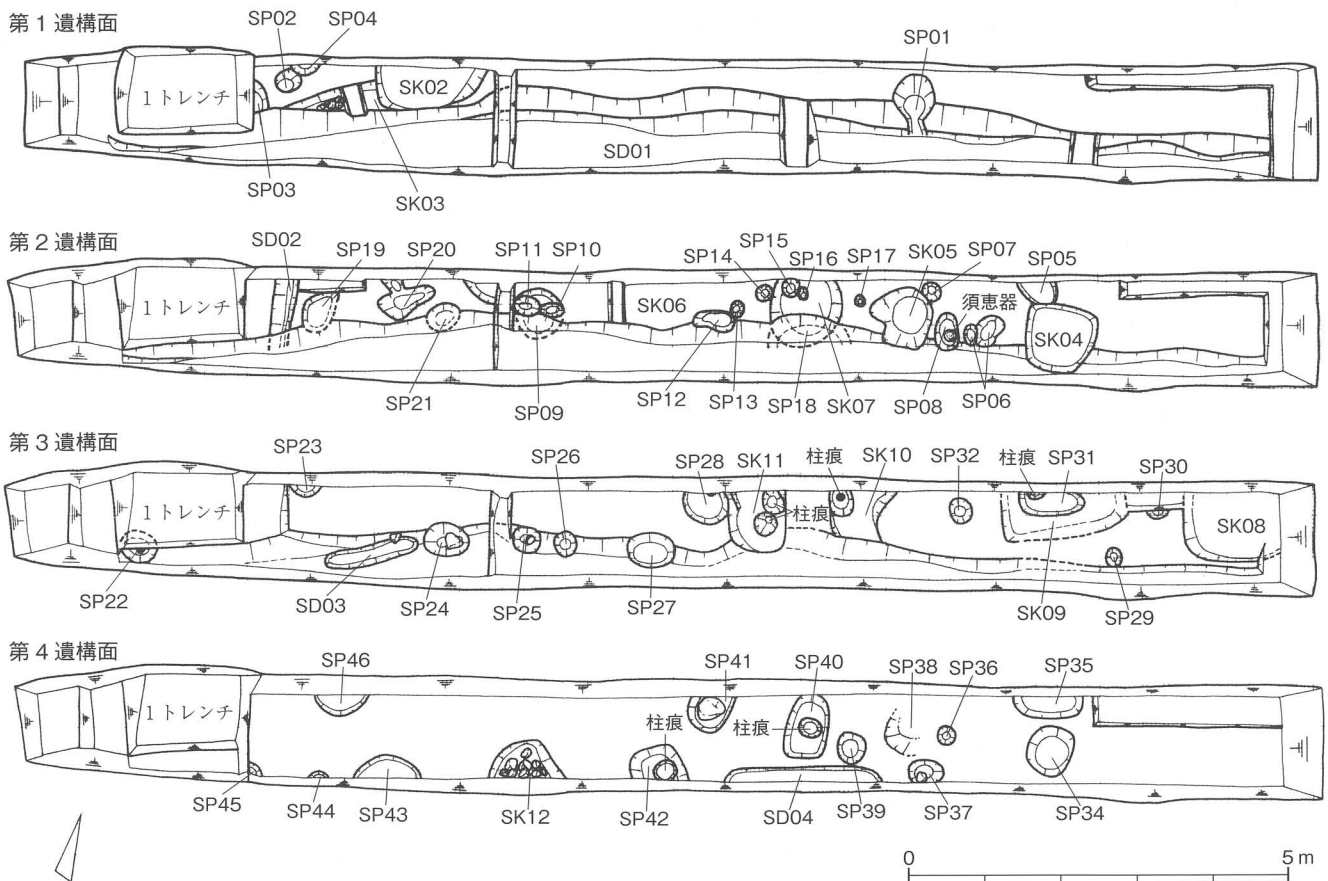
①Ⅰ区

Ⅰ区で検出した第1遺構面は5層をベースとする。検出した遺構は溝1条（SD01）・土坑2基（SK02・03）・ピット4基（SP01～04）である（第7・16図）。このうちSD01は便宜上溝としているが、その性格は耕作地の段差を埋めた人為的な盛土ないし埋土と考えるべき性格のものである。埋土は4つに分けられ、うち最上層は植栽により多少汚れているが、どの埋土も概ね均質であり、重機によって乱雑に埋められた現代のものではない。出土遺物についてもその下限は幕末から近代初頭であり、その頃までに何度かに分けて埋め立てられたものと考えている。その他は、SP01からくわんか碗が出土しており、近世に下ることが明らかであるが、他の遺構から出土した遺物は古代の土師器・須恵器の破片に限られている。

第2遺構面は6層および7層をベースとする遺構面である。検出した遺構は溝1条（SD02）・土坑4基

（SK04～07）・ピット17基（SP05～21）である（第7・18図）。なお、SD02は耕作地段差に伴うものと考えている。これらの遺構から出土した遺物は概ね土師器と須恵器の破片であり、出土遺物から年代を決め得る遺構は限られている。そのなかで、SP08はほぼ完形の飛鳥時代の須恵器杯蓋（第13図15）を出土しており（第14図）、遺構の年代を飛鳥時代と考えている。他には、SP12から古代瓦が、SK06から黒色土器が出土しているので、第2遺構面で検出した遺構の年代については、ひとまず飛鳥時代～平安時代前半に属するものと捉えている。

第3遺構面は7層下部において検出した遺構面である。検出した遺構は溝1条（SD03）・土坑4基（SK08～11）・ピット11基（SP22～32）である（第7図・19図）。第3遺構面検出遺構から出土した遺物も第2遺構面検出遺構同様、ほぼ土師器と須恵器に限定される。古代瓦が出土したSD03は、SD01底面で検出された遺構であるのでSD01の最深部に相当するのかもしれない。ただし、仮にそうであっても、SD01の上限を瓦の年代まで遡らせるのは無理であり、古い瓦が何らかの理由で混入したと捉えるべきであろう。その他、SP28からは飛鳥時代の須恵器杯身が出土している。第3遺構面検出遺構の年代は、概ね飛鳥時代～奈



第7図 Ⅰ区遺構平面図 1/100

良時代と考えている。

第4遺構面は8層をベースとする遺構面である。検出した遺構は溝1条（SD04）・土坑1基（SK12）・ピット12基（SP34～37・39～46）である（第7・17・20図）。このうち、SP37・41は花崗岩の根石をもち、SP40・42は柱痕が認められるなど、掘立柱建物の存在を想定できる遺構がみられる。SP41は根石の下から飛鳥時代の杯身が出土したが、この杯身は第3遺構面のSP28出土の須恵器杯身と接合したので、SP41はSP28の下位部分かもしれない。なお、拳大から人頭大の礫が多くみられたSK12から出土した土師器・須恵器には奈良時代以後に下るものや瓦器の破片とみられるものが含まれていることから、同一遺構面検出の他の遺構よりは新しい。SD01底面で検出されたことから、SD01の最深部ないしその直下の遺構とみるべきである。

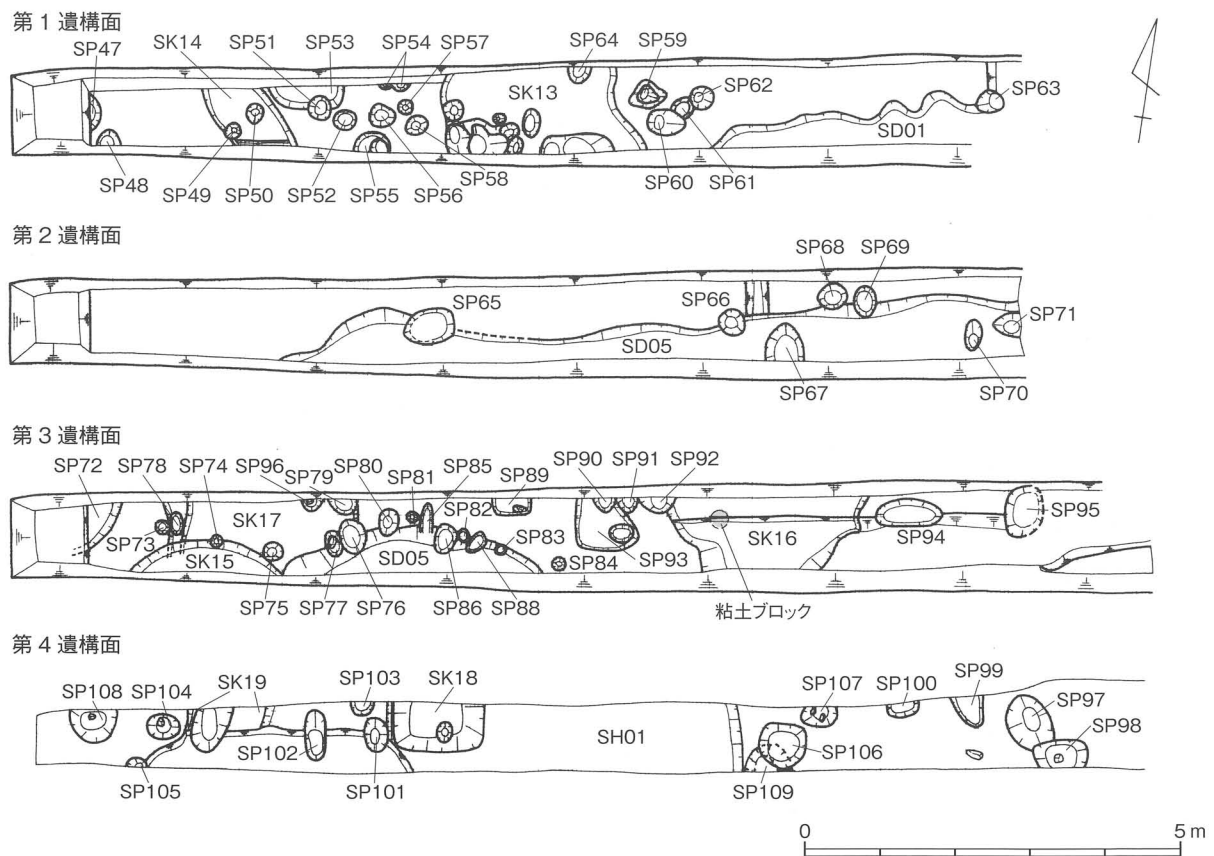
②Ⅱ区

Ⅱ区で検出した第1遺構面はⅠ区同様、5層をベースとする。検出した遺構は溝1条（Ⅰ区から続くSD01）・ピット18基（SP47～64）と便宜状土坑としたSK13・14である（第8・21図）。SK13は埋土に洪水堆積層が混じり、甌穴状のくぼみが集中した部分で、ある時期に流路であった可能性も考えられる。

遺物は奈良時代のものが主体となっている。また、SK14は特に遺物の包含が多く、土層のしまりの悪い部分である。その他、SP51・52・54・55・60・64の埋土も洪水堆積層の可能性が考えられる。第1遺構面検出の遺構から出土した遺物は土師器と須恵器片であるが、平安時代前半まで下るものも含まれている。

第2遺構面は6層をベースとする遺構面である。第1遺構面で検出したSD01の下に、同様の南に下る段差を埋めた溝状の遺構を認めた。これはSD05としていている。その他にピット7基（SP65～71）を確認している（第8・22図）。遺構出土の遺物は、概ね奈良時代を主体とする土師器・須恵器片であるが、SD01の下に位置するSP70からは瓦器も出土しており、第2遺構面検出遺構の中には平安時代に下る遺構も含まれていると考えられる。

第3遺構面は7層をベースとする遺構面で、検出した遺構の数も多い。検出遺構の内訳は土坑3基（SK15～17）・ピット24基（SP72～86・88～96）である（第8・23図）。SP81～84はいずれも径15cm程度の円形ピットで埋土も同一の褐色砂質土であることから、杭列を想定している。SK16は、炭化物や焼土を含む土や明黄褐色と灰黄褐色の粘土ブロックを含むことから、鍛冶に関わる遺構である可能性も考えられ



第8図 Ⅱ区遺構平面図 1/100

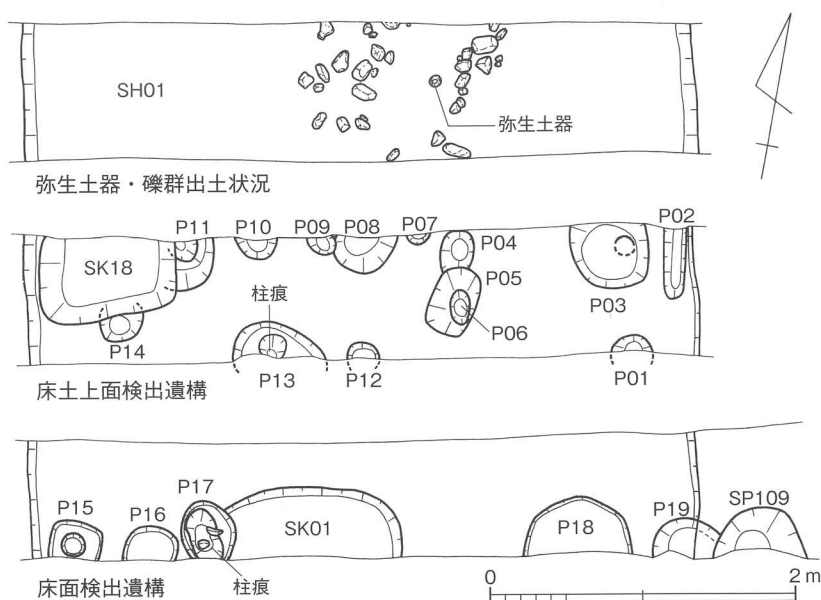
る。第3遺構面の遺構から出土した遺物は弥生土器・土師器・須恵器で、飛鳥時代～奈良時代の遺物が多い。その中で、SP75出土の弥生土器甕底部（第13図3）やSP78出土の土師器高杯脚部（第13図2）は弥生時代後期後半から古墳時代の遺構を含む可能性を示唆している。その他、SP95からは土師器・須恵器とともに縄文時代の打製石鏃が出土している。

第4遺構面は自然堆積層である8層をベースとする遺構面である。検出した遺構は、土坑2基（SK18・19）・ピット12基（SP97～104・106～109）と竪穴住居1棟（SH01）である（第8・12図）。これらの遺構の多くは弥生土器または土師器の碎片のみを出土するため、遺構の年代を弥生時代～古墳時代に遡らせて考えたい。須恵器を伴うSP107やSP109についても、須恵器の年代は飛鳥時代までにおさまるものであり（第13図10・20）、それより新しい遺構は確認できていない。

Ⅱ区中央で検出したSH01は東西4.4m、南北0.8m

にわたる（第8～12図）。東端と西端はほぼ直線なので方形の竪穴住居と考えている。覆土は層厚24cmで、褐灰色～灰黄褐色礫混じり砂質土に、にぶい黄褐色～褐色砂のブロックを混じえる不均質な層である。この土層中には拳大から人頭大の礫や弥生時代後期後半～終末期の土器が含まれていた。

この覆土を除去して検出した床土上面ではピット14基（SH-P01～14）を確認した。ただしSH-P03は奈良時代になる須恵器杯を出土しており、本来は上位遺構面の遺構と考える。SH01の床土は黒褐色細砂～シルトで層厚は約10cmである。床土を除去した底面で、さらに土坑1基（SH-K01）とピット5基（SH-P15～19）を確認している。このうち、SH-K01は炭層で充填された浅い土坑であり、竪穴住居の中央炉と考えられる。また、SH-P19はSH01と切合い関係をもつ、SH01よりも古いピットである。SH01の年代については、弥生時代後期後半～終末期と考えている。



第9図 SH01遺構平面図 1/50



第10図 SH01礫群掘削状況（東から）



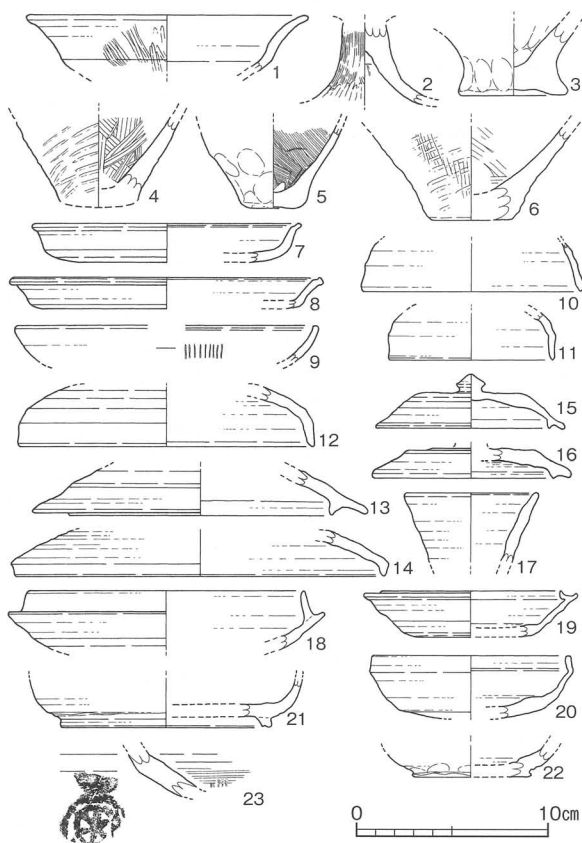
第11図 SH01床土上面検出遺構掘削状況（東から）（右上）



第12図 SH01床面検出遺構掘削状況（東から）（右下）

(5) 遺物

今回の調査で出土した遺物は27ℓ容量のコンテナ5箱分で、狭小な調査面積であるが、その質量ともに豊富である。その内訳は弥生土器・土師器・須恵器・黒色土器・緑釉陶器・瓦器・陶器・磁器・瓦（土師質・須恵質）・土製品（土錘）・打製石鏃等である。これらは飛鳥時代～奈良時代の資料が最も多く、弥生時代後期後半～古墳時代や平安時代前半のものも一定量認められる（第13図）。しかし、弥生時代後期よりも遡る資料は打製石鏃1点のみである。また、平安時代後半以後の遺物については、瓦器や東播系須恵器、中国製磁器がみられるが、その数は減少する。その他、近世



〔出土層位・遺構〕 7・22：Ⅱ区4層 13：Ⅱ区6・7層 19：S P28・41
 1：Ⅱ区7層 8：S K13 14：Ⅱ区6層 20：S P107
 2：S P78 9：S D05 15：S P08 21：Ⅰ区5層
 3：S P75 10：S P109 16：S P79 23：Ⅰ区4b層
 4・5：S H01 11：S P72 17：Ⅱ区1～4層
 6：S K08 12：Ⅰ区5層上部 18：Ⅰ区8層上面

第13図 遺物実測図 1 / 4



第14図 S P08遺物出土状況（南から）

後半から近代初頭の陶器・磁器も少量みられた。

遺構出土の遺物としては、Ⅱ区で検出したS H01出土の弥生時代後期後半～終末期の土器（4・5）や、S P08、S P28・41、S P72、S P79、S P107、S P109出土の飛鳥時代の須恵器が挙げられる（10・11・15・16・19・20）。さらに、S K13やS D05からは律令期の土師皿（8・9）も出土している。

4. 小 結

今回の調査地点は、限られた範囲を対象としたものであったにも関わらず、多くの遺構・遺物が出土した。このことは、今回の調査地点が寺田遺跡の中心部に位置していることを如実に物語っている。遺構から出土した遺物や包含層出土遺物の多くは、弥生時代後期後半～平安時代前半のものであるので、検出した遺構の多くもその時期のものと考えられる。主な遺構としては、Ⅱ区第4遺構面で検出したS H01が弥生時代後期後半～終末期の竪穴住居であり、同一面で検出したS P107・109などが飛鳥時代の柱穴の可能性が考えられるものである。さらに、Ⅰ区第4遺構面で検出したS P37・40・41・42は飛鳥時代の掘立柱建物の柱穴の可能性が考えられるほか、Ⅰ区第2遺構面検出のS P08も飛鳥時代の遺構の可能性はある。なお、平安時代後半以後の遺物が減少することから、今回の調査地はおそらくこの頃に耕作地化されたのであろう。

以上のように、今回の調査によって得られた情報は、これまでに積み重ねられてきた寺田遺跡の消長に掛る知見と見事に一致している。加えて、近世末から近代初頭頃までにS D01のような段差を埋め立てた痕跡が確認されることから、その頃に耕作地の再編成が行われたことも推測できた。

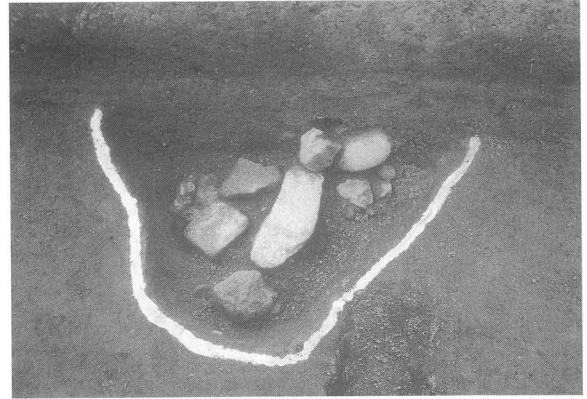
今後の取り扱いは、今回の調査によって擁壁工事掘削により損壊を受ける埋蔵文化財について記録できたので、工事に着手することが可能であると判断する。ただし、建物基礎部分においては、計画通りの掘削深度に留めて、掘削が遺物包含層に達することのないよう注意されたい。（白谷朋世・竹村忠洋）



第15図 遺構実測風景



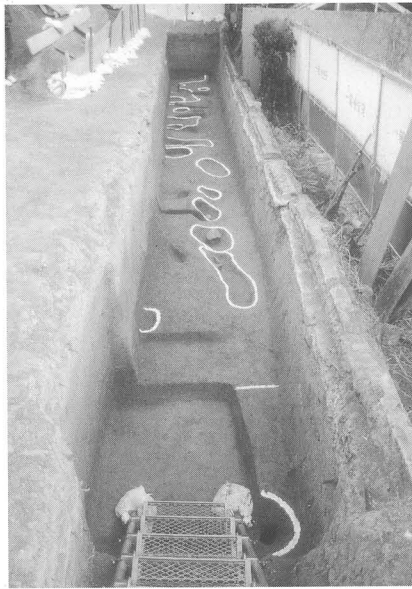
第16図 S D01掘削状況（北東から）



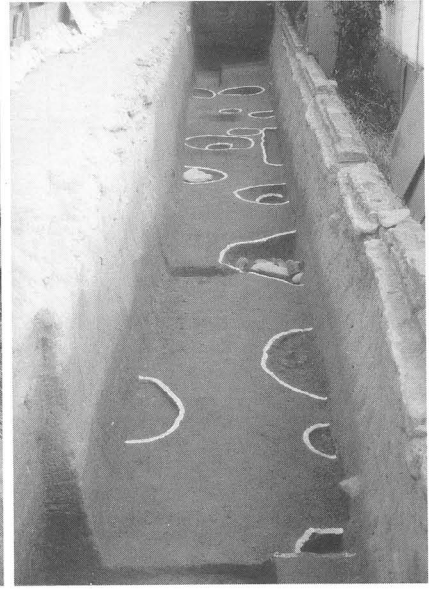
第17図 S K12掘削状況（北から）



第18図 I 区第2遺構面掘削状況
（西から）



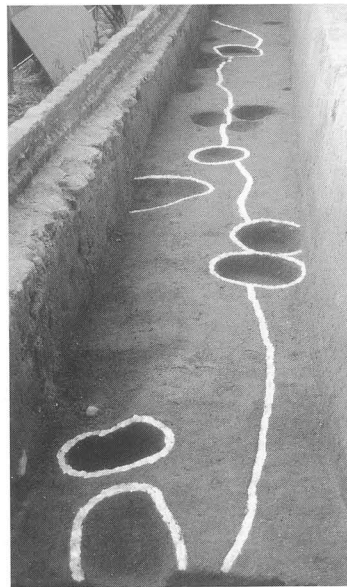
第19図 I 区第3遺構面掘削状況
（西から）



第20図 I 区第4遺構面掘削状況
（西から）



第21図 II 区第1遺構面
掘削状況（西から）



第22図 II 区第2遺構面
掘削状況（東から）



第23図 II 区第3遺構面
掘削状況（西から）



第24図 II 区第4遺構面
掘削状況（西から）

第2章 発掘調査の概要

第1表 寺田遺跡第171地点 遺構一覧表

I区第1遺構面検出遺構

遺構名	法 量	平面形態	埋 土	出土遺物	備 考
SD01	東西19.75m, 南北105cm, 深さ37.3cm	直線状 (南壁にかかる。Ⅱ区に続く)	①黄灰色 (2.5Y5/1) 粗砂混じり細砂 ②黄褐色 (2.5Y5/3) 細砂～シルト ③暗灰黄色 (2.5Y5/2) 細砂～シルト ④黄灰色 (2.5Y6/1) 細砂～シルト	土師器, 須恵器, 瓦, 瓦質土器, 陶器	植栽の影響でやや汚れている
SK01					SD01の上層であることが判明したため欠番
SK02	東西140cm, 南北55cm, 深さ33.1cm	不明 (北壁にかかる)	褐灰色 (10YR5/1) ～灰黄褐色 (10YR4/2) 粗砂～細砂	土師器, 須恵器, 瓦	北壁にかかる
SK03	東西150cm, 南北46cm, 深さ3cm	不明 (SD01に切られる)	褐灰色 (10YR5/1) ～灰黄褐色 (10YR5/2) 中砂混じり砂質土	土師器, 須恵器, 瓦, 礫	やや土壌化しており, 礫を含む
SP01	東西50cm, 南北80cm	不明 (SD01に切られる)	褐灰色 (10YR6/1) ～灰黄褐色 (10YR6/2) 粗砂混じり砂質土	土師器, 須恵器, 磁器	南側をSD01に切られる
SP02	長軸34cm, 短軸28cm	楕円形	灰白色 (2.5Y7/1) ～灰黄色 (2.5Y6/2) シルト	土師器, 須恵器	
SP03	東西24cm, 南北56cm, 深さ9.5cm	不明 (1トレンチにかかる)	灰色 (5Y6/1) 粗砂質土		I区西端で検出。 南側をSD01に切られる
SP04	東西43cm, 南北16cm	不明 (北壁にかかる)	①灰白色 (2.5Y7/1) ～灰黄色 (2.5Y6/2) シルト ②橙色 (7.5YR6/6) 粘性砂質土 ③褐灰色 (10YR6/1) ～灰黄褐色 (10YR5/2) 細砂	須恵器	

I区第2遺構面検出遺構

遺構名	法 量	平面形態	埋 土	出土遺物	備 考
SD02	検出長75cm, 幅25cm, 深さ12cm	直線状	①褐灰色 (10YR5/1) ～灰黄褐色 (10YR4/2) 粗砂混じり砂質土 + 褐色 (7.5YR4/6) ～にぶい赤褐色 (5YR5/4) 粘性砂質土 ②褐灰色 (10YR5/1) 粗砂混じり砂質土		耕作地差込に伴う溝
SK04	長軸90cm, 短軸80cm, 深さ20cm	隅丸方形	灰黄色 (2.5Y7/2～2.5Y6/2) 細砂質土～シルト	土師器, 須恵器	SP06埋土に似る
SK05	長軸85cm, 短軸80cm, 深さ37cm	不定形	①黄灰色 (2.5Y6/1) ～灰黄色 (2.5Y7/2) 細砂 ②黒褐色 (10YR3/2) 細砂 + 灰黄褐色 (10YR6/2) 砂質土 ③灰黄褐色 (10YR6/2) ～灰黄色 (2.5Y6/2) 砂質土 ④褐灰色 (10YR5/1) 粗砂混じり砂質土	土師器 土師器, 須恵器 土師器, 土鍾	
SK06	東西4m, 南北65cm, 深さ9cm	不明 (北壁にかかり, SD01に切られる)	褐灰色 (7.5YR5/1) ～褐色 (7.5YR4/3) 粗砂混じり砂質土	土師器, 須恵器, 黒色土器	しまりはややあまい
SK07	東西100cm, 南北50cm, 深さ26cm	不明 (北壁にかかり, SD01・SP18に切られる)	①黒褐色 (5YR3/1) 細砂 + 褐灰色 (10YR5/1) + 灰黄褐色 (10YR4/2) 粗砂混じり砂質土 ②灰色 (5Y6/1～7.5Y6/1) + 明褐色 (7.5YR5/6) 粗砂混じり砂質土		不均質でしまりはややあまい 東ほど8層と混じって粗砂混じりシルトになる
SP05	東西50cm, 南北30cm, 深さ6.4cm	不明 (北壁にかかり, SK04に切られる)	①灰白色 (2.5Y7/1) ～灰黄色 (2.5Y6/2) シルト ②橙色 (7.5YR6/6) 粘性砂質土 ③褐灰色 (10YR6/1) ～灰黄褐色 (10YR5/2) 細砂		鉄分沈着によるものか 粘性なし
SP06	長軸50cm, 短軸30cm, 深さ9cm	楕円形	黄灰色 (2.5Y6/1) ～暗灰黄色 (2.5Y5/2) 粗砂質土		
SP07	径25cm, 深さ2cm	円形	黄灰色 (2.5Y6/1) ～灰黄色 (2.5Y7/2) 細砂	土師器	SK05①層に似る
SP08	長軸50cm, 短軸30cm, 深さ22cm	楕円形	灰黄色 (2.5Y6/2) ～灰黄褐色 (10YR6/2) 粗砂混じり砂質土	須恵器 (杯蓋・Ⅲ型式)	6層ブロックを含む
SP09	長軸35cm, 短軸25cm, 深さ25cm	不明 (SD01に切られる)	にぶい黄橙色 (10YR6/3) 粗砂混じり砂質土		SD01に南側を切られる。 床面においてSP10・11を検出
SP10	長軸25cm, 短軸20cm, 深さ18cm	楕円形	黄灰色 (2.5Y5/1) ～褐灰色 (10YR5/1) 砂質土	須恵器	
SP11	東西35cm, 南北25cm, 深さ19cm	楕円形	褐灰色 (10YR5/1) 砂質土	土師器	
SP12	長軸55cm, 短軸20cm, 深さ9.7cm	不定形	黄灰色 (2.5Y5/1) ～暗灰黄色 (2.5Y5/2) 粗砂混じり砂質土	土師器, 須恵器, 瓦	
SP13	径20cm, 深さ3.3cm	円形	黄灰色 (2.5Y5/1) ～暗灰黄色 (2.5Y5/2) 砂質土		
SP14	径20cm, 深さ4cm	円形	灰色 (5Y6/1) 砂質土		
SP15	径25cm, 深さ4cm	円形	灰色 (5Y6/1) 砂質土	土師器, 須恵器	
SP16	径10cm, 深さ4cm	円形	灰色 (5Y6/1) 粗砂混じり砂質土	土師器	
SP17	径10cm, 深さ4cm	円形	にぶい黄褐色 (10YR5/4) ～黄褐色 (10YR5/6) 砂質土		
SP18	東西90cm, 南北35cm, 深さ22.2cm	不明 (SD01に切られ, SK07を切る)	黄灰色 (2.5Y6/1) 粗砂混じり砂質土	土師器	
SP19	東西45cm, 南北40cm, 深さ8cm	不明 (SD01に切られる)	黄灰色 (2.5Y6/1～2.5Y5/1) + 褐色 (7.5YR4/3) 砂質土	土師器, 瓦	4層類似層。しまりはあまい
SP20	東西75cm, 南北70cm, 深さ15cm	不定形	褐灰色 (10YR6/1) ～にぶい黄褐色 (10YR6/3) 細砂質土～中砂質土	土師器, 須恵器	
SP21	東西40cm, 南北20cm, 深さ10.1cm	不明 (SD01に切られる)	褐灰色 (10YR5/1) ～灰黄褐色 (10YR5/2) 中砂混じり砂質土		しまりは良い

I区第3遺構面検出遺構

遺構名	法 量	平面形態	埋 土	出土遺物	備 考
SD03	長軸120cm, 短軸25cm, 深さ8.8cm	長楕円形	褐灰色 (10YR5/1) 粘性砂質土	須恵器, 瓦, 礫	粘性弱い
SK08	東西110cm, 南北70cm, 深さ7.9cm	不明 (サブトレにかかる)	褐灰色 (10YR4/1) ～灰黄褐色 (10YR4/2) 細砂～シルト	土師器	周辺遺構より礫・粗砂の含有が少ない
SK09	東西165cm, 南北70cm, 深さ10.8cm	不明 (北壁にかかる)	褐灰色 (10YR4/1) ～黒褐色 (10YR3/2) 砂質土		
SK10	東西85cm, 南北70cm, 深さ4.7cm	不明 (北壁にかかり, SD01に切られる)	褐灰色 (10YR4/1) ～灰黄褐色 (10YR4/2) 砂質土		SK11埋土より灰色がかかる。 柱痕あり
SK11	東西75cm, 南北85cm, 深さ15.6cm	不明 (北壁にかかる)	褐灰色 (10YR4/1) ～黒褐色 (10YR3/2) 砂質土	土師器	SP28埋土より灰褐色がかかる。 柱痕2つあり
SP22	東西45cm, 南北20cm, 深さ29.8cm	不明 (1トレンチにかかる)	①褐灰色 (10YR5/1) ～灰黄褐色 (10YR5/2) 砂質土 ②灰色 (5Y5/1) 砂質土	土師器	柱痕部分。②より黄色がかかる
SP23	東西40cm, 南北15cm, 深さ5cm	不明 (北壁にかかる)			埋土は7層に類似
SP24	長軸60cm, 短軸50cm, 深さ16.7cm	隅丸三角形	①灰黄褐色 (10YR6/2) ～にぶい黄褐色 (10YR6/3) 粗砂混じり粘性砂質土 ②灰色 (7.5Y5/1～10Y5/1) 粘性砂質土 ③灰黄褐色 (10YR5/2) 粗砂	土師器	粘性強い 粘性弱い ビット埋土ではなくベース土
SP25	径40cm, 深さ22.1cm	円形	灰色 (7.5Y6/1) ～灰オリーブ色 (7.5Y6/2) 中砂	土師器, 須恵器	
SP26	径30cm, 深さ6.4cm	円形	褐灰色 (10YR5/1) ～灰黄褐色 (10YR5/2) 中砂混じり砂質土	礫	埋土はSP27と同じ
SP27	長軸60cm, 短軸50cm, 深さ14cm	楕円形	褐灰色 (10YR5/1) ～灰黄褐色 (10YR5/2) 中砂混じり砂質土	土師器	埋土はSP26と同じ
SP28	長軸50cm, 短軸40cm, 深さ11cm	不明 (北壁にかかる)	褐色 (7.5YR4/3) ～灰黄色 (2.5Y6/2) 砂質土	須恵器	ややしまりがあまい
SP29	径20cm, 深さ5cm	円形	褐灰色 (10YR4/1) ～灰黄褐色 (10YR4/2) 細砂～シルト		SK08埋土に似る
SP30	東西25cm, 南北10cm, 深さ7cm	不明 (サブトレにかかる)	褐灰色 (10YR5/1) 粗砂質土		
SP31	東西85cm, 南北30cm, 深さ5cm	不明 (北壁にかかる)	黒褐色 (10YR3/1) ～黒色 (10YR2/1) 礫混じり砂質土		1cm大の礫を含む。柱痕あり
SP32	径30cm, 深さ6.6cm	円形	褐灰色 (10YR4/1) ～黄灰色 (2.5Y5/1) 砂質土		

Ⅰ区第4遺構面検出遺構

遺構名	法 量	平面形態	埋 土	出土遺物	備 考
SD04	東西210cm, 南北20cm, 深さ5.9cm	不明（南壁にかかる）	褐灰色（10YR4/1）粗砂混じり砂質土		不鮮明で汚れている
SK12	東西100cm, 南北55cm, 深さ26cm	不明（南壁にかかる）	灰黄褐色（10YR5/2～10YR4/2）粗砂～シルト	土師器, 須恵器, 瓦器か, 礫	最上部は土壌化している。下ほど粒子が細かく、ラミナ状堆積であり、雨による流入を考える。
SP34	長軸65cm, 短軸60cm, 深さ15.2cm	隅丸方形	灰色（N5/0）～暗灰色（N3/0）+ 灰白色（5Y7/2）～浅黄色（5Y7/3）粗砂混じり砂質土	土師器, 須恵器	不鮮明で汚れている
SP35	東西95cm, 南北30cm, 深さ7.2cm	不明（北壁にかかる）	灰色（7.5Y6/1～7.5Y5/1）粗砂混じりシルト		
SP36	径25cm, 深さ6.1cm	円形	灰色（7.5Y4/1）粗砂混じり砂質土		埋土はSP37と同じ
SP37	東西45cm, 南北30cm, 深さ7.8cm	不明（南壁にかかる）	灰色（7.5Y4/1）粗砂混じり砂質土	土師器, 須恵器, 礫	埋土はSP36と同じ
SP38					上層遺構, 第2遺構面SK05の掘り残し
SP39	径40cm, 深さ4cm	円形	灰色（7.5Y4/1）粗砂混じり砂質土		埋土はSP36に似る
SP40	長軸85cm, 短軸60cm, 深さ8cm	隅丸方形	灰色（7.5Y6/1～7.5Y5/1）粗砂混じりシルト	土師器	埋土はSP35に似る。柱痕あり
SP41	長軸58cm, 短軸42cm, 深さ13cm	不明（北壁にかかる）	黄灰色（2.5Y6/1）+ 灰黄褐色（10YR4/2）砂質土	須恵器, 礫	埋土はSP42と同じ
SP42	東西65cm, 南北60cm, 深さ12cm	不明（南壁にかかる）	黄灰色（2.5Y6/1）+ 灰黄褐色（10YR4/2）砂質土	土師器	埋土はSP41と同じ。柱痕あり
SP43	東西85cm, 南北30cm, 深さ4.5cm	不明（南壁にかかる）	灰色（7.5Y5/1）～灰オリーブ色（7.5Y5/2）粗砂～粗砂混じり砂質土		SK12と同じく雨による堆積と考えられる。 鶏卵大以下の礫を含む
SP44	東西25cm, 南北10cm, 深さ3.6cm	不明（南壁にかかる）	灰色（7.5Y5/1）～灰オリーブ色（7.5Y5/2）粗砂～粗砂混じり砂質土		SK12と同じく雨による堆積と考えられる。 鶏卵大以下の礫を含む
SP45	東西15cm, 南北20cm, 深さ9.5cm	不明（南壁にかかる）	灰オリーブ色（7.5Y5/2～7.5Y5/3）細砂～シルト		
SP46	東西65cm, 南北25cm, 深さ4cm	不明（北壁にかかる）	褐灰色（10YR4/1）～黒褐色（10YR3/1）砂質土		花崗岩風化粒を含む

Ⅱ区第1遺構面検出遺構

遺構名	法 量	平面形態	埋 土	出土遺物	備 考
SK13	東西270cm, 南北120cm, 深さ19cm	不明（南壁・北壁にかかる）	褐灰色（10YR5/1）～灰黄褐色（10YR5/2）粗砂混じり砂質土	土師器, 須恵器	南壁では多くの層に分かれる
SK14	東西90cm, 南北105cm, 深さ6cm	不明（南壁・北壁にかかる）	褐灰色（10YR6/1）～灰黄褐色（10YR5/2）砂質土	土師器, 須恵器	しまりが悪く、遺物が多い
SP47	東西15cm, 南北45cm, 深さ15cm	不明（サブトレにかかる）	灰色（5Y6/1～5Y5/1）シルト～粘性砂質土	土師器, 須恵器	5層と比べて鉄分少ない
SP48	東西30cm, 南北20cm, 深さ11cm	不明（南壁にかかる）	褐灰色（10YR5/1）～灰黄褐色（10YR5/2）粗砂混じり砂質土	土師器	
SP49	径20cm, 深さ4cm	円形	褐灰色（10YR6/1）シルト～細砂		SP55①層に似る
SP50	径25cm, 深さ5cm	円形	褐灰色（10YR6/1）シルト～細砂	土師器	SP55①層に似る
SP51	径30cm, 深さ8cm	円形	褐灰色（10YR6/1）～浅黄褐色（10YR8/4）粗砂～シルト	土師器, 須恵器	上ほど粒子が粗い。 雨による堆積と考えられる
SP52	径30cm, 深さ9cm	円形	褐灰色（10YR6/1）～浅黄褐色（10YR8/4）粗砂～シルト	土師器, 須恵器	上ほど粒子が粗い。 雨による堆積と考えられる
SP53	東西100cm, 南北25cm, 深さ7cm	不明（北壁にかかる）	褐灰色（10YR6/1）～灰黄褐色（10YR5/2）砂質土	土師器, 須恵器	SP58埋土に似る
SP54	東西40cm, 南北10cm, 深さ9cm	不明（北壁にかかる）	褐灰色（10YR6/1）～浅黄褐色（10YR8/4）粗砂～シルト		上ほど粒子が粗い。 雨による堆積と考えられる
SP55	東西50cm, 南北25cm, 深さ17cm	不明（南壁にかかる）	①褐灰色（10YR6/1）シルト～細砂 ②褐灰色（10YR6/1）～浅黄褐色（10YR8/4）粗砂～シルト	土師器, 須恵器	雨による堆積と考えられる
SP56	径35cm, 深さ7cm	円形	褐灰色（10YR6/1）～灰黄褐色（10YR5/2）砂質土	土師器, 須恵器	SP58埋土に似る
SP57	径20cm, 深さ5cm	円形	褐灰色（10YR6/1）～灰黄褐色（10YR5/2）砂質土	土師器, 須恵器	SP58埋土に似る
SP58	径30cm, 深さ8cm	円形	褐灰色（10YR6/1）～灰黄褐色（10YR5/2）砂質土	土師器, 須恵器	5層より鉄分多い
SP59	長軸50cm, 短軸40cm, 深さ18cm	不定形	①褐灰色（10YR6/1）～灰黄褐色（10YR5/2）砂質土 ②黄灰色（2.5Y6/1～2.5Y5/1）細砂	土師器, 須恵器	SP58埋土に似る
SP60	長軸50cm, 短軸40cm, 深さ19cm	楕円形	①褐灰色（10YR6/1）～灰黄褐色（10YR6/2）細砂～シルト ②褐灰色（10YR6/1）～浅黄褐色（10YR8/4）粗砂 ③褐灰色（10YR6/1）～灰黄褐色（10YR5/2）砂質土	土師器, 須恵器	上ほど粒子が粗い。 雨による堆積と考えられる SP58埋土に似る
SP61	東西30cm, 南北20cm, 深さ9cm	不明（SP60・62に切られる）	褐灰色（10YR6/1）～灰黄褐色（10YR5/2）砂質土	土師器	SP58埋土に似る
SP62	長軸35cm, 短軸30cm, 深さ9cm	楕円形	褐灰色（10YR6/1）シルト～細砂	須恵器	SP55①層に似る
SP63	径35cm, 深さ12cm	円形	灰黄色（2.5Y6/2）～暗黄褐色（2.5Y5/2）砂質土	須恵器	
SP64	東西25cm, 南北17cm, 深さ7cm	不明（北壁にかかる）	灰白色（7.5Y7/1～7.5Y7/2）シルト + 浅黄褐色（10YR8/3～10YR8/4）中砂		雨による堆積と考えられる

Ⅱ区第2遺構面検出遺構

遺構名	法 量	平面形態	埋 土	出土遺物	備 考
SD05	東西9.7m, 南北90cm, 深さ20cm	南壁にかかる	黄灰色（2.5Y6/1）細砂～シルト	弥生土器, 土師器, 須恵器	埋土はSD01④層に似る
SP65	東西60cm, 南北50cm, 深さ17cm	楕円形か（SD05に切られる）	①黄灰色（2.5Y6/1）～灰黄色（2.5Y6/2）砂質土 ②褐灰色（10YR4/1）～黒褐色（10YR3/1）砂質土	土師器, 須恵器	
SP66	径35cm, 深さ7cm	円形	褐灰色（10YR6/1）～灰黄褐色（10YR6/2）粗砂混じり砂質土	土師器, 須恵器	
SP67	東西50cm, 南北50cm, 深さ13cm	不明（南壁にかかる）	黄灰色（2.5Y6/1）～灰黄色（2.5Y7/2）細砂	土師器, 須恵器	
SP68	径35cm, 深さ11cm	円形	褐灰色（10YR5/1）～灰黄褐色（10YR5/2）～黄灰色（2.5Y6/1）粗砂混じり砂質土	土師器	SP69埋土より黄灰色がかかる
SP69	東西25cm, 南北40cm, 深さ13cm	楕円形	褐灰色（10YR5/1）～灰黄褐色（10YR5/2）粗砂混じり砂質土	須恵器	
SP70	東西20cm, 南北40cm, 深さ14cm	楕円形	黄灰色（2.5Y6/1～2.5Y5/1）中砂混じり砂質土	土師器, 須恵器, 瓦器	
SP71	東西35cm, 南北30cm, 深さ34cm	不明（1トレンチにかかる）	灰白色（2.5Y7/1）～黄灰色（2.5Y6/1）中砂混じり砂質土	土師器, 須恵器	

Ⅱ区第3遺構面検出遺構

遺構名	法 量	平面形態	埋 土	出土遺物	備 考
SK15	東西205cm, 南北40cm, 深さ29cm	不明（南壁にかかる）	褐灰色（10YR5/1）～灰黄褐色（10YR4/2）砂質土	土師器, 須恵器	7層よりやや灰色がかかる
SK16	東西260cm, 南北100cm, 深さ34cm	不明（南壁・北壁にかかる）	①明黄褐色（10YR6/8）+ 灰黄褐色（10YR6/2）粗砂混じり粘土 ②灰黄褐色（10YR5/2～10YR6/2）砂質土 ③褐灰色（10YR4/1）～黒褐色（10YR3/1）砂質土～シルト ④明赤褐色（5YR5/6）～赤褐色（5YR4/6）シルト ⑤褐色（7.5YR4/3）～にぶい黄褐色（10YR4/3）砂質土 ⑥灰黄褐色（10YR4/2）～にぶい黄褐色（10YR4/3）砂質土 ⑦灰黄褐色（10YR4/2）～褐灰色（10YR4/1）粗砂混じり砂質土 ⑧黄灰色（2.5Y5/1～2.5Y4/1）粗砂混じり砂質土	土師器	①を少し含む ④を少し含む 焼土や炭化物を多く含む ③よりも褐色がかかる 炭化物を少し含む 炭化物を少し含む
SK17	東西260cm, 南北100cm, 深さ16cm	不明（北壁にかかる）	褐灰色（10YR4/1）～黒褐色（10YR3/1）粗砂混じり砂質土		SD05, SK15などに切られる
SP72	東西45cm, 南北60cm, 深さ18.5cm	不明（北壁・サブトレにかかる）	褐灰色（10YR4/1）～灰黄褐色（10YR4/2）細砂～シルト	土師器, 須恵器	
SP73	径20cm, 深さ4cm	円形	灰褐色（7.5YR4/2）～褐灰色（10YR6/1）粗砂混じり砂質土		

第2章 発掘調査の概要

SP74	径15cm, 深さ2cm	円形	褐灰色 (10YR5/1) ～灰黄褐色 (10YR5/2) 砂質土		
SP75	径25cm, 深さ17cm	円形	褐灰色 (10YR4/1) ～灰黄褐色 (10YR4/2) 粗砂混じり砂質土	弥生土器, 須恵器	
SP76	長軸50cm, 短軸35cm, 深さ28cm	楕円形	褐灰色 (10YR5/1) ～灰黄褐色 (10YR4/2) 砂質土	土師器	7層よりやや灰色がかかる
SP77	長軸35cm, 短軸20cm, 深さ6cm	楕円形	褐灰色 (10YR5/1) ～灰黄褐色 (10YR4/2) 砂質土	礫	7層よりやや灰色がかかる
SP78	長軸32cm, 短軸19cm, 深さ5cm	楕円形	褐灰色 (10YR4/1) ～黒褐色 (10YR3/1) 粗砂混じり砂質土	土師器 (高杯脚部)	
SP79	東西40cm, 南北25cm, 深さ16cm	不明 (北壁にかかる)	褐灰色 (10YR5/1) ～灰黄褐色 (10YR4/2) 粗砂混じり砂質土	須恵器	
SP80	長軸35cm, 短軸25cm, 深さ15cm	楕円形	褐灰色 (10YR5/1) ～灰黄褐色 (10YR5/2) 砂質土	土師器	
SP81	径15cm, 深さ12.6cm	円形	褐色 (7.5YR4/4) 砂質土		杭列
SP82	径15cm, 深さ13.2cm	円形	褐色 (7.5YR4/4) 砂質土		杭列
SP83	径15cm, 深さ13.2cm	円形	褐色 (7.5YR4/4) 砂質土		杭列
SP84	径15cm, 深さ10.8cm	円形	褐色 (7.5YR4/4) 砂質土		杭列
SP85	東西15cm, 南北40cm, 深さ6.3cm	不明 (SD05に切られる)	褐灰色 (10YR5/1) ～灰黄褐色 (10YR4/2) 砂質土		7層よりやや灰色がかかる
SP86	長軸40cm, 短軸30cm, 深さ19cm	楕円形	①褐灰色 (10YR5/1) ～灰黄褐色 (10YR5/2) 砂質土 ②褐灰色 (10YR4/1) ～黒褐色 (10YR3/1) 砂質土	土師器, 須恵器	
SP88	長軸35cm, 短軸20cm, 深さ7cm	隅丸三角形	褐灰色 (10YR5/1～10YR4/1) 砂質土 + 浅黄色 (2.5Y7/3) 砂質土	土師器	
SP89	東西50cm, 南北25cm, 深さ9cm	不明 (北壁にかかる)	褐灰色 (10YR4/1) ～灰黄褐色 (10YR4/2) 砂質土		
SP90	東西30cm, 南北20cm, 深さ17.5cm	不明 (北壁にかかる)	褐灰色 (10YR6/1～10YR5/1) 砂質土		
SP91	東西30cm, 南北20cm, 深さ4.2cm	不明 (北壁にかかる)	褐灰色 (10YR6/1～10YR5/1) 砂質土	土師器	
SP92	東西45cm, 南北25cm, 深さ14.3cm	不明 (北壁にかかる)	褐灰色 (10YR6/1～10YR5/1) 粗砂混じり砂質土	礫	
SP93	東西80cm, 南北70cm, 深さ15.9cm	不明 (北壁にかかる)	褐灰色 (10YR6/1) ～灰黄褐色 (10YR6/2) 砂質土	土師器	
SP94	東西90cm, 南北40cm, 深さ24.6cm	楕円形	褐灰色 (10YR4/1) ～黒褐色 (10YR3/2) 砂質土	土師器	
SP95	東西40cm, 南北70cm, 深さ25cm	不明 (1トレンチに切られる)	褐灰色 (7.5YR4/1) ～黒褐色 (7.5YR3/2) 砂質土	土師器, 須恵器, 石鏝	
SP96	東西25cm, 南北15cm, 深さ11cm	不明 (北壁にかかる)	黒褐色 (7.5YR3/1) 粘性砂質土		

Ⅱ区第4遺構面検出遺構

遺構名	法 量	平面形態	埋 土	出土遺物	備 考
SK18	東西90cm, 南北70cm, 深さ28cm	不明 (北壁にかかる)	①黄灰色 (2.5Y5/1) ～暗灰黄色 (2.5Y5/2) 細砂 ②黄灰色 (2.5Y4/1) ～暗灰黄色 (2.5Y4/2) 細砂 ③灰色 (5Y4/1) ～黄灰色 (2.5Y4/1) 礫混じり砂質土 ④褐灰色 (10YR4/1) ～黒褐色 (10YR3/1) 粗砂混じりシルト	土師器	柱痕か
SK19	東西110cm, 南北30cm, 深さ20cm	不明 (北壁にかかる)	①褐灰色 (10YR4/1) ～灰黄褐色 (10YR4/2) 砂質土 ②褐灰色 (7.5YR4/1) ～褐色 (7.5YR4/3) シルト～砂質土 ③暗灰黄色 (2.5Y5/2) ～黄褐色 (2.5Y5/3) 細砂～シルト	土師器	
SP97	東西75cm, 南北60cm, 深さ12cm	楕円形 (SP98に切られる)	褐灰色 (7.5YR5/1) ～灰褐色 (7.5YR5/2) 粗砂混じり粘性砂質土	土師器	
SP98	東西70cm, 南北45cm, 深さ32cm	不明 (南壁にかかる)	①褐灰色 (7.5YR5/1～7.5YR4/1) 粗砂混じり粘性砂質土 ②褐灰色 (7.5YR4/1) ～灰褐色 (7.5YR4/2) 細砂混じり粘性砂質土		
SP99	東西40cm, 南北45cm, 深さ6.4cm	不明 (北壁にかかる)	黄灰色 (2.5Y4/1) ～暗灰黄色 (2.5Y5/2) 細砂		
SP100	東西40cm, 南北20cm, 深さ8.9cm	不明 (北壁にかかる)	黄灰色 (2.5Y5/1) ～暗灰黄色 (2.5Y5/2) 粗砂混じり砂質土		
SP101	長軸45cm, 短軸30cm, 深さ12cm	楕円形	黄灰色 (2.5Y4/1) ～黒褐色 (10YR3/2) 礫混じり粗砂		8層が汚れたものか
SP102	長軸70cm, 短軸30cm, 深さ21cm	楕円形	褐灰色 (10YR4/1) ～にぶい黄褐色 (10YR4/3) 礫混じり細砂～シルト		
SP103	東西30cm, 南北20cm, 深さ6.4cm	不明 (北壁にかかる)	褐灰色 (10YR4/1) ～にぶい黄褐色 (10YR4/3) 礫混じり細砂～シルト		SP102埋土に似る
SP104	長軸45cm, 短軸35cm, 深さ10.1cm	楕円形	褐灰色 (10YR4/1) ～灰黄褐色 (10YR4/2) 粗砂混じり砂質土		
SP105	東西25cm, 南北15cm, 深さ11.6cm	不明 (南壁にかかる)			SK15の掘り残し
SP106	径60cm, 深さ7.2cm	円形	黄灰色 (2.5Y4/1) ～褐灰色 (10YR4/1) 粗砂混じり砂質土～シルト	土師器	
SP107	東西45cm, 南北30cm, 深さ10.2cm	不明 (北壁にかかる)	褐灰色 (10YR5/1) ～灰黄褐色 (10YR5/2) 砂質土	土師器, 須恵器, 礫	
SP108	東西60cm, 南北45cm, 深さ15.8cm	不明 (北壁にかかる)	褐灰色 (10YR4/1) ～灰黄褐色 (10YR4/2) 細砂～シルト	土師器, 炭化物	SP72下層
SP109	東西60cm, 南北30cm, 深さ41cm	不明 (南壁にかかる)	①褐灰色 (10YR4/1) ～灰黄褐色 (10YR4/2) 細砂～シルト ②褐灰色 (10YR4/1) ～黄灰色 (2.5Y4/1) 粗砂混じりシルト～細砂	土師器, 須恵器	
SH01	東西4.4m, 南北80cm, 深さ34cm	不明 (南壁・北壁にかかる)	①褐灰色 (10YR4/1) ～灰黄褐色 (10YR4/2) 礫混じり砂質土 + にぶい黄褐色 (10YR4/3) ～褐色 (10YR4/4) 砂 ②黒褐色 (7.5YR3/1～7.5YR2/2) 細砂～シルト	弥生土器, 礫	堅穴住居覆土 堅穴住居床土

S H01内検出遺構

遺構名	法 量	平面形態	埋 土	出土遺物	備 考
K01	東西120cm, 南北46cm, 深さ9cm	不明 (南壁にかかり、P17に切られる)	黒色 (N2/0) ～灰色 (N4/0) 炭混じり粗砂	弥生土器	炭層。中央炉
P01	東西26cm, 南北10cm, 深さ8cm	不明 (南壁にかかる)	黄灰色 (2.5Y4/1) ～暗灰黄色 (2.5Y4/2) 砂質土		
P02	東西14cm, 南北48cm, 深さ5.9cm	不明 (北壁にかかる)	褐色 (7.5YR4/3) 粗砂混じり粘性砂質土		
P03	東西50cm, 南北44cm, 深さ70.7cm	不明 (北壁にかかる)	①黄灰色 (2.5Y5/1) ～にぶい黄色 (2.5Y6/3) 砂質土 ②黄灰色 (2.5Y5/1) 砂質土	土師器, 須恵器	
P04	長軸26cm, 短軸22cm, 深さ6cm	楕円形 (P05に切られる)	黄灰色 (2.5Y5/1) ～暗灰黄色 (2.5Y5/2) 砂質土	弥生土器	
P05	長軸46cm, 短軸30cm, 深さ5cm	隅丸方形	褐灰色 (10YR4/1) ～灰黄褐色 (10YR4/2) 砂質土		検出時はP05とP06は別遺構と考えた
P06			褐灰色 (10YR4/1) 砂質土		P05の柱痕部分
P07	東西16cm, 南北6cm, 深さ3.6cm	不明 (北壁にかかる)	暗褐色 (7.5YR3/4) 粗砂混じり砂質土		鉄分多い
P08	東西42cm, 南北24cm, 深さ5.4cm	不明 (北壁にかかる)	黄灰色 (2.5Y4/1) ～灰色 (5Y5/1) 砂質土		
P09	東西18cm, 南北12cm, 深さ4.4cm	不明 (北壁にかかる)	黄灰色 (2.5Y4/1) ～黒褐色 (10YR3/2) 砂質土		
P10	東西30cm, 南北14cm, 深さ8.1cm	不明 (北壁にかかる)	灰色 (N4/0) 粗砂		
P11	東西26cm, 南北32cm, 深さ12.2cm	不明 (北壁にかかり、SK18に切られる)	①褐灰色 (7.5YR4/1) 粗砂混じり粘性砂質土 ②にぶい黄褐色 (10YR5/4) 粗砂～中砂	弥生土器	
P12	東西20cm, 南北10cm, 深さ3cm	不明 (南壁にかかる)	黄灰色 (2.5Y5/1) ～暗灰黄色 (2.5Y5/2) 砂質土		
P13	東西61cm, 南北26cm, 深さ15.4cm	不明 (南壁にかかる)	①暗灰色 (N3/0) 砂質土 ②褐灰色 (10YR4/1) ～灰黄褐色 (10YR4/2) 砂質土	弥生土器	柱痕部分
P14	東西28cm, 南北20cm, 深さ10.7cm	不明 (SK18に切られる)	黄灰色 (2.5Y4/1) 粗砂混じり砂質土		
P15	東西32cm, 南北26cm, 深さ10.3cm	不明 (南壁にかかる)	褐灰色 (10YR4/1) ～灰黄褐色 (10YR4/2) 粗砂混じり砂質土		
P16	東西36cm, 南北22cm, 深さ6cm	不明 (南壁にかかる)	褐灰色 (10YR4/1) 粗砂混じり砂質土		
P17	東西36cm, 南北40cm, 深さ21cm	不明 (南壁にかかる)	褐灰色 (10YR4/1) ～灰黄褐色 (10YR5/2) 粗砂混じり砂質土	弥生土器	柱痕はやや褐色がかかり、細砂質土
P18	東西72cm, 南北38cm, 深さ10cm	不明 (南壁にかかる)	黄灰色 (2.5Y4/1) 中砂～粗砂		床は礫多い
P19	東西44cm, 南北30cm, 深さ27cm	不明 (南壁にかかり、SP109に切られる)	黄灰色 (2.5Y4/1) ～暗灰黄色 (2.5Y5/2) 細砂～シルト		SH01に先立つ遺構

第3節 清水遺跡（第22地点）

1. 調査に至る経緯

平成7年1月17日、淡路島北部を震源域とするマグニチュード7.2の大規模な地震が発生した。兵庫県南部地震であり、その後、「阪神・淡路大震災」と称されるようになった。震度7が測定された本市域では、壊滅的な被害がもたらされ、死亡者440人、全壊4,722棟、半壊4,060棟の被災建物を数え、全・半壊併せて56.9%にのぼる著しい建物被害率であることが判明した。

本遺跡の所在する芦屋市清水町の周辺一帯は、中でも重度の被害地域であり、全壊建物の比率が70%を超えている。被害直後からライフラインの復旧工事などが進められたが、抜本的な復興計画が必要な地域と考えられ、芦屋市は地震直後の平成7年2月8日、「芦屋市震災復興基本方針概要」を示し、1. 震災復興の基本方針、2. 被災者への住宅の供給と公共空間の確保、3. 被災集中地区における復興事業の計画内容を明らかにした。被災がとくに集中している地区では、安全性の確保のため、地区全体での取り組みが必要と考えられ、土地区画整理事業や市街地再開発事業などの整備事業を進めることによって市街地の新たな形成を図るため、必要に応じて建築基準法第84条の区域指定を行い、建築を大幅に制限した。

以上の復興方針案に基づいて設けられた事業メニューが(1)土地区画整理事業 (2)市街地再開発事業 (3)住環境整備事業 (4)街路事業 (5)その他であり、(1)については、①中央地区（約13ha）と②西部地区（約21.2ha）、(2)についてはJ R芦屋駅南地区（約3.4ha）、(3)については若宮地区（約2.4ha）、(4)については、①山手幹線②川西線③松浜線④稲荷山線などの具体的計画が明らかにされている。

これらの復興計画に対し、埋蔵文化財保護行政サイドでは、文化庁が平成7年2月23日付（庁保記第144号）により「阪神・淡路大震災に伴う復旧工事に係る埋蔵文化財の当面の取扱いについて」（文化庁次長通



第2図 調査地位置図 1/5000

知）を出し、同年3月29日には「阪神・淡路大震災の復旧・復興事業に伴う埋蔵文化財の取扱いに関する基本方針について」（文化庁次長通知）が出され、同年6月1日以降における文化財保護と取り扱いに関する基本原則が定められた。その後、兵庫県が中心となって「適用要領」も定められ、具体的な取り扱いマニュアルの作成も進んで、被災地での発掘調査が曲がりなりにも実施できるようになったのである。

(1) ②の西部地区の復興計画区域は、国道2号線以北、J R東海道本線までの第一地区（清水町・前田町）〔約10.3ha〕と国道2号線以南の第二地区（津知町・川西町中心）〔約10.7ha〕に分かれ、施工方法・施工主体も第一地区は国・県・公団、第二地区は市という具合に事業分割された。

本遺跡の所在する清水町一帯は、芦屋川右岸地域に当たり、1町あたりの震災死者数が著しい数にのぼった。清水町・前田町両町は、西部第一地区復興区域に属し、1町あたりの震災死者数41人以上の清水町と11人以上の前田町とで構成され、津知町や川西町と並んで被害の甚大なところであった。木造建築物の建築年代別全壊率の統計を瞥見すると、昭和56年頃までの木造建物が最も倒壊した地域ということが判明し、昭和40年代以前築の老朽化の著しい木造建物も数多く存在していたことを物語っている。抜本的な復興対策の必要な地域であることは論を待たないところであり、芦屋市が早い時期に土地区画整理事業を遂行する計画を立てたのもそのためであった。

事業は平成10年4月から開始され、当初の計画では平成14年3月完了の予定であったが、平成13年度の市議会の阪神・淡路大震災に伴う災害復興対策特別委員会（青木央委員長、11人）で西部第一地区、同第二地区の震災復興土地区画整理事業の施工期間を1年間延長するとともに、第一地区については事業費を約12億8000万円増額し、総事業費195億2600万円計上することが報告された。事業遅延の主たる理由は、地権者との建物移転補償交渉などの難航であり、平成13年7月末現在、仮換地指定率は第一地区が85.7%、第二地区



第1図 調査地現況（西から）

は72.3%にとどまっている。予算変更については、地権者の仮住まい期間の延長、地元住民提案による公共施設整備の見直しなどである。

ところで、復興関連の発掘調査は、平成7～9年度の3ヶ年は全国支援の下に実施され、平成10・11年度は兵庫県教育委員会の援助下でまだ数多く行わなければならない状況であった。そして、平成12年度以降は、芦屋市が国庫補助金などを得て独自に進めている。

西部第一地区土地区画整理事業は、住宅・都市整備公団施工の事業となったため、施工部に関する埋蔵文化財保護を目的とした事前調査は、この間、兵庫県教育委員会が主体となって行われ、遺跡の内容の把握や範囲を更新するなど多くの成果がもたらされている。この結果を踏まえ、周辺の個別開発では芦屋市が既往データに基づき行政指導を行い、発掘調査・確認調査・工事立会などの取り扱いを定めている。

当該事業地では、平成15年4月28日、借地者から、文化財保護法第57条の2第1項に基づき、兵庫県教育長宛「埋蔵文化財発掘届出書」が提出された。

事業地の現状は宅地で、包蔵地の種類は集落跡ないし生産遺跡に属する複合遺跡で、弥生・古墳・平安・中世の各時代時期にまたがっている。

届出書は兵庫県に進達され、平成15年6月5日には文化財課主査森岡秀人（学芸員）を担当者として確認調査を実施した。確認調査は、事業地内に3基の東西トレンチを設け、可能な限り布掘り基礎部分を対象とした。第1トレンチは現地表下80cm、第2トレンチは88cm、第3トレンチは80cmまでを最深確認深度とし、基本土層と遺物包含層・遺構の確認に努めた。遺構は

第2トレンチの現地地表下42cmで黒褐色粘性砂質土の埋積するピットを、第3トレンチの現地地表下70cmを測る所で流路をそれぞれ検出した。盛土は第3トレンチが最も厚く、53cmを計測する。

その結果を、6月6日には口頭で代理者の五藤積算設計に打診し、6月16日には五藤氏を交えて調査協議を行った。調査方式は損壊部分のトレンチ調査とし、再度、確認調査を行うこととなった。この協議を基礎とし、平成15年6月30日より、森岡秀人・坂田典彦両名を担当者として確認調査を実施した。なお、兵庫県教育委員会からの指示は、平成15年8月29日付（教文第1940号）で行われた。

2. 調査地をとりまく環境

清水遺跡は、市域西端部に位置し、清水町に所在する。南限を国道2号線、北限をJR東海道本線に置いている。震災前までは六条遺跡として認知されていたが、調査件数の増加に伴い東方の前田町に拡大することが解ってきた。そこで、遺跡の動態と分布状況から、平成13年度の遺跡分布地図の更新に伴い新たに町名を採り清水遺跡と前田遺跡を六条遺跡と弁別した。なお、清水遺跡と六条遺跡の境界線は、東川用水路（津知川）としている（第2図）。

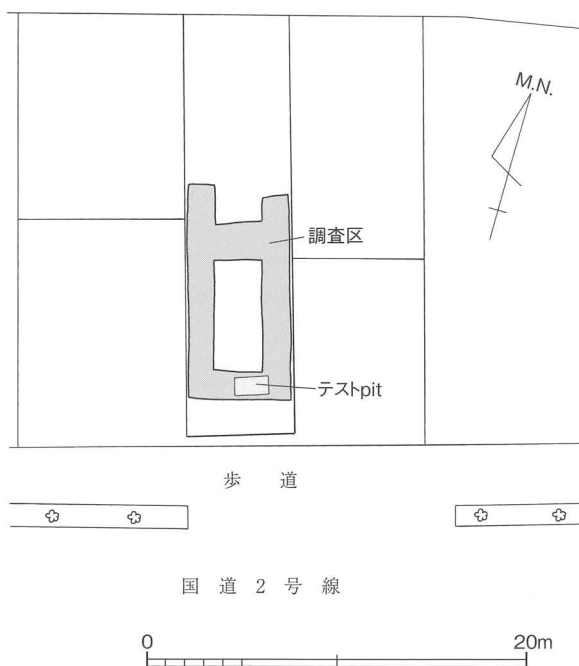
六条遺跡と隣接する清水遺跡は、沖積扇状地下位面の下部に相当する扇状地面上に立地している。この下部面では、現地地表下10～100cmまでに現代～古代の遺物を含む主に泥質砂からなる堆積層が累重している。これらの堆積層の基盤となる層準には、有機物を多量に含み土壌と推定される黒色礫質泥層が形成されている。六条遺跡では、この黒色礫質泥層最上部から縄文時代晩期前半の土器が検出されているほか、堆積層上面において弥生時代前期の遺構・遺物が検出されている。このような遺構・遺物の出土状況から、黒色礫質泥層最上部は、縄文時代晩期頃に形成されたことが推定される。今回の調査でもこうした堆積状況を踏まえ、清水遺跡や六条遺跡の形成過程を知るデータも目指された。

3. 発掘調査の概要

（1）発掘調査の方法

調査区は、建築基礎によって損壊を受ける部分に設定した。基礎は布掘り工法で（第3・13図）、掘削深度は設計G.L. -77cmである。また、先行して調査区南部に基本層序を把握するためのテストピットを設定した。掘削によって排出される残土はすべて調査区内に仮置きした。

測量に用いた基準杭は、任意に打設し、すべての平面図はこれを使用した。基準高は、本市下水道台帳図記載（平成4年）マンホール天端高T.P. +11.43mから水準測量によって得た。



第3図 トレンチ配置図 1/400

写真撮影は、35mmフィルム（リバーサル・モノクロ）、デジタルカメラを使用し、記録した。

すべての調査図面・出土遺物は、芦屋市役所分室文化財課三条整理事務所で整理し、保管している。

（2）発掘調査の経過

【調査日誌抄】

6月30日（月）晴れ

本日から調査開始。代理者立会いのもと、バックホーによってG.L. -40cmまでの盛土を掘削した。昼過ぎに機械掘削がほぼ終了し、壁面や攪乱の確認作業に着手した。

関野氏（神戸市教育委員会）、西川課長来跡。

7月1日（火）曇りのち雨

昨日からの作業を引き続き行う。調査区東側の南北トレンチにて南北に走向するS D101（犁溝）を検出した。昼前から雨が本降りとなり、午後から作業を中止した。

7月2日（水）晴れ

昨日の降雨のため、再度、遺構精査に着手した。S D101を再検出し、輪郭に白線を描いて撮影を行った。北側のユニットハウス天井と、南側から遺構の全景を撮影した。撮影後、平板実測（1/50）とS D101の断面実測（1/10）を行った。3a層の掘り下げを行う。

7月3日（木）曇りのち雨

3b層上面で、N R201（自然流路）を検出した。N R201は、調査区の制約と攪乱によって東肩のみを検出した。東壁土層断面の分層と実測を行った。午後から雨天のため作業を中止した。



第4図 作業風景

7月4日（金）晴れ

土層註記、最終チェックを終了して、埋め戻し作業に着手した。

7月7日（月）晴れ

埋め戻し作業と撤収作業を引き続き行い、調査道具を搬出した。

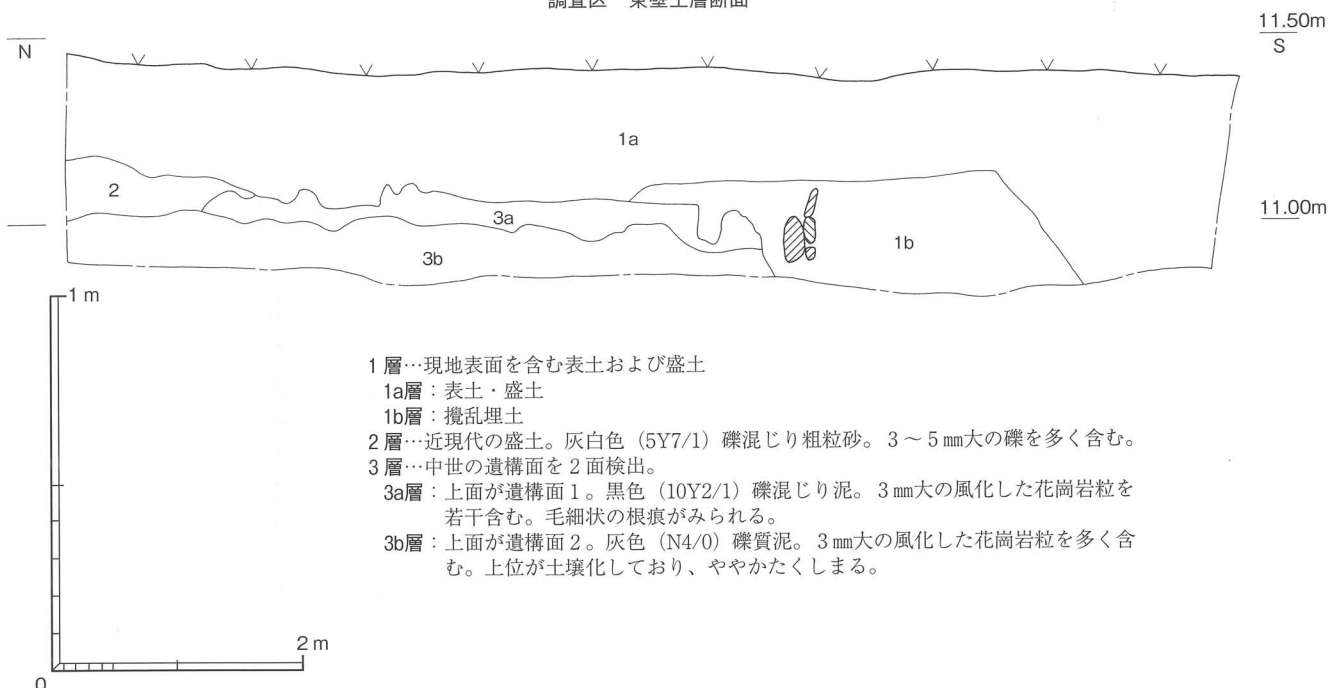
7月8日（火）晴れ

調査備品、ユニットハウス、ネットフェンスの撤収を行い、調査を完了した。

（3）基本土層

土層番号は、現地表面を含む表土層（盛土・客土）を1層とし、上から順に通し番号でアラビア数字を付した。また、同一層と認められるものでも漸次変移しており、土色・土質に違いがあるもの、異なる複数の層をセット関係でとらえたものは、アラビア数字の後

調査区 東壁土層断面



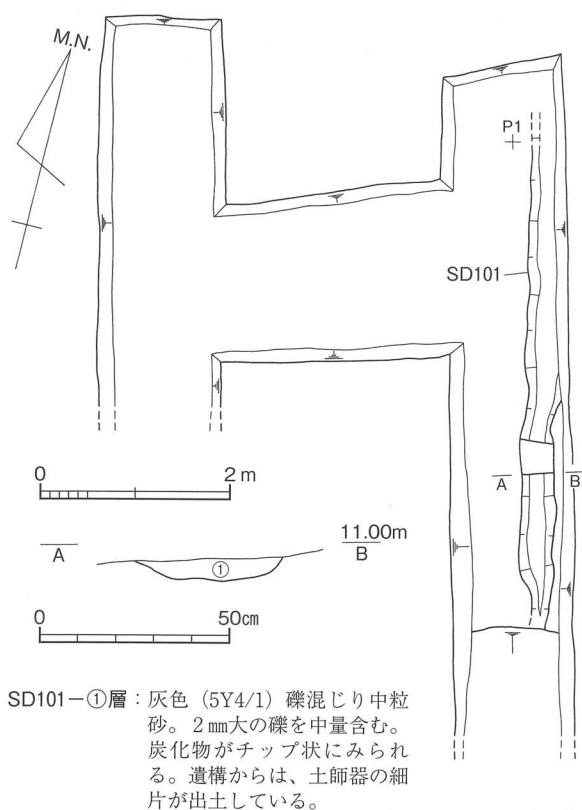
第5図 調査区土層断面図 タテ1/20、ヨコ1/60

にアルファベットの小文字を付して細分した。また、遺構埋土は○囲み数字で表記することで区別している。色調は『新版標準土色帖1998年版』（農林水産省農林水産技術会議事務局・財団法人日本色彩研究所監修）を使用した。層序は、トレンチ東壁の一部分をピックアップし、調査地全体に共通する基本層序の作成を行った（第5・14・15図）。以下に各層の土質・性格を記す。

- 1層…現地表面を含む表土および盛土。
 - 1a層：表土・盛土。
 - 1b層：攪乱埋土。
- 2層…近現代の盛土。灰白色（5Y7/1）礫混じり粗粒砂。3～5mm大の礫を多く含む。
- 3層…中世の遺構面を2面検出。
 - 3a層：上面が遺構面1。黒色（10Y2/1）礫混じり泥。3mm大の風化した花崗岩粒を若干含む。毛細状の根痕がみられる。
 - 3b層：上面が遺構面2。灰色（N4/0）礫質泥。3mm大の風化した花崗岩粒を多く含む。上位が土壌化しており、ややかたくしまる。

（4）遺 構

今回の調査では、3a層上面（遺構面1）と3b層上面（遺構面2）で遺構検出を行った。検出された遺構



第6図 遺構面1平面図 1/80・遺構断面図 1/20

は、遺構面1がSD101（犁溝）1条で、遺構面2がNR201（自然流路）1条である。いずれも、出土遺物・層位から中世に比定される。

遺構面1（第6・7・16図）

遺構は、調査区東端南北トレンチで検出した。遺構面は、近現代の盛土層と接しており、損傷は著しい。なお、3a層遺存部分は、北東部に限られた。

検出レベルは、T.P. +11m前後を測る。検出されたSD101（犁溝）は、南北に走行し、幅は40cmを測る。南端を攪乱によって欠損する。断面形は浅い皿形を呈し、深さは5cmを測る。埋土は単一層で、以下の観察結果を得た。

SD101-①層：灰色（5Y4/1）礫混じり中粒砂。2mm大の礫を中量含む。炭化物がチップ状にみられる。遺構からは、土師器の細片が出土している。

遺構面2（第8・9・17・18図）

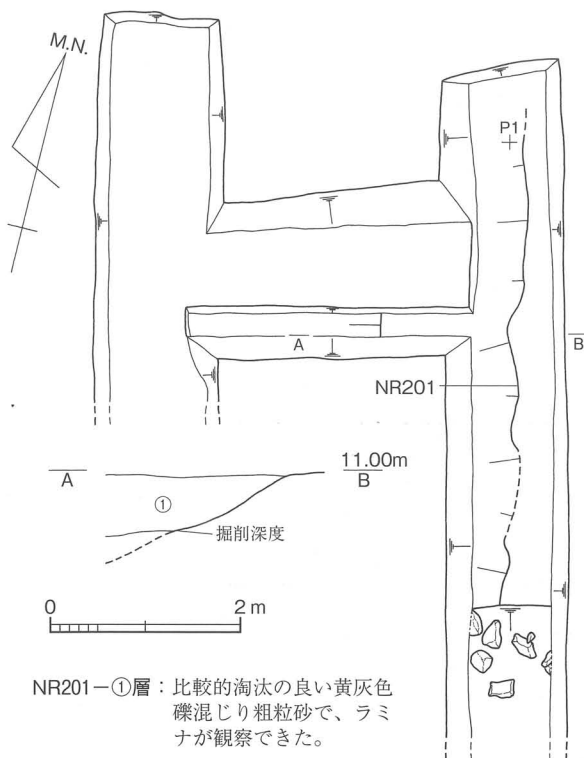
遺構は調査区東端で、南流するNR201（自然流路）の左岸を検出した。3b層をベース面として比較的緩やかな傾斜面を持っている。掘削深度を超えているため、サブトレンチによる河床面の確認を試みたが、結果的には検出面から1m下げたところで断念した。

流路の断面形と規模から、おそらく流路幅は最大6mを超え、深さは2m程度であろうと推測できる。

NR201-①層：比較的淘汰の良い黄灰色礫混じり粗粒砂で、ラミナが観察できた。堆積土からは、ローリングを受けた土師器片や須恵器片が出土している。



第7図 遺構面1完掘状況（北から）



第8図 遺構面2平面図・遺構断面図 1/80

(5) 遺物

今回の調査では、土師器と須恵器が出土した。いずれも摩滅の著しい細片であり、遺物の実測は行っていない。検出遺構が耕作地と流路であることから、遺物の残存率が低いことは否めない。帰属層位と出土量は、2層が4片、S D101-①層が2片、NR201-①層が3片で、総数は9片である。以下に各遺物の観察記録を層位ごとに詳述する。

2層出土遺物（第10図）

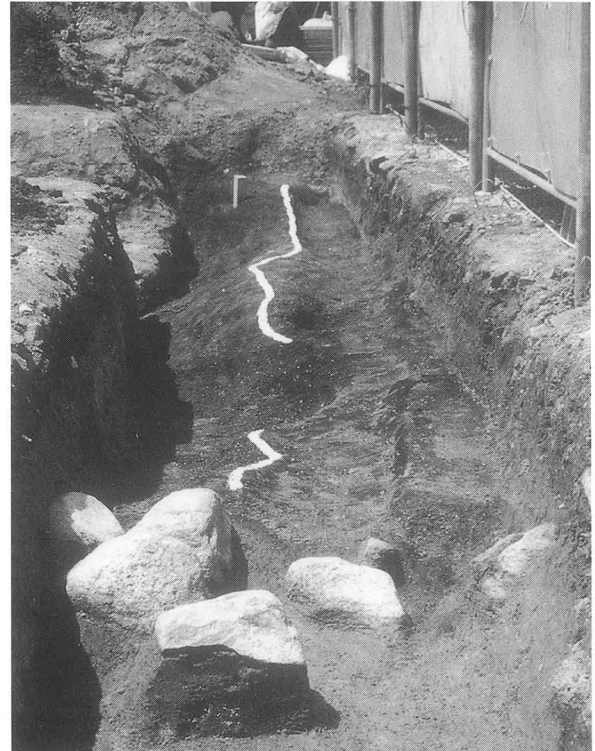
須恵器1片と、土師器の細片が3点出土した。須恵器片は、かなりローリングを受けているが、内面に同心円当て具痕が観察できることから甕の体部片と判断できる。胎土に0.5mm以下の微細白色粒を含む。土師器片の3片中2片は器種・器形も判別できない残存率である。残る1片は古墳時代の土師器と推測でき、内面は黒色化する。

S D101-①層出土遺物（第11図）

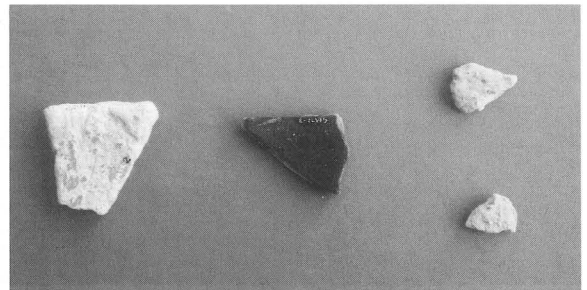
土師器の細片が2点出土した。1片は古墳時代の甕の口縁部片と思われる。器壁は厚さ5mmを測る。残るもう1片は、ローリングが著しく器種・器形ともに不明瞭である。

NR201-①層出土遺物（第12図）

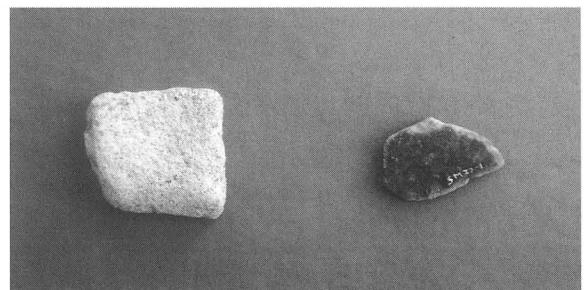
須恵器1片と土師器2片が出土した。須恵器は杯蓋の天井部と思われる。残存率が低く時期は不明である。土師器は、皿と甕の体部と思われる。皿は器壁が2.5mmで褐色系の色調である。中世に帰属する。甕の



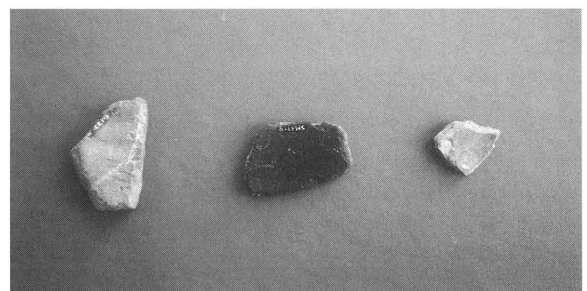
第9図 遺構面2完掘状況（南から）



第10図 2層出土遺物



第11図 S D101-①層出土遺物



第12図 NR201-①層出土遺物

第2章 発掘調査の概要

体部片はかなり摩滅が進んでいるが、内面に板状工具によるナデ調整が観察できる。古墳時代の所産であろう。

4. 小 結

今回の調査では、中世の犁溝（耕作地）と中世に埋没した自然流路を確認した。当地点は、芦屋川と東川用水路（津知川）に挟まれた扇状地上に立地する。近年の調査で、東接する前田遺跡は弥生時代前期から水田経営が行われていること、西接する六条遺跡は中世

に盛行期を持つことなど、国道2号線に北接し東西に並列する六条・清水・前田遺跡において、性格の差を見極める新知見が増加してきている。清水遺跡と称されてからは、まだ日の浅い遺跡であるため、既往調査件数は少ないが、以上に述べたように、本市西部の遺跡過密地域の一角を占めるだけに今後の調査に期待される。

今後、当地点においても、現況G.L. -77cm (T.P. +10.5m) 以下に損壊が及ぶ場合は、再度確認調査が必要である。
(坂田・森岡)



第13図 調査区全景（北から）



第14図 東壁土層断面（北西から）



第15図 東壁土層断面（南から）



第16図 遺構面1 完掘状況（南から）



第17図 遺構面2 完掘状況（北から）



第18図 N R 201土層断面（西から）

第4節 金津山古墳（第12地点）

1. 調査に至る経緯

芦屋市東部に存在する金津山古墳は、近年、打出小槌古墳が比較的大きな前方後円墳であることがわかるまでは、市内で唯一最大の前方後円墳であった。後円部埋葬施設の確認調査を含め、これまで17地点分の調査が進んでおり（平成21年度時点）、墳形や規模、周濠形態、築造時期などについての概要は知り得ている。ただし、本墳は指定史跡でもなく、また遺跡公園化の計画も震災などにより凍結し、周囲は住宅街で増改築など建物の建築工事が多い上に、共同住宅も周濠域や前方部に建設されるなど、その保護については十分な施策が採られていなかった。しかし、平成21年度によりやく市指定文化財に指定された。今般、第12地点で届出のあった当該地は、個人住宅の新築計画として進捗したが、周濠や外堤部に相当することが予測されたため、記録保存を基本とする発掘調査を必要とした。

当該地の所在場所や事業地面積は抄録に摘記したとおりであるが、地権者からの文化財保護法第57条の2第1項に基づく発掘届出書は、平成15年（2003）10月21日に土地発掘承諾書・建築概要報告書とともに提出され、芦屋市教育委員会文化財課はこれを受理、平成15年11月19・21・25～27日の確認調査を経て、芦教文第224号（平成15年12月1日付）にて兵庫県教育長宛進達した。発掘調査は、地権者代理（小川設計事務所）と方法や期間設定などをよく協議し、平成15年12月8日に着手した（第1図）。

発掘作業は、安西工業株式会社に作業委託した。

2. 調査地をとりまく環境

金津山古墳は、春日町に所在し、阪神打出駅の北北東約100mに位置する（第2図）。阪神電車の北側を東西に走向する旧西国街道（現、鳴尾御影線）沿いに立地し、翠ヶ丘丘陵を左岸に眺め南流する宮川からは、400m程東に位置する。本墳は、舌状に張り出した



第2図 調査地位置図 1/5000

翠ヶ丘丘陵南端に立地し、中・近世の街道沿いにある。周辺には、北西600mのところに4世紀前半築造の阿保親王塚古墳、西北西150mのところに5世紀後半築造の打出小槌古墳が所在する。金津山古墳は、多くの文献史料・地誌類にも登場し、別称では「黄金塚」・「金塚」と呼ばれ、古くから黄金埋蔵伝説が語り伝えられている。また、『摂津名所図会』（寛政8年、1796年）では「金津山」と記して西国街道に接して松の繁茂した墳丘が描かれている。

既往調査では、昭和60年の周濠調査を第1地点として、平成15年度までに12地点（ほかに、地点名を付していない調査も実施されている）を数える。平成元年3月に大規模に行われた第2地点の発掘調査によって、それまで円墳とされてきた墳形が、後円部径40m、前方部長15m、全長55mの前方後円墳であることが判明した。また、同年12月から「金津山古墳後円部範囲・構造確認調査」として後円部墳頂平坦面から東墳裾に至る23.3mのトレンチ調査が実施された。これによって、新たに三段築成になることが裏付けられ、下段が地山の削出し成形を、上・中段が盛土によって構築されていることが判明した。また、同時に後円部の埋葬施設の一端（粘土槨か）が明らかとなった。

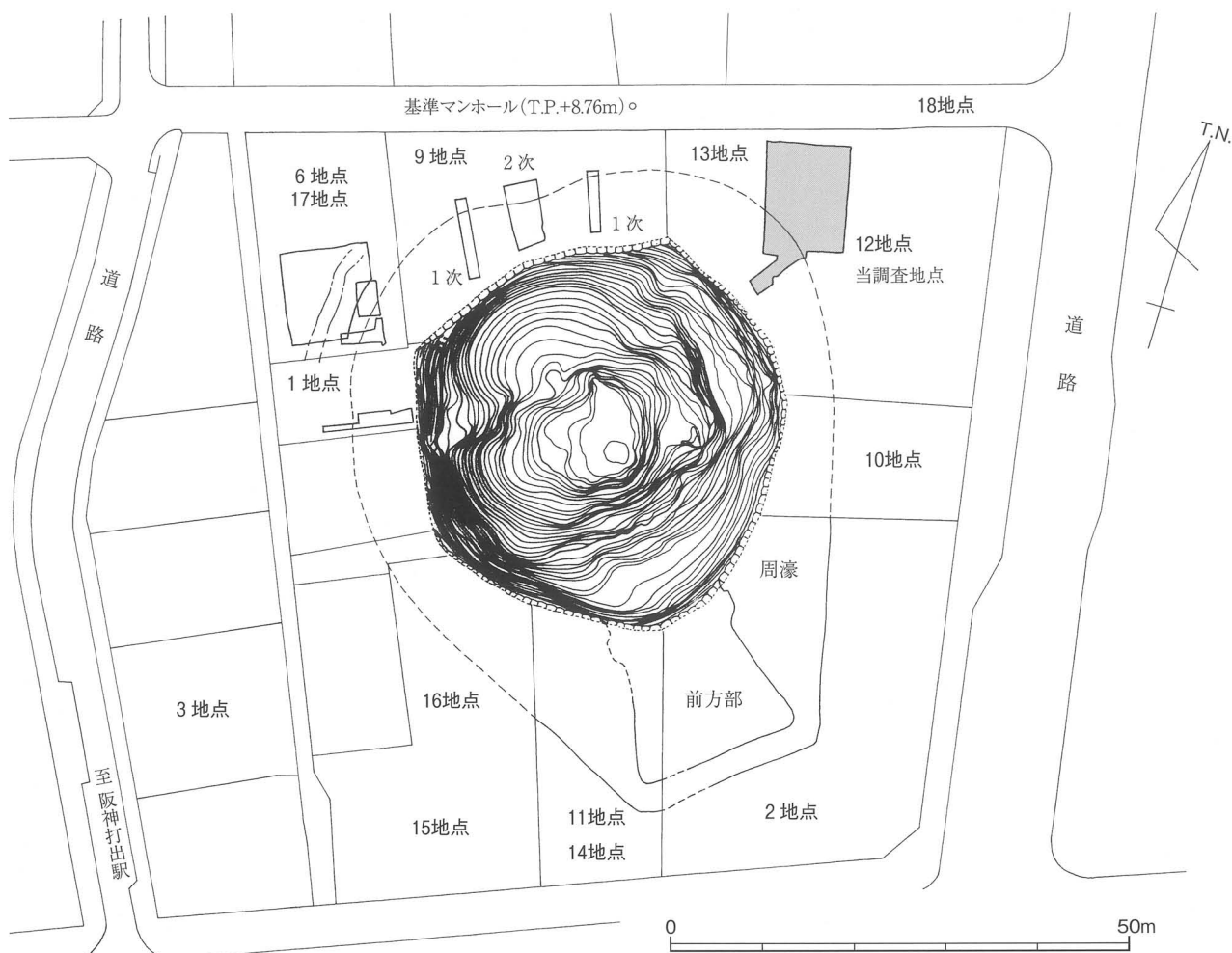
3. 発掘調査の概要

（1）発掘調査の方法

調査区は、個人住宅の建築工事によって損壊を受ける部分を対象とし、一部周濠の性格を確認するため南端から墳頂部に向けて追加トレンチを設定した。掘削深度は、設計G.L. -330cmである。掘削方法は、近現代水田耕土上面までを重機で排土し、以下は人力によって層ごとに遺物や遺構に注意しながら掘削した。掘削によって排出される残土は、重機掘削分を4tダンプで場外搬出し、引き続き排出される人力掘削分の残土は敷地内に仮置きした。測量に用いた基準杭は、墳頂部の国土座標（ベンチマーク）を基点とし、調査



第1図 調査地近景（西から）



第3図 金津山古墳既往調査地点図および推定復原図 1/800〔白谷・森岡編2008を一部改変〕

区内に延長した。すべての平面図はこれを使用するとともに、平面図に記入した。基準高は、本市下水道台帳図記載（平成4年）マンホール天端高T.P. +8.76mからの水準測量によって得た。

写真撮影は、35mmフィルム（リバーサル・モノクロ）、デジタルカメラを使用し、記録した。

すべての調査図面・出土遺物は、芦屋市役所分室文化財課三条整理事務所で整理し、保管している。

（2）発掘調査の経過

今回の調査は、年末年始をまたぐ約1ヶ月半を要して実施した。天候は終始西高東低の気圧配置であり、典型的な冬型であった。調査工程として、12月末までに遺構面1を目指し、1月からは遺構面2（周濠）の調査にとりかかった。降雨による作業の中止は、12月11日のみであった。以下に経過の一端を日誌抄として詳述する。

【調査日誌抄】

12月8日（月）晴れ

調査開始。機械掘削を開始した。まず、調査地北側

を東西に走る一方通行道路が、唯一の重機搬入路であり、且つ、その道路面から調査地現地表面まで3m程の高低差があるため、重機進入路の造成を行った。昼前から表土および近現代の盛土を掘削した。G.L. -70cmで青灰色の水田耕土層が確認できたため、確認調査と本日掘削したテストトレンチのデータから当層を重機掘削床とした。

調査道具・備品、ユニットハウスなどの搬入と水道開栓工事を行った。本日で、調査区の1/4範囲の掘削が終了した。西川課長来跡。

12月9日（火）晴れ

本日で、全体の1/3範囲の機械掘削が終了した。残土搬出の仮置場を敷地東側の未損壊部分に設定したため、南壁・西壁際から北西に掘削を進めた。機械掘削の終了した部分から人力によって水田耕作土を取り除いた。水田耕作土からは、染付碗・土師器などが少量出土した。また、北西部の近現代盛土層壁面に、埴輪が1点確認された。機械掘削床までの層名を付し、近現代盛土を2層、水田耕作土を3層とし、遺物の取り上げもこれに準じた。

12月10日（水）晴れ

今日から4 t ダンプによる残土搬出と機械掘削を併行して行った。ダンプの回転率が良かったため、掘削より先に残土の積み込みを優先した。掘削範囲は、前日とさほど変わらなかったが、残土量は1/4程度に減少した。西川課長来跡。

12月11日（木）雨

雨天のため作業中止。

12月12日（金）晴れ

本日も、4 t ダンプによる残土搬出と機械掘削を併行して行った。本日終了時点で、機械掘削は、全体の3/5程度が終了した。機械掘削の合間を見て、3層水田耕作土を人力によって取り除いていった。試掘データどおり、南西隅で周濠の外堤側輪郭を確認した。周濠検出ラインの外側には、洪積層が確認され、これを削出して周濠と外堤を構築したと考えられる。

12月15日（月）晴れ

本日未明、イラクのフセイン元大統領が連合軍によって故郷のティクリート近郊で身柄を拘束された。年の暮れも迫ったこの時期に、イラクの、そして中東の新たな歴史が始まる。

本日で全体の4/5程度の機械掘削が終わった。南東部で確認されていたS E 101(井戸)の南半分の裏込め土を取り除いた。井戸側は、凸面に楔形の文様を施した瓦を10枚1段とし、3段目までを確認した。裏込め土から出土した遺物は、近現代の陶磁器片が数点あるのみである。平面図と断面図以外は、写真撮影のみで記録することとした。関野豊氏（神戸市教育委員会文化財課）来跡。

12月16日（火）晴れ

今日で機械掘削が終了した。トレンチ配置図をトランシットによって作成。S E 101は、南半分の掘形（裏込め土）を井戸瓦4段目まで掘削したところで、崩壊した。記録写真は撮ってあったものの、残念ながら側面図作成の予定を変更し、急遽4段目までの平面図と断面図を作成した。小川氏（設計士・地権者代理）、他1名来跡。

12月17日（水）晴れのち曇りのち雨

遺構面1（3b層下面、4層上面）の精査。当遺構面では、近現代の井戸と、3層水田耕作土に所属する犁溝とピット、4層に帰属する金津山古墳の周濠を検出した。犁溝は、北西から南東に走向するものが大半で、若干直交する溝があった。山村 薫氏（京都市職員）来跡。

12月18日（木）曇り

遺構面1の平面図実測。実測終了後、すぐに遺構掘りに着手した。S E 101は、崩壊した4段目まで井戸瓦すべてを取り上げた。

本日、当調査区的设计変更の連絡を受け、新たに南側部分を1 m拡張することと、金津山古墳後円部中心

に向けて調査区南西端まで、追加トレンチを抜くことを地権者の許可を得て決定した。

12月19日（金）晴れ

今日は、とくに寒く、日中でも7度までしか上がらなかった。残土は、追加トレンチによって増えるため、調査区北東隅に設定したエリアに置くこととした。

12月22日（月）晴れ

追加トレンチの配置図を作成した。S E 101は、断面図作成のため半裁したまま残していたが、崩壊したため、実測の済んだレベル（上から4段目）まで丸掘りした。関野氏来跡。

12月24日（水）晴れ

本日は、クリスマスイヴと同時に今年の現場最終日である。追加トレンチの表土掘削がほぼ終了した。新年からは、周濠の掘削に取り掛かる。14時以降は、年末年始に向けての現場・ユニットハウスの養生にかかった。西川課長、関野氏来跡。

1月6日（火）晴れ

新年仕事始め。追加トレンチの3層水田耕作土を掘削。下面にて、犁溝を検出した（遺構面1）。記録写真撮影後、セクションベルトを残し埋土の掘削。市立浜風小学校校長、西川課長来跡。

1月7日（水）晴れ

追加トレンチで検出した遺構面1の埋土掘削。北側の調査より狭小な面積であるが、犁溝の残りが良好だった。平面図にレベル値を記入して、実測完了。

1月8日（木）晴れ時々雪

遺構面2（4層上面）の精査。遺構面1が3b層下面なので実質は同一面である。犁溝のラインを消して、周濠のラインの見極めを行った。遺構面2の撮影を東接するマンションから行った。南壁土層断面図を実測する。

1月9日（金）晴れ

西壁土層断面の精査・分層・撮影・実測。周濠内の掘削は、まずサブトレンチを抜いて層位を確認したのち、面で広げていく手法を取った。周濠埋土①層と②層を掘削し、①層からは、近世陶磁器片と須恵器片



第4図 機械掘削開始状況（北東から）

が、②層からは、円筒埴輪片が20点程度と東播系須恵器埴底部が1点出土している。これらから推測すると、①層が近世の最終埋土、②層が中世の埋土と推測できる。②層から出土した埴輪片については、ある程度大きさのあるものは、レベルを測り、浮かし掘りを行った。

1月13日（火）晴れ

②層出土遺物は、記録写真を撮ったのち取り上げた。前日までは、②層を中世の埋土と判断していたが、当層から染付碗が出土したことから、近世に帰属するものとする。上月氏（打出教育文化センター）、西川課長来跡。

1月14日（水）晴れ時々曇

前日に続き②層の掘削。遺物は、埴輪片・葦石・磁器片が出土している。②層は、比較的厚く堆積しており、層厚で20～30cmを測る。B区最南端の最も墳丘に近いところで、墳丘側への立ち上り掘形を検出した。

1月15日（木）晴れ

③層灰色シルト質細粒砂のブロック土の掘り下げ。③層は、破片としては小さいが、埴輪片が多く含まれる。担当者間で中世段階における周濠の生産域としての利用について再度検討した。

1月16日（金）晴れ

B区南端で検出した墳丘側の掘形の確証性が乏しかったため、サブトレンチを抜いて確認したところ掘形のベース面ではなく、それはもっと下にあることが分った。当初、ベース面と判断していたややかたくしまる④e層黄灰色礫質泥層は、15cm程度の層厚で、下位は以外に脆かった。ただし、疑問点として、このレベルで未だベース面が検出されないということは、墳丘側の掘形の立ち上がりが極めて急な勾配になるということが予想される。

1月19日（月）晴れ

A区がほぼ掘りあがった。B区の完掘に合わせて全景写真を撮りたいため、A区は精査をかけずに、そのままにしておく。手付かずになっていたS E101の調査を再開した。上から4・5段目の井戸瓦の実測を完了



第5図 作業風景

した。関野氏来跡。

1月20日（火）晴れ

B区の周濠掘削。周濠の底に近くなってきており、5層灰色粘土が層厚20cm程度で堆積している。灰色粘土の下層からは、遺物が減少してきた。おそらく、今の段階で墳丘構築時期の堆積土に達していると思われる。S E101の掘削は、夕方まで10段目まで実測が終了した。埋土は、依然として一括廃絶客土で、検出面から2.7mを測る。車谷氏と他1名（学校教育課）来跡。

1月21日（水）晴れ時々雪

B区の転落葦石の浮かし掘り。現時点で20石程度確認した。転落葦石は、周濠ベース面より、10～20cm程度浮いており、構築時からある一定の時間が経過した後、墳丘の崩壊が始まり周濠内に落ち込んだものと思われる。S E101は15段目の井戸瓦を検出したところで、安全確保のため、調査を断念した。このレベルまでに湧水層はなく、井戸底はもっと下にあるものと思われる。

1月22日（木）晴れ時々雪

本日は、今年一番の冷え込みであった。最高気温は、1度にすぎない。S E101の壁面で、いわゆる地山層（大阪層群）の分層と土層観察を行った。

1月23日（金）晴れ

朝一番は、遺構面がガチガチに凍てついていた。溶けるのを待って、全景写真撮影のため、全面精査に着手した。10時半より打出教育文化センターの啓発事業の一環として、当遺跡の概説と発掘調査の方法などについてビデオ撮影。14時より、市教委委託の文化財普及ビデオ撮影のため山本徹男氏（映像作家）来跡。写真撮影終了後、周濠の等高線実測に取りかかった。

1月26日（月）晴れ

周濠内A区の等高線実測を10cm刻みで作成した。また、B区の転落葦石の検出状況図を1/10で作成し、レベル値を記入した。藤田氏、関野氏来跡。

1月27日（火）晴れ

周濠内B区の遺物・転落葦石を図面上にてグルーピングして、番号を付して取り上げた。その後、B区の等高線実測図を作成した。10時半より、打出教育文化センターの啓発ビデオの撮影。撤収段取りのため、終了立会を本日にに行った。

1月28日（水）晴れ

調査区西壁土層断面図の作成。セクションベルト断面の実測のため、サブトレンチを追加掘削。西川課長来跡。

1月29日（木）晴れ

セクションベルトの分層、撮影、実測を行った。調査事務所のフェンスを復旧するため、本日中にユニットハウス・備品の搬出を完了させ、調査道具の引き上げを夕方に行った。午後に、近隣住民の方々（6名）が現場見学に来られた。

1月30日（金）晴れ

本日で、調査終了。周濠内A・B区を分けていたセクションベルトの取り外しと、セクションベルト内から出土した遺物の採取。ユニットハウス設営場所のフェンスを復旧した。西川課長終了確認。午後、近隣住民の方が現場見学に来られた。

（3）基本土層

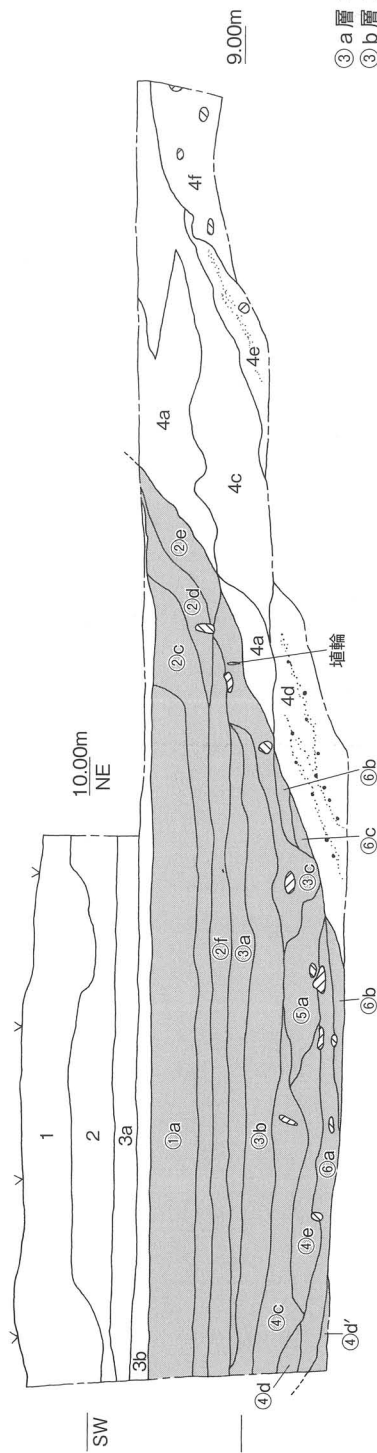
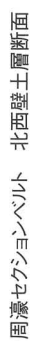
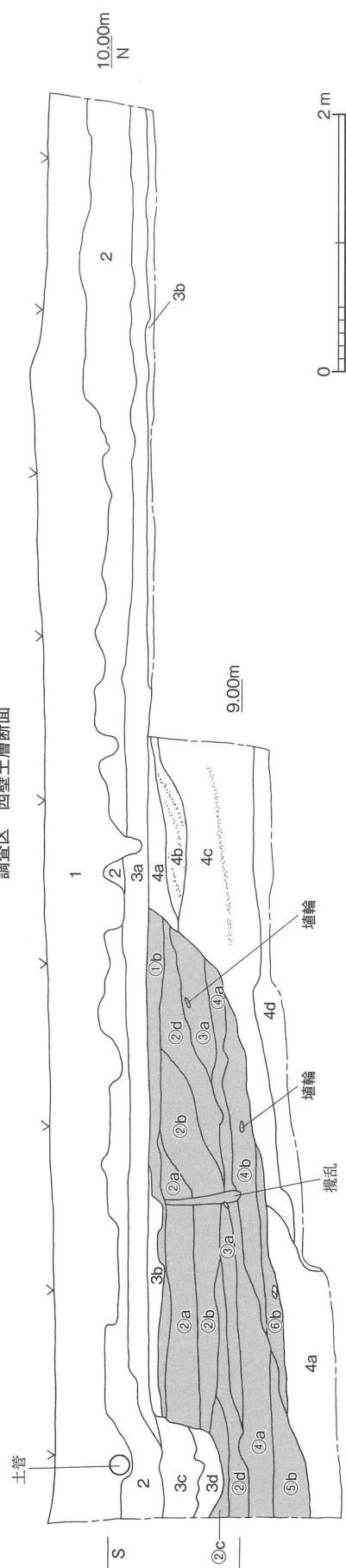
土層番号は、現地表面を含む表土層（盛土・客土）を1層とし、上から順に通し番号でアラビア数字を付した。また、同一層と認められるものでも漸次変移しており、土色・土質に違いがあるもの、異なる複数の層をセット関係でとらえたものは、アラビア数字の後にアルファベットの小文字を付して細分した。周濠の埋土・堆積土は、○囲み数字で表記した。色調は『新版標準土色帖1998年版』（農林水産省農林水産技術会議事務局・財団法人日本色彩研究所監修）を使用し、一部視認色で表現した。層序は、西壁と周濠セクションベルトの一部分をピックアップし、調査地全体に共通する基本層序の作成を行った（第6・7図）。以下に各層の土層番号・土質・性格を記す。

- 1層…現地表面を含む表土。瓦・礫・コンクリート・ガラを包含する。
- 2層…近現代盛土。礫混じり粗粒砂。2mm以下の細礫を少量含む。陶磁器片を包含。下位に地山（4層）のブロック土が多く混入する。
※水田を埋める際、調査区北側の一方通行道路を切り通す時に出る地山層のブロック土を水田の上に乘せたと考えられる。
- 3層…近代以降の水田耕作土。3b層下面が遺構面1。
3c・3d層は水田機能時の水貯め土坑の埋土である。
- 3a層：水田耕土。灰色礫混じりシルト質中粒砂。粘性あり。炭化物チップが散見される。層厚15～18cmで、調査区全域で確認した。陶磁器片が出土。局所的に層厚1cm程度の細～中粒砂の帯層がみられる。
- 3b層：水田床土。灰白色礫混じりシルト質中～細粒砂。層厚10cm以下で、南壁において明瞭に観察できたが、西壁では部分的に見受けられるのみで、平面的には確認できない。陶磁器片が出土。
- 3c層：水田時の土坑埋土上層。オリーブ黒色（10Y3/1）礫混じりシルト質粘土。3a層を母材とする。
- 3d層：水田時の土坑埋土下層。灰色（5Y6/1）砂質シルト。3a・3b層を母材としたブロック土。
- 4層…大阪層群・洪積層（いわゆる地山）。4a層が遺構面2。今回検出した周濠のベース面。

- 4a層：明黄褐色（10YR6/8）～黄橙色（10YR8/6）礫質粗粒砂。3～5mm大の礫（風化花崗岩）と粗粒砂からなる。非常にかたくしまる。周濠掘形縁辺と周濠の底付近でみられる。おそらく南下がりで堆積していた部分を周濠がカットしたのであろう。
- 4b層：浅黄橙色（10YR8/4）粗～中粒砂。ラミナが観察できる。かたくしまる。洪積層堆積時に局所的な流水堆積があったことを示している。
- 4c層上位：灰白色（2.5Y8/2）シルト質細粒砂。微細な植物遺体を上位に含む。かたくしまる。
- 4c層下位：灰白色（2.5Y8/2）シルト質粘土。粘性が強い。淘汰が良好で、礫を全く含まない。
- 4d層：灰白色（5Y7/2）礫混じり粗粒砂。5mm大の風化花崗岩と粗粒砂で構成され、非常にかたくしまる。
- 4e層：黄灰色（2.5Y5/1）シルト質細粒砂。非常にかたくしまる。洪積層。拳大の風化花崗岩を少量含む。
- 4f層：明黄褐色（2.5Y6/6）礫質粗粒砂。10～30cm大の礫を少量と、1cm大の風化花崗岩を多量に含む。また、10cm大の偽礫を多く含む。非常にかたくしまる。「SE101a層」に対応。

<周濠埋土・堆積土>

- ①層…近世以降の水田を乗せるための置土・客土。
 - ①a層：周濠の最終埋土。黄色（2.5Y7/8）礫混じりシルト混じり粗粒砂。窪地になっていた周濠部分にまで水田を広げるため、当層を置いてフラットにした。黄色（地山母材）のブロック土（断面径6cm以下）が入る。
 - ①b層：水田を造成する際の置土。灰色（5Y6/1）礫混じり中粒砂。2mm大の細礫を少量含む。粘性をわずかに帯びる。断面径1cm程度の粘土ブロック土が散見される。人為的な埋土。上層からの根痕が観察できる。
- ②層…中世～近世の堆積土。当層は開放状態にあったと思われ、植生の痕跡がみられる。
 - ②a層：灰黄色（2.5Y6/2）礫混じり粗粒砂。5～10mm大の礫を少量含む。黄橙色（10YR7/8）シルト質粘土のブロック土（断面径2cm）をドット状に含む。埴輪片や東播系須恵器、室町時代の播鉢を含む。
 - ②b層：黄灰色（2.5Y6/1）粗粒砂。2mm大の礫（白色）を極少量含む。埴輪片・土師器片を含む。詳細に観察すると、南下がり（底に向けて）の堆積が観察できる。
 - ②c層：灰色（5Y5/1）礫混じり粗粒砂。2～3cm大の礫を極少量含む。植生の痕跡がみられる。埴輪片・土師器細片が出土。

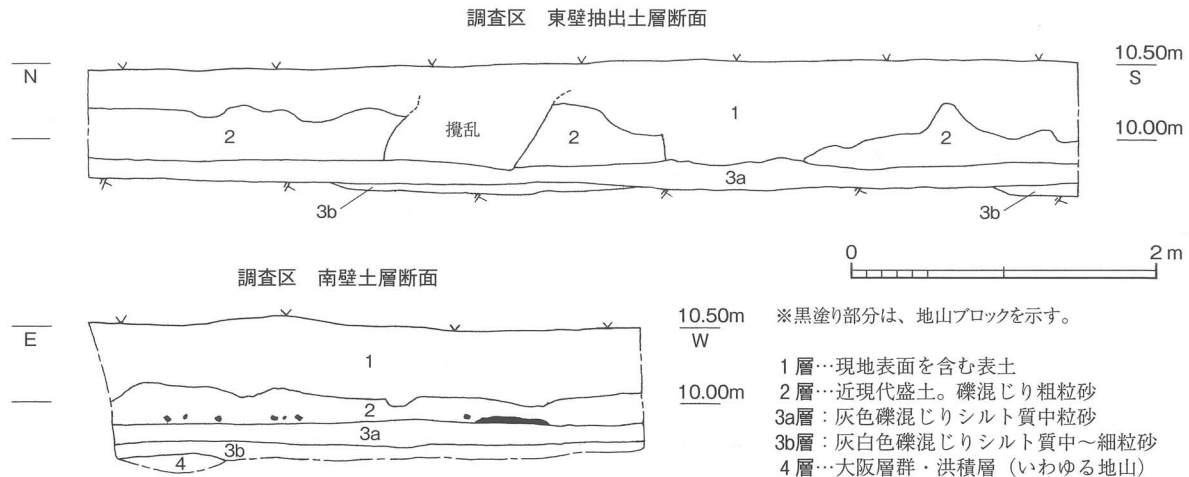


周濠埋土·堆積土

- 4a層：明黄褐色～黄橙色礫質粗粒砂
4b層：浅黄橙色粗～中粒砂
4c層上位：灰白色シルト質細粒砂
4c層下位：灰白色シルト質粘土
4d層：灰白色シルト粗粒砂
4e層：黄灰色シルト質細粒砂
4f層：明黄褐色礫質粗粒砂

- ③ a層：灰色礫混じり粗粒砂混じりシルト質粘土
- ③ b層：灰白色礫混じり粗粒砂
- ③ c層：灰色礫混じり粗粒砂
- ④ a層：オリーブ灰色礫混じりシルト混じり粗粒砂
- ④ b層：灰色礫混じりシルト質中～粗粒砂
- ④ c層：にぶい黄褐色礫質シルト混じり中粒砂
- ④ d層：明オリーブ灰色礫混じり中～細粒砂
- ⑤ a層：黄灰色礫質泥
- ⑤ a層：褐灰色礫混じり泥
- ⑤ b層：灰色砂質土
- ⑥ a層：灰白色粘土
- ⑥ b層：黒褐色有機質礫混じりシルト質砂
- ⑥ c層：灰白色粗粒砂混じり泥

第6図 調査区・周濠セクションベルト土層断面図 1/50



第7図 調査区土層断面図 1/50

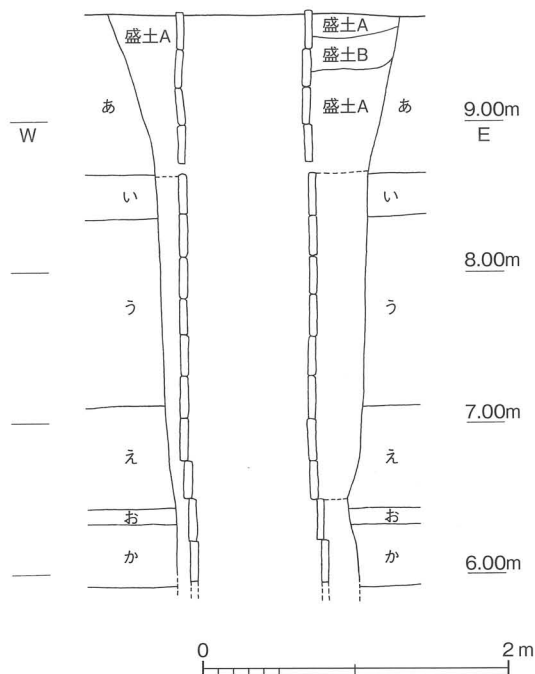
- ②d層：肩口から周濠内全域にみられる。長期の開放状態が考えられる。灰オリーブ色（7.5Y6/2）礫混じり粗粒砂。2mm大の細礫と極粗粒砂を含む。植生の痕跡がみられる。下位にシルト質細粒砂のブロック土（鶏卵大）が数ヶ所みられる。
- ②e層：灰白色（10YR7/1）礫混じりシルト混じり中～粗粒砂。2cm大の礫少量と2mm大の礫を多く含む。上層からの鉄分沈着あり。断面径1～3cmの黄色シルトブロックが散見される。
- ②f層：黄灰色（2.5Y6/1）シルト混じり粗粒砂。植生の痕跡がみられる。開放状態が長期であったとみてよい。鉄分沈着あり。際立った植生層。
- ③層…中世に外堤側から周濠に流入した堆積層。
- ③a層：人為的に外堤部から投棄されたブロック土（墳丘側にはみられない）。灰色（7.5Y4/1～N4/0）礫混じり粗粒砂混じりシルト質粘土。拳大のブロック土で、肩の傾斜に沿って堆積する。埴輪片が非常に多い。転落葦石・東播系須恵器片が出土。
- ③b層：灰白色（10YR7/1）礫混じり粗粒砂。③a層と類似する層相を示すが、ブロック土を含まず、遺物は1cm弱の土師器細片を2点含む。
- ③c層：外堤部より流入したブロック土。灰色（7.5Y4/1～N4/0）礫混じり粗粒砂。埴輪片・葦石を比較的多く含む。
- ④層…相対的に転落葦石がもっとも多く出土しており、当層堆積時期が墳丘崩壊の兆候を示すものと思われる。
- ④a層：オリーブ灰色（2.5GY6/1）礫混じりシルト混じり粗粒砂。2mm大の白色砂粒を中量含み、やや粘性を帯びる。土師器細片が散見される。
- ④b層：灰色（5Y5/1）礫混じりシルト質中～粗粒砂。5mm以下の白色砂粒を中量含み、かたくしめる。墳丘構築時期に近い埋土であろう。
- ④c層：にぶい黄褐色（10YR5/4）礫質シルト混じり中粒砂。墳丘側に堆積する。転落葦石が多い。ややかたくしめる。
- ④d層：墳丘からの流入土。明オリーブ灰色（2.5GY7/1）礫混じり中～細粒砂。2mm大の礫を少量含む。
- ④e層：黄灰色（2.5Y5/1）礫質泥。ややかたくしめる。植物遺体を少量含む。⑤層に貫入する。転落葦石がもっとも多い層。当層堆積時期に墳丘の崩壊が始まったと考えられる。
- ⑤層…墳丘構築時に近い埋土。
- ⑤a層：褐灰色（10YR5/1）礫混じり泥。1cm大の礫を少量含む。澱水堆積。葦石が少量出土するが、④層堆積時に沈下したと思われる。
- ⑤b層：灰色（N5/0）砂質土。水性堆積。構築時に若干水が溜まっていたと思われる。上層より沈着したものと思われるが、中～上位面で遺物細片が出土する。
- ⑥層…墳丘構築直後の堆積土。
- ⑥a層：灰色（7.5Y4/1）粘土。周濠底に層厚10cm程度で溜まる。下位に断面径15cmの黒色有機質シルトブロックが散見される。
- ⑥b層：黒褐色（2.5Y3/1）有機質礫混じりシルト質砂。2mm大の礫を少量含む。粘性は弱い。埴輪片が散見される。ベース面に貼り付くように堆積する。
- ⑥c層：ベース層である4c層と4d層を母材とした流入土。灰白色（10Y8/1）粗粒砂混じり泥。
- ⑥b層との層理面に遺物が出土した。

(4) 遺構

3b層下面で近現代の水田耕作にともなう遺構（遺構面1）と、井戸を検出した。S E101（井戸）は、検出面から4 mまで掘削したが完掘には至らなかった。4層上面で金津山古墳にともなう周濠・外堤を検出した（遺構面2）。以下、遺構面ごとに詳細を記す。

遺構面1（第8～11・14～17図）

遺構面1は、調査区中央から南域で検出した。遺構の種類は犁溝とピットがあり、ピットに関しては攪乱の可能性が高い。検出した犁溝は、3層水田機能時に構築されており、近現代に帰属する。現在、調査地北側を地山切り通し道路が走っていることから、水田面は遅くとも道路が造成された時期には消滅していたことが考えられる。犁溝の検出幅はいずれも20cm前後を測り、深さは5～10cm程度である。犁溝の走向方位は、おおむね磁北から40度西偏する。後円部周濠検出ラインに沿っており、後円部や周濠の曲線に則して地割があり、犁がひかれたとも考えられる。



- あ層：明黄褐色（2.5Y7/6）礫質シルト混じり粗粒砂。3 cm 大の亜角礫を中量含む。地山で基本土層4層の範疇。非常にかたくしめる。鉄分沈着あり。
 い層：明黄褐色（10YR6/6）粗粒砂。2 mm以下の細礫を少量含む。下位に粘土ブロックを含む。
 う層：橙色（7.5YR6/8）礫混じり中～粗粒砂。5 mm以下の礫を多量に含む。淘汰が良好。
 え層：灰白色（5Y7/1）シルト。層厚10cm程度の細粒砂が帯状に貫入する。粘性を帯びる。
 お層：黒色（N1.5/0）有機質泥。自然木・植物遺体を多量に含む。
 か層：灰白色（7.5Y7/1）礫混じり泥。2 mm大の礫を帯状に含む。最深確認層。

第8図 S E101断面図 1 / 50



第9図 S E101掘形半裁状況（南から）



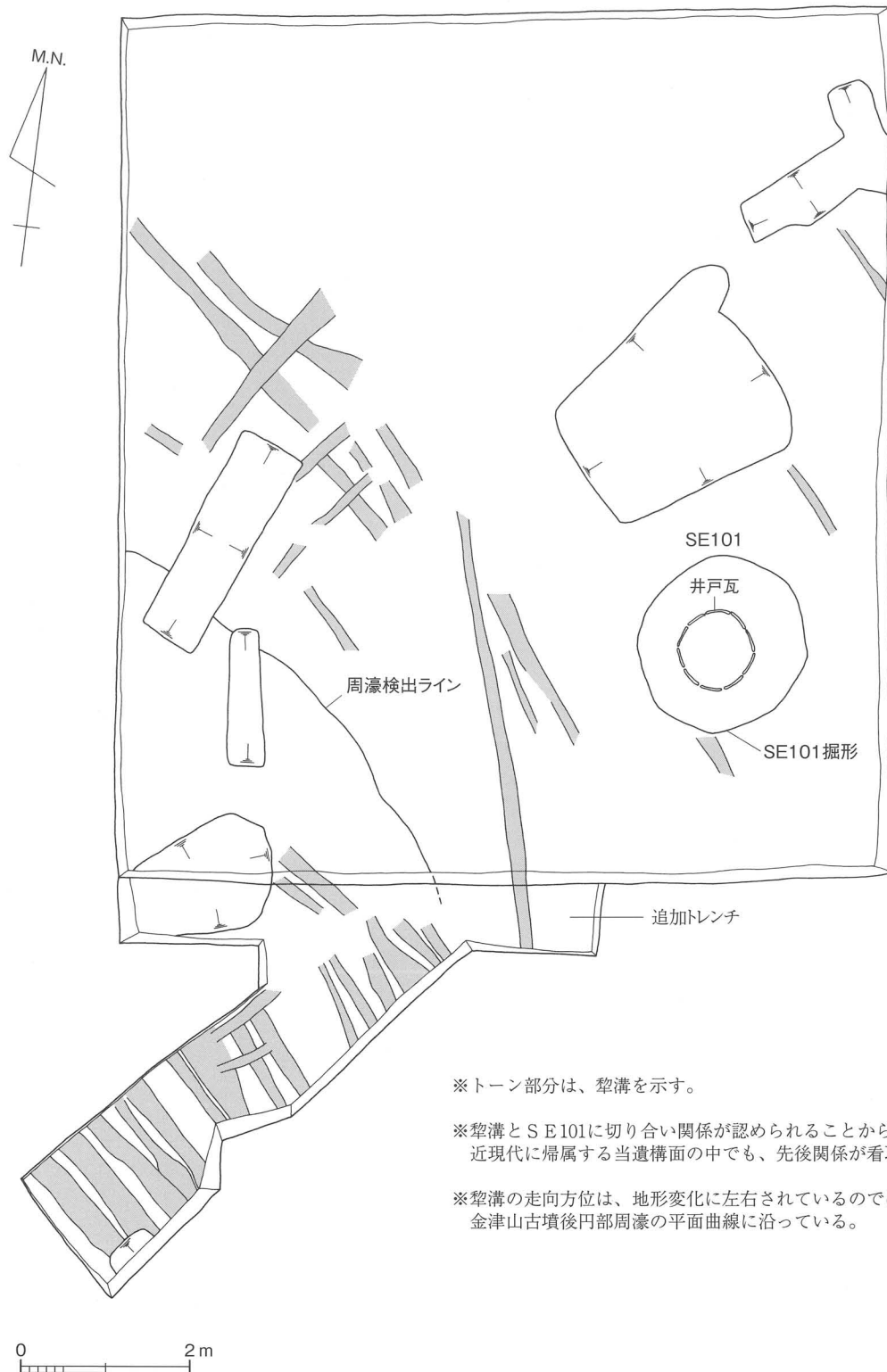
第10図 S E101埋土半裁状況（南から）

S E101は、調査区南東隅で検出された。本来の構築面は3層を切っていることから、水田機能時以降に構築されたものと断定できる。掘形は、検出上部長径2.2m、短径2mのほぼ正円である。井戸側の構造は、凸面に楔形の文様を施した瓦を10枚1段として15段目まで確認することができた。1段ごとの外周には簀によって外倒れを防ぐように固定されていた。埋土は、15段目（検出面から-3.8m）までは一括廃絶客土であった。井戸瓦を用いた井戸は近世から類例をみるが、当井戸はおそらく現代に帰属すると思われる。15段目付近の埋土からは、現代のおもちゃが出土している。

遺構面2（第12・13・18～23・25・26図）

調査区南西隅で後円部周濠の掘形を検出した。検出レベルはT.P. +9.7mを測る。周濠の埋積状況と上層の耕作土層の観察から、本来の構築面は若干であろうが、削平を受けていると思われる。以下、観察小項目を掲げ、記述していきたい。

周濠の形態 追加トレンチは、後円部中心を基点として主軸（推定）から約70度東偏した位置にあたる。墳丘側までトレンチを抜いていないため推定値となるが、当地点での周濠の幅は5.9m以上、おそらく7m程度になろう。深さは検出面から1.34mを測り、後円部墳頂（現地表面、構築時の墳頂ではない）からは約



第11図 遺構面1平面図 1/80

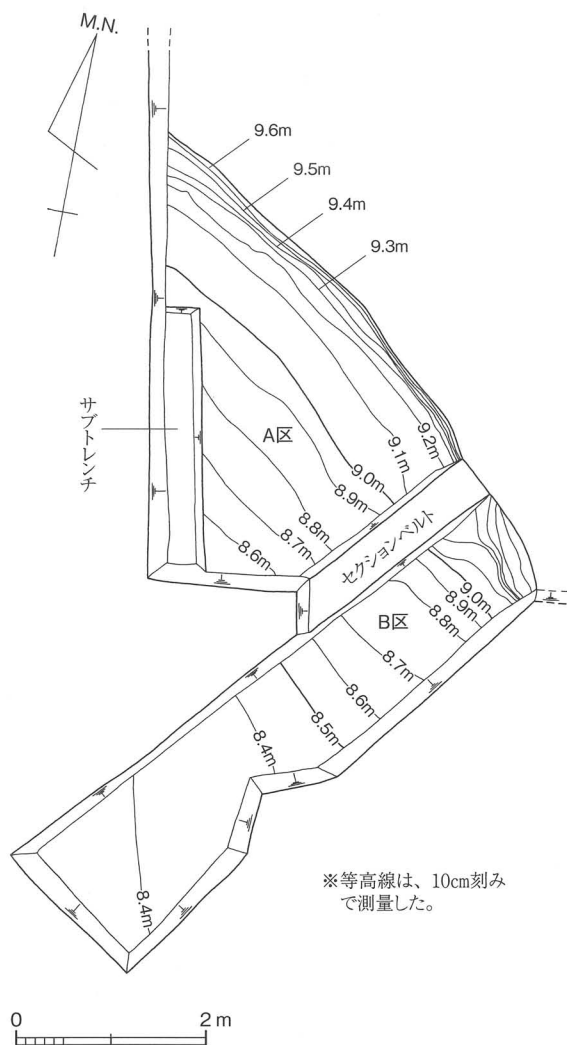
6.5mを測る。断面形状は、実測したセクションベルト部分のみ検出面から緩やかに落ち込むが、他の箇所は外堤から垂直に近い角度で30cmほど落ち込んだ後、やや波打ちながら緩やかに底面に向けて移行する（第19～21図）。

周濠の埋土と堆積環境など、各層の性格については

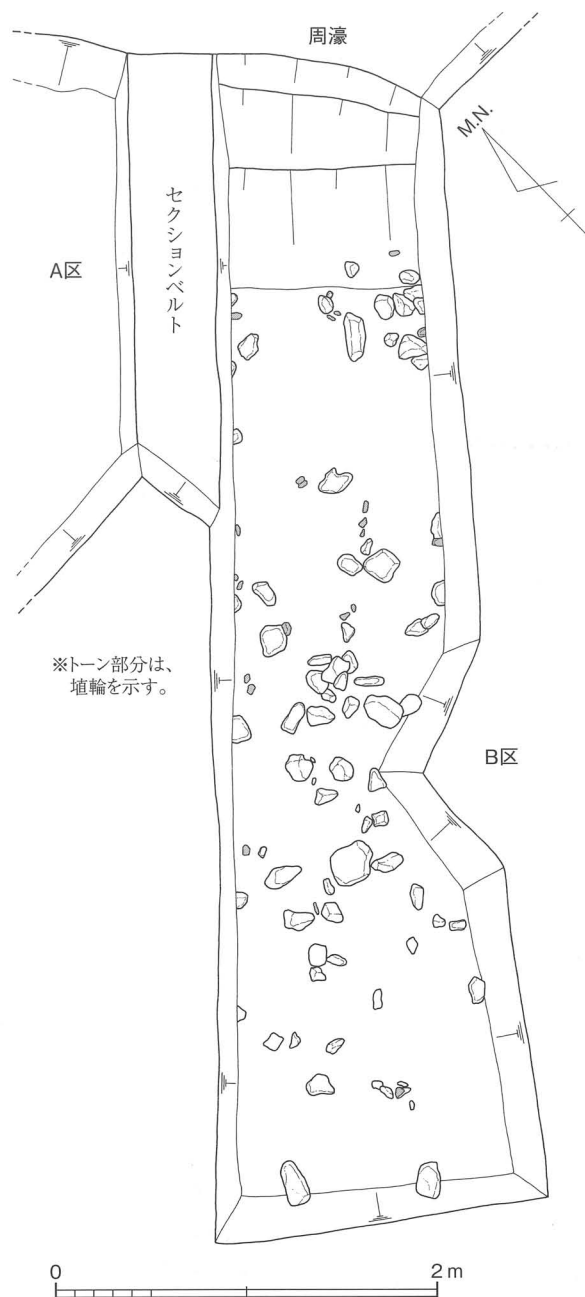
基本土層に記したため（第6図）、ここでは総論的なことを扱いたい。まず、大別の①～⑥層の性格と堆積年代を示すと、以下のようになる。

①層…近世以降に墳丘裾まで耕地として利用するために、やや窪んでいた周濠部分に寄せられた置土・客土。

- ②層…中世～近世に堆積・埋積した層。ある一定のレベルで植生が観察でき、開放状態が断続的にあったと考えられる。また、ブロック土を含む層もあり、当層埋積期間内に人為的に埋められたと考えられる。既往の調査でも、中世段階には可耕地化の波に押され、周濠が廃絶したというデータが得られており、今回も矛盾をきたさない。ただし、②層内で中世と近世を弁別することはできなかった。
- ③層…中世に外堤側から流入したブロック土。中世須恵器片に混じって埴輪片の出土量が増す。③層内に埴輪片を含むことから、外堤に埴輪が立てられていたことが推測できる。ただし、削平を受けているためか、外堤部検出面では埴輪樹立痕や布掘り痕は検出していない。
- ④層…墳丘崩壊の兆候を示す埋土。底面から30cm程上に堆積しており（第6図）、埋土の中では転落葦石・埴輪片をもっとも多く包含する。



第12図 周濠平面図・等高線測量図 1 / 80



第13図 B区周濠葦石出土状況平面図 1 / 40

- ⑤層…墳丘構築時（5世紀後半）に近い堆積土。澱水堆積を示す。出土した葦石・埴輪片は後世に沈み込んだ混入と思われる。
- ⑥層…墳丘構築直後の堆積土。澱水堆積を示す。これらを概観すると、墳丘構築時には水濠であったと思われるが、④層堆積時には滞水しておらず泥湿地の状態であったことが推測できる。また、浚渫された形跡が観察できないことから、中世まで墳丘・周濠が崩壊しながらも放置されていたことがうかがえる。
- 葦石 岩質はおおむね六甲花崗岩である。法量・重さの測定は現段階ではしていないが、基本的には15～20cmを測る歪角礫である。管見のかぎりでは、やや長

楕円のものが多いように感じる。石を墳丘面にはめ込む都合で意図的に選択しているのかもしれない。30cm前後のものが少量出土しており、これらは墳端をめぐる基底石になると思われる（第13・23～25図）。

外堤 ベースは、大阪層群（洪積層）を削出して構築されている。外堤削平面では、古墳時代にともなう遺構は検出されなかった。盛土の有無については不明である。

（5）遺 物

出土した遺物の総数は、27ℓ容量のコンテナにして11箱を数える。種類は、瓦・陶磁器・須恵器・土師器・埴輪・葺石などがあり、その大半が葺石である。ここでは、埴輪を中心に記述していく。

埴輪の種類は円筒埴輪のみであり、前方部や後円部墳丘調査で出土した形象埴輪の類は出土しなかった。朝顔形円筒埴輪に復元できそうな個体は、若干ではあるが確認できた。周濠内で出土したものの保存状態の良好なものは少数で、器面の摩耗は著しい。おそらく、土中の保存状態というよりは、金津山古墳に供給された埴輪自体の質によるものと考えられる。つまり、製作段階における焼成条件、焼き締め具合が若干甘かったと考えられる。

今回出土した円筒埴輪は、総じて、胎土は2mm以下の白色砂粒を含み、比較的良質な土を選択しているようである。全体的に、浅黄橙色を呈し、無黒斑である。数点に限っては、胎土の異なるやや褐色を呈するものを含んでいる。また、器面に赤彩を塗布するものが散見される。内面調整は、基本的にナデによって仕上げられるが、ハケの痕跡がみられるものが数点含まれる。外面二次調整は、上記したとおり、観察条件の整った資料は少ないが、Bc種ヨコハケが主体を占めるようである。タガの断面形状は、台形を呈するものと、やや退化したと思われる三角形や不整形の突出度の低いものがみられる。スカシ孔は、円形と判断できるものが数点確認できた。編年の位置付けとしては川西編年Ⅳ期、5世紀後半であろう。（第27・28図）

既往調査で出土した円筒埴輪の内、全形を推測し得る資料を参考にすると、本墳に樹立していた円筒埴輪は、4条突帯5段構成のものを原則とし、ヨコハケの細分では、Bc種・Bd種のものが目立つようで〔白谷・森岡編2008〕、第2地点周濠底面直上で出土した田辺編年TK23型式〔田辺1981〕の須恵器杯身と触れ合う時期の埴輪群と言える〔森岡1988b〕。

4. 小 結

以上、金津山古墳の構造・施設の一端が明らかとなった今回の調査地点の諸成果について報告してきたが、以下であらためて総括を試み、調査地の取り扱いなどについても述べておきたい。

芦屋市内2番目の規模を有する前方後円墳（全長55m）の金津山古墳については、昭和60年の周濠調査（第1地点）以来、たびたび調査のメスがかえられている。第2地点の成果はとくに大きく、前方部の存在が判明し、出土埴輪類からその築造時期も5世紀後半であることが確定した。後円部についても1本ながらトレンチ調査が行われており、埋葬施設の態様が予測し得るようになった。

今般調査を行った第12地点は、後円部北東側に位置し、後円部周濠が完周することを前提とした事前調査の性格をもって実施されたものである。調査した結果、幅6m弱以上の周濠が検出され、その堆積土を分層発掘することによってさまざまな所見が得られた。

周濠の検出地点は、第3図を見て明らかのように、第1・6・9・12地点とトレンチを図示しなかった第2・10・11地点におよび、ほぼ完周することが追認された。周濠は③層堆積時点で瓦器・瓦質土器や陶器を含み込み、第12地点では中世後期の段階において、底から70cm程度の堆積が進行していたとみられる。

④～⑥層は古墳時代の遺物が中心となり、流入した埴輪を比較的多く含むことから、築造後、古代に至るまでに埋没が進んだ周濠の初期堆積と考えてよい。周濠はこれまでの発掘調査や試掘調査でも空濠が水成化していく早い過程で埴輪や須恵器の出土を見ており、第12地点のトレンチ調査でもほぼそれを裏づけることができた。

さらに、平成19年度（2007・2008）に調査された第17地点では、墳丘北西部で二重周濠（外周濠）の存在が確認された〔白谷・森岡編2008〕。

出土埴輪は、川西宏幸氏編年の第Ⅳ期に比定し得るもので〔川西1978〕、近傍の打出小槌古墳出土埴輪におそらく先行する。翠ヶ丘古墳群における本墳の位置づけについては、伊丹市御願塚古墳など、周辺地域に存在するほぼ同時期に築造された帆立貝形前方後円墳同士での比較考証が今後さらに必要であり、打出小槌古墳との系譜関係も問題となろう。

金津山古墳の所在する標高7～11mの翠ヶ丘丘陵上には、三角縁神獣鏡を含む銅鏡数面を出土した有数の前期古墳である阿保親王塚古墳があり、本墳に後続する打出小槌古墳を含めて同丘陵上において、ある程度首長系譜がたどれる。阿保親王塚古墳までは、神戸市東部海浜に点在する前期古墳の西求女塚古墳・処女塚古墳・東求女塚古墳・ヘボソ塚古墳などと同列に考えてよい築造動向が存在するが、中期後半まで下って時間的ヒアタスをもつ金津山古墳や打出小槌古墳の築造は、芦屋地域における大王墓時代を迎えて以降の新しい動向である。

周辺では、前述した狭隘な神戸平野の前期古墳群地帯に中期後半から築造を開始する住吉宮町古墳群が存在し、既に総数100余基におよぶ確認数がある。これ

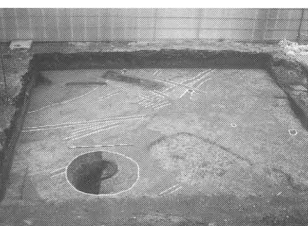
らは横穴式石室のみを埋葬施設とする六甲山地南麓部の群集墳よりは1世紀近く先行して営まれたもので、密集度も著しく高く、墓域構成にも規則性が認められる。最近では横穴式石室墳からなる一群も見出されており、大阪府長原古墳群と酷似したタイプの平野部立地の群集墳といえる。6世紀前葉築造の住吉東古墳は、帆立貝形の小規模前方後円墳でありながら、その中にあっては盟主的位置を占めており、同様な兆候は周辺の試掘データから推察すれば、この翠ヶ丘丘陵上にも金津山古墳との関連でその存在を予測し得るようになった。

遺構面1の近世以降の井戸・生産遺構（水田跡）に関しては、『摂津名所図会』（寛政8年、1796年）では視認できない墳丘裾際までの生産域としての土地利用

を確認することができた。当地点周辺（後円部、墳丘北側）の犁溝は、他の方形区画の水田跡でみられる一定方向の犁溝ではなく、後円部や周濠の曲線に沿ってひかれていたことが推測できるに至った。

最後に、本地点では、地権者のご厚意もあって、周濠幅やその堆積構造を得るためのトレンチを延長させていただいた。これがなくば、まことに不十分で形式的な調査に終わったと考えられるが、周濠断面の情報など最低限の基礎資料を記録に取ることができ、一定の成果があったといえる。

今後の取り扱いとして、調査区基底にあわせて工事深度を守っていただくよう指導するとともに、適宜、工事立会を行った。
(坂田・森岡)

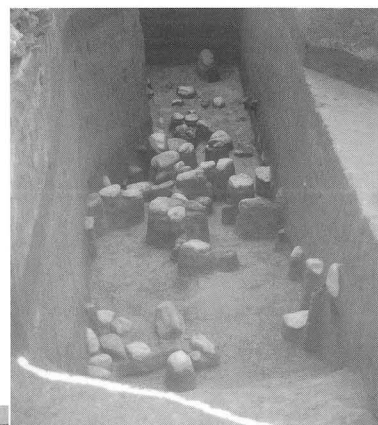
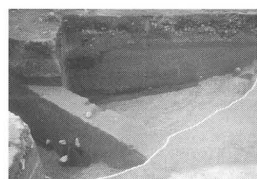


第15図 遺構面1（東から）

第16図 遺構面1 完掘状況（東から）

第17図 遺構面1と後円部（北東から）

第14図 遺構面1（北東上方から）

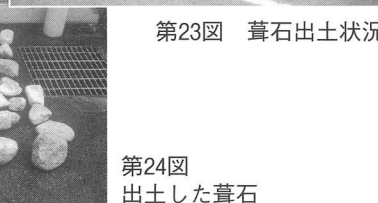


第18図 周濠検出状況（北西から）

第19図 周濠完掘状況（北東から）

第20図 B区完掘状況（北東から）

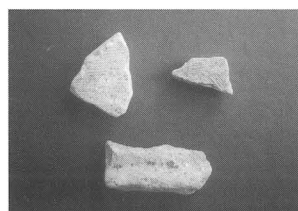
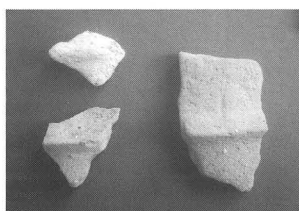
第23図 葺石出土状況



第21図 周濠断割状況（北東から）

第22図 セクション（南東から）

第24図 出土した葺石



第25図 埴輪・葺石出土状況

第26図 埴輪出土状況

第27図 埋土②層出土埴輪

第28図 埋土④層出土埴輪

第3章 まとめ

第1節 平成15年度の調査成果の特徴

本書に収載、報告した4遺跡4地点は、これまでにそれぞれ異なった発見の契機と調査履歴、調査内容に漲る様々な特徴を有している。

芦屋廃寺遺跡は、白鳳期に遡る古代寺院を中核とする複合型の遺跡で、それ以前には縄文・弥生・古墳時代の集落遺跡が存在し、古代以降には芦屋廃寺の後身を継受する中世や近世の寺院や生活跡が営まれており、遺跡の平面・立面構造は互いの遺構の相補関係も手伝って複雑な展開をみせる。当該年度に対象とした第89地点は寺域中枢と関わる要所と言える。間接的ながら、調査結果にもそれは反映していると考ええる。

寺田遺跡の第171地点は、遺跡範囲の中心部に位置するが、東川以東にあって東部の様相域の一角に属する。最も調査件数の肥大した遺跡の一つであり、縄文時代から始まるその複合性はエリアに傾向を示しつつ、江戸時代へと至るボリュームが認められる。これまでも郡司層と係わる墨書土器や皇朝十二銭、中世では華南産の外来土器など、貴重な遺物が出土しており、小面積の調査からでも大きな成果を得ている。また、平成12年度から実施されてきた山手幹線に伴う事前調査では、市内では唯一面的な変遷動態が認知できる調査所見が出ていることも大きな特徴である。第171地点の調査概況も遺構面数、遺構検出数共に、こうした動向と大きく抵触するものではない。

清水遺跡は阪神・淡路大震災の復興調査において新出した遺跡の一つであり、当時倒壊家屋などの被害の大きかった地域に存在する〔森岡・竹村2000〕。第22地点はその南縁部にあって、南方に所在する津知遺跡の様相に近い所見が得られたことを特徴の一端とする。また、中期に属する金津山古墳は、馬蹄形周濠を有する市内ではナンバー2の前方後円墳である。現存では、市内最大の墳丘を誇る。全長55mの帆立貝形を呈するものであり、5世紀後半の築造と推定される。第12地点では周濠の完周が追認されており、濠内の堆積過程も墳丘の崩壊と土地利用を示すこれまでの調査成果と概ね整合するものであった。

以下では、報告のまとめを兼ね、既往調査との関係を若干ながら紹介しつつ、焙られ析出された課題と目されることなども簡潔に述べておく。(森岡)

第2節 芦屋廃寺の寺域と諸施設の広がりについて

第116次の多きに達する芦屋廃寺遺跡の調査では、草叢の環境下において常に古代寺院跡の寺域中枢の正

確な範囲が追求められてきた。堂宇が並び建つ中心伽藍が既に市街地と化した廃寺の宿命でもあり、手探り状態で隔靴搔痒の感を抱きつつの調査が繰り返し続けられてきたのである。驚異的に変貌した街角ながら、今回事前調査の対象となった第89地点でもその観点からの調査が必要であり、遺構の不在から異を唱える向きもあるが、結果として遺物相からは伽藍の内に入ることが想定できる微証を得たと言える。

幾多の物証から招提の要をなす郡寺の性格を色濃く帯び、「兎原寺」の本称さえ予測されている仮称芦屋廃寺の場合〔森岡2008a〕、寺地をどのように定めたかが第一に問題となろう。傾斜著しく起伏に富む芦屋川扇状地に建立された芦屋廃寺の場合は、選地の必然性や公然性が他律的なのか、あるいは自律的なのか先ず気に掛かるわけであり、そのことが造寺諸施設の機能とも不可分な関係にあることは言うまでもない。

常識的には寺院の中核施設は金堂と塔であり、僧徒の起居する僧房の造営も伽藍の建設工事の中では率先して早い段階にスタートしていることが推測されており、仏陀の舍利を祀るという施設としての根源に帰れば、塔と僧房とが建立の初期に不可欠な施設であることは全うな理解である〔森1998〕。ただし、仏像と經典が重視される日本古代寺院の独自性、列島の常則から察すれば、金堂建設の先行は伽藍の中心たるべきものであり、最も古い軒瓦が所用されるエリアがその候補地となる。また、著名な奈良県下の飛鳥寺や創建法隆寺（若草伽藍）、額安寺などの伽藍中軸線は寺域と思しき領域の西側に偏在する事実があり、斑田図などに描かれている倉・食堂・竈屋・馬屋などの付属施設が東半域に遺存するような変異が早くから窺える活動維持の経営形態は、中央寺院の動向とは言え、大いに参考とすべきであろう。しかし、そもそも平地を選んでいない芦屋廃寺の場合は、山寺とは言えないまでも地形に即応した寺域の階段状の造成とその後の造営工事のプランニングが変則的にならざるを得ず、現状では寺院附属施設の北側重視の配備という処遇も捷速な推定の域内には入る。

さて、芦屋廃寺の中軸線が正南北を採っているらしいことは、B地点や第62地点の建物遺構の東西配置や現行土地割とは異なる創建期の古地割の存在から領けるが、当地域における奈良時代と平安時代後期以降の土地割の変容についてはしばしば論議してきたところであり〔森岡2001、森岡・坂田編2004、竹村編1999〕、言うなれば、建物の本義から自然地形重視への移行が容認され、さらに言えば、交通諸幹線の設定がその変化を先取りしていたものだろう。

今回の調査地点は、1～3次やB地点・62・75地

点など軒瓦出土量の顕著な枢要部と関係する場所と言え、本来は寺院施設、付属建物の存在も考えられてよい。寺域中枢は現状地形にも端的に表れており、西30m付近で西限を想定し得る低位段丘崖の伏在線があり、以西における関連瓦の検出数の急減がそれを反映している。ただし、この地点周辺では後世の土地利用により、既に損傷を被っている可能性も高い。(森岡)

第3節 芦屋川扇状地の発達と衰微をめぐる寺田遺跡の推移

寺田遺跡は、前述したように、市内では最大面積を誇る集落遺跡であり、これまでに各地点において縄文時代から江戸時代に及ぶ各期の遺構・遺物のいずれかあるいはすべてが確認されている有力な複合遺跡である。阪神・淡路大震災後、都市計画道路山手幹線街路事業に伴う発掘調査が神戸市と芦屋市との間に事務委任する形態を採って幹線道路の復興に絡む事前調査が実施されており、平成12年度から平成21年度の約10年間の発掘成果には目を瞠るものがある。それらは毎年度末に報告書として公開されており、総集編や最終盤段階の芦屋市教育委員会による調査を含め、既に8冊に達している〔前田・平田・中居2002、前田・千種・佐伯・平田・中居2003、前田・石島・中村ほか2004、川上・阿部・中村2005、安田編2006・2007、安田・山本編2008、竹村・守田編2009〕。したがって、この遺跡が生活環境の選択を時代や細別された時期ごとに鋭敏に行い、結果としてその立地特性がある程度掌握できたことは幸いであり、それらが最新の地形分類(辻2003、辻ほか2002)とも照応する点は無視できないと考える。すなわち、芦屋川の右岸域では、東川以東に厚く堆積する沖積扇状地中位面構成層が認められ、弥生時代中期初頭頃を下限として形成されており(第Ⅱ様式の遺構・遺物を第55・95・127・130地点などで確認、検証)、東川と直交する左岸側の西向き開析支谷はその土壌化年代から弥生時代終末期(Ⅵ期)以降に堆積環境の安定化を獲得する。他方、東川以西においては、弥生時代前期に既に生活に適した土地条件を満たしていたことが判明している。人々はより良い住環境を求めて東川を超えた移動を行ったと考えられ、より微高地を目指して芦屋川の方角へと生活高度を高めたとみられる。分岐集団としての存在形態を示す中期後半、Ⅳ-3段階凹線文土器盛行期(寺田遺跡第55・130地点、月若遺跡第12・18地点、芦屋廃寺遺跡B地点など)と一線を画する。弥生時代後期から鎌倉時代にかけての居住域の複合化現象はひとえにこの膨らむ扇状面高位部への執着に他ならず、水田化を図る以前に広がりが必要とする居住域の選別が水利とは無関係に高燥な土地に向かったことは至極当然の成り行きであったと思われる。

翻って、弥生前期以前は芦屋川自体が扇状地の形成に及ぼした堆積物の供給活動を分散化させ、本川機能としての扇縁・扇央化が長期間停滞していたとみられ、その部位には逆に篠原式期を含むそれ以前の安定度の高い生活面が確認されている(寺田遺跡第120・121・122地点、芦屋廃寺遺跡B地点)。今や集団間の系譜的連続性を問うことは困難であるが、少なくとも縄文晩期前葉の在地集団に対して、伝来してきた弥生前期後葉の初期農耕集団が芦屋川右岸扇状地形成の不安定な東半域の自然環境を意識的に回避しつつ、東川以西の低位部での居住空間の確保に向かわざるを得なかったことは、受容地点に所在する北青木遺跡成立以降の沖積地奥部への開田化の態様の一端を示している(寺田遺跡第1・16・17・20・27・133・142・151・152・153・168地点など)。

古墳時代前期以降、中期の末にかけては、弥生時代後期後半の動向を受け継ぐ形で月若遺跡の動態と一体化した動きをみせる。耕地の近接化と共に居住域の固定化がより一層進んだものと思料され、集落形成から差別化された放棄地のありようが今後の課題として残されている。特筆すべきは、古墳時代後期以降、飛鳥時代にかけて、居住域が再び東川を超えて西への展開を著しく見せ始めることである。続く奈良時代にもその傾向は踏襲されるが、居住域の中枢は扇央のより西側に収束する動態を示す。これらの集落は背後の城山・三条古墳群の生成と被葬者の析出を促した累世的な特定上位層を包摂する集団であったろう。

興味深い点は、鎌倉時代に入ってから動きであり、再度、東川以東への偏在性が看取される(寺田遺跡第40・95・117・118・119・127・130・132・139・141・166・167地点、月若遺跡第18・19・70地点など)。とくにその最初期では、第117・118・119・139地点を要とするより東部に開発期の建物群が比較的密集して営まれたことが判明しており、それらは東川以西の六条遺跡の該期の建物群や園池遺構ともおそらく併存する存在であり、その居住階層の性格が注目される。これまでの調査を概括してみても、寺田遺跡からは際立った外来系の中世遺物が出土しており(滑石製石鍋Ⅱ類や中国磁窯産黄釉鉄絵盤)、遺物相から想定し得る社会階層は秀でたものであり、より広域な分析や研究を必要とする。

今回の調査個所は、芦屋川右岸扇状地の扇央から扇縁にかけての地域であり、第1遺構面の所見からは鎌倉時代以降の居住域の大きな進出は認めがたく、これまでの出土傾向を傍証する。第2・3遺構面の様相からは、飛鳥・奈良・平安時代段階の生活相の充実が窺える所見であり、須恵器を伴出ししない第4遺構面では、Ⅱ区において方形プランの竪穴住居跡1棟を検出する成果があり、古墳時代前期と想定される居住域の広がりが追認できた。

以上の粗述で明らかなように、寺田遺跡を中心とする芦屋川・東川扇状地上の遺跡群は、就中、堆積性の芦屋川扇状地の発達過程とその盛衰が密接な関係にあり、本川流路の固定化以前の網状流による土砂供給と河川水の伏流状況、透水力、浸透力の加減などに基づく生活表層の変貌が複雑に目的や役割を異にした人の営みに制約をつけ、展開の場に変更の要因を与えている。自然環境の大きな変化は、一先ず下刻作用を伴う東川の東西で生じており、その掃流力の転動や乱流、土石流による表層地形の変化に即応して生活基盤の急激な転移や離脱が看取される。その間には小寒冷など気候変動を挟むことも予測され、上記してきたような扇状地面での不規則な居住集団の頻繁な移動の背景を探るには、多岐に亘る諸因子の解析を必要とする。西方に展開する東川扇状地は扇面同士が重合した複合扇状地の典型ではなく、その供給に偏りをみせる土砂運搬量は芦屋川の比ではない。この川の流水制御が強固に働く室町時代後半期には、むしろ生活供給用水としての役割へと傾斜、転換し、一部神戸市域をも含む下流域の近世村落の田畑を潤すことになった。（森岡）

第4節 墳形・周濠形態からみた金津山古墳の特質とその追認

市内東部の打出の地、翠ヶ丘丘陵上に立地する金津山古墳は、芦屋市を代表する前方後円墳の一つであり、前方部の取り付く方向から、海を意識した古墳であることが主張されて久しい〔西谷1974、森岡1995〕。それは前後して新しく確認されたいま一つの前方後円墳である打出小槌古墳の時期や態様が判明するにつれ、より一層意味深いものとなっているし〔森岡1986・1987・1992・2008a、白谷2008〕、古墳から捉えた当地域の政治史的動向の究明は逼迫している課題でもある。金津山古墳は問題のない狭義の帆立貝形前方後円墳であり、遊佐和敏氏の定義する後円部径の3分の1以上の前方部長を有し〔遊佐1988〕、櫃本誠一氏による「前方部長が後円部径の1/3、幅が1/2程度の一群」に属し、「前方後円型の帆立貝形古墳」の範疇を満たす〔櫃本1984〕。また、後円部直径の1/8を基準単位とする古墳築造企画論を打ち立てた石部正志・田中英夫・宮川渉・堀田啓一の諸氏は、その区数による区分論を展開し、突出部5～8区型を定形的な前方後円墳、1～4区型を帆立貝形古墳に分類し、1・2区型に関してはその名に適合する典型墳として把握したが〔石部・田中・宮川・堀田1979〕、その適否は追認されるところである。

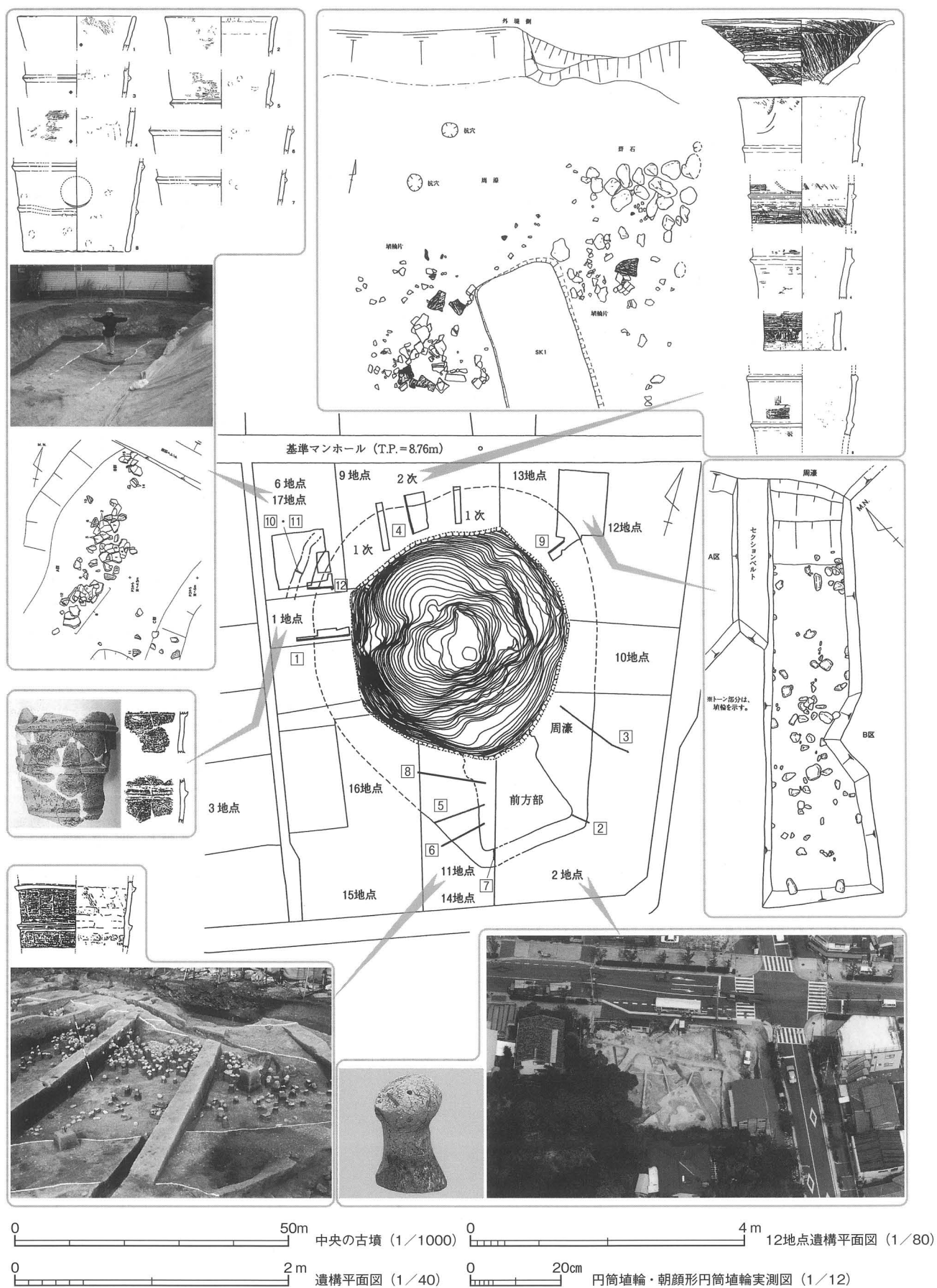
他方、金津山古墳について、主丘部直径または一辺の24等分値を基準単位とする作図法による築造企画論を試行する沼澤豊氏〔沼澤2006〕は、残る前方部を検出して全体像が復元された〔森岡・辻2000〕の報告数

値から、主丘部径30歩（41.1m）の規格で、突出部長8単位、幅10単位との評価を与え、同時に古墳造営尺の1尺が22.9cm、6尺＝1歩＝1.37mをもって使用されたことを主張している。また、用語も前三者とは異なっており、主丘部・突出部の呼称を取って貫く。

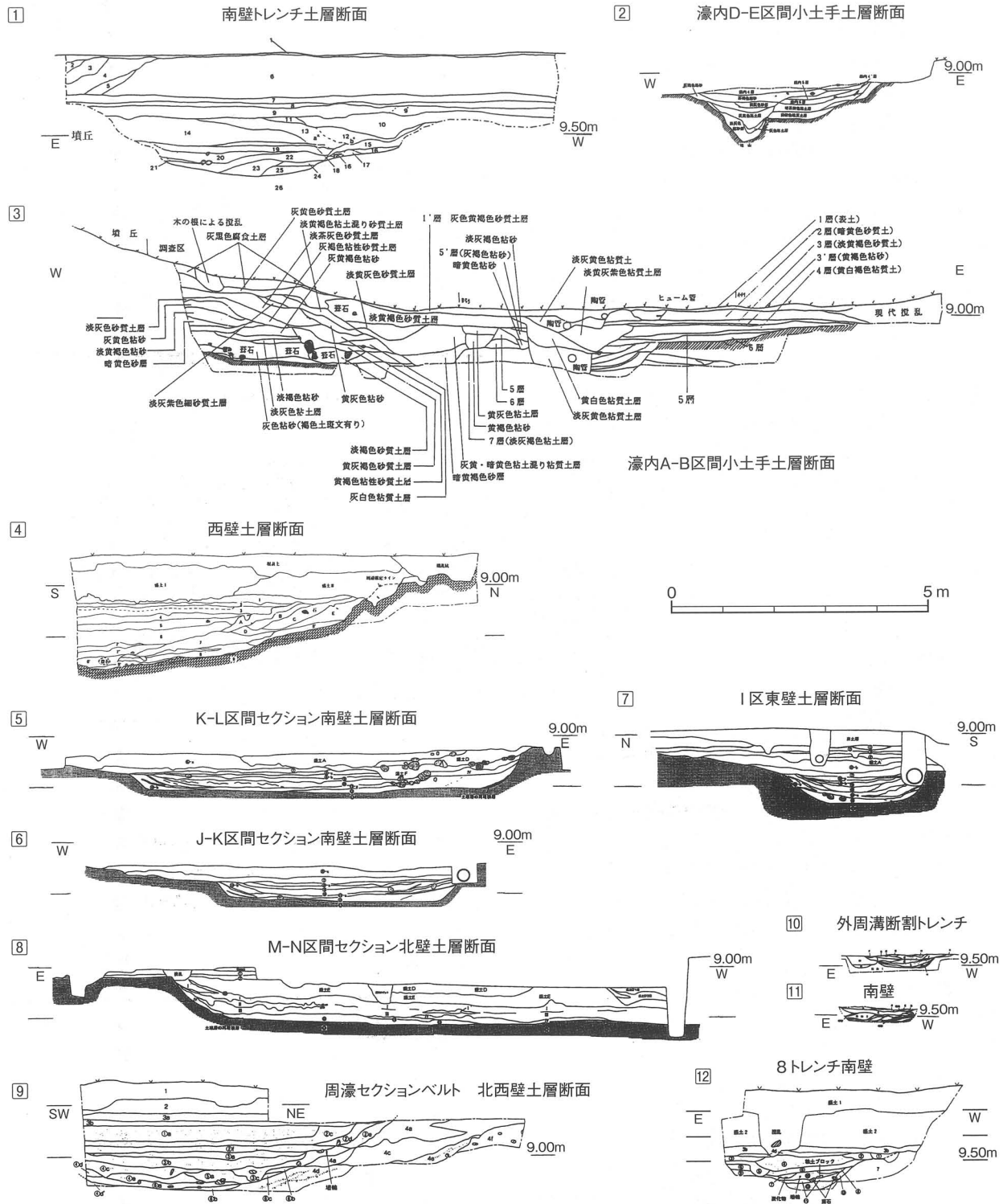
本地域では築造時期（7期）や規模が比較的似る伊丹市御願塚古墳の設計企画が金津山と同じ主丘部径30歩の規格で大突出部長6単位の事例となり、先端部幅は10単位で金津山古墳と同単位数を数える。金津山古墳より分かりよい周濠は主丘部の背後で幅4単位の可能性が説かれており、前面も同単位数を示唆する。金津山古墳の場合、前方部と呼んだ削平部の前端部分周溝幅は残存幅が3m前後しかなく、御願塚古墳のありようとは著しく異なるが、後円部周濠の4単位とする想定は参考になる。また、一部にせよ二重目の濠ないし溝が報告されるにおよび〔白谷・森岡編2008〕、築造企画については、古墳の総長をも射程に入れた総合的理解も不可欠であり、この古墳の構造や設計理念をめぐっての課題は少なくない。

第12地点では、完周する濠の断面図の一部を測図できたが、このたび比較の意味から、他地点の公表図とともに第1・2図を作成し、便覧に供した。墳形は変形し、周濠の本来の肩も随分削平を受けていることが予測されるが、周濠の底のレベル自体にもT.P.値7.7～8.8mの差違が認められることが判明する。また、本墳には前方部とは別に造り出しが付設されと考えているが、出土した須恵器（器台・壺など）や器財埴輪から窺われるものであり、その要所の発掘調査は今後不可欠と思われる。また、他地域の帆立貝形古墳で比較検討すべき資料も多々認められ、大阪府供養塚古墳（7期）、井ノ奥4号墳（7期）、蕃上山古墳（8期）などは、馬蹄形周濠を有するのみならず、築造時期も互いに近接するため、細部にわたっての照合の価値がある。今後の主要課題となるだろう。

周濠については、基本形態の把握と二重目になる浅めの濠ないしは外周溝の存在がある。第17地点で確認された外側の周溝は、然程盛り土を行わない外堤の外周端に区画的な溝を掘るような態様のものである可能性も強く〔白谷・森岡編2008〕、堤上における疎らな円筒埴輪の樹立は考えられてよい。既往の調査においても、本周濠の外側からの流入を明確に示す転倒埴輪類の出土状態を確認している。また、渡り堤の存否や造り出しの基本形態など、これまで行われてきた調査内容では明らかにし得ていないことも多い。後円部墳丘の構造確認調査〔森岡・和田・後神1990〕によって明証が得られたことであるが、墳丘第二段以上の盛土部分には、大阪層群構成土とともに粘性度の強い黒褐色の弥生遺物包含層が利用されていた。金津山古墳を乗せる台地の端は、すぐ東側で丘尾的に終わって急激に深くなる谷状地形が展開するため、起源となった弥



第1図 金津山古墳地点別周濠検出状況・出土埴輪集成



- | | |
|--------------------------------------|---------------------------------|
| ① 第1地点 周濠堆積土層断面図 [森岡 1987] | ⑦ 第11地点 周濠堆積土層断面図 [森岡・辻 2000] |
| ② 第2地点 周濠堆積土層断面図 [金津山古墳周濠発掘調査会 1989] | ⑧ 第11地点 周濠堆積土層断面図 [森岡・辻 2000] |
| ③ 第2地点 周濠堆積土層断面図 [金津山古墳周濠発掘調査会 1989] | ⑨ 第12地点 周濠堆積土層断面図 [本書・坂田・森岡報告] |
| ④ 第9地点 周濠堆積土層断面図 [森岡・木南 1996] | ⑩ 第17地点 周濠堆積土層断面図 [白谷・森岡編 2008] |
| ⑤ 第11地点 周濠堆積土層断面図 [森岡・辻 2000] | ⑪ 第17地点 周濠堆積土層断面図 [白谷・森岡編 2008] |
| ⑥ 第11地点 周濠堆積土層断面図 [森岡・辻 2000] | ⑫ 第17地点 周濠堆積土層断面図 [白谷・森岡編 2008] |

第2図 金津山古墳前方部・後円部周濠堆積土層集成比較一覧 1 / 120

生時代前期の遺跡は、集落としてこの低所地近辺に展開する蓋然性が大きい。実際、金津山古墳の周濠内遺物には、遠賀川式土器に伴う太型蛤刃石斧や方柱状片刃石斧など典型的な大陸系磨製石器類も出土しており、生活遺品全体が築土素材の包含層ブロックとして包括的に移動している形跡が認められる。周濠掘削土で追いつかなかった墳丘盛土の供給がやや離れた場所でも行われ、同時に盛土の築成に相応しい混用土の選択が意識的になされたものとみられる。基盤層である大阪層群は、鮮新世の末期から更新世にかけて形成された第四紀の気候変動をも示した地層であり、本墳の立地する翠ヶ丘台地の基盤地質として広く分布する。粘土・シルト・砂・礫と海成粘土層から成り、火山灰層を挟在させる（Ma0～Ma12層）。土質自体が多様な大阪層群は元来、単独では古墳盛土として最適なものではなく、墳丘構造を保つ工夫の一つとして混成土を案出、周囲にも採土選別の触手を及ぼし、粘着性の強い有機質土の必需量を想定の上、一定量搬入したものである。葺石の調達に関しては、近在の河川に豊富な円礫は少なく、回転円磨の著しい海浜部の打ち上げ礫が運び込まれた可能性が高い。これはかつて打出小槌古墳の発掘調査に際し、奈良県立橿原考古学研究所共同研究員の奥田尚氏からご教示頂いたことである。葺石に認められる黒雲母花崗岩以外のチャートや砂岩・泥岩の類が宮川水系よりも芦屋川水系に由来するものが多いこともその証左となりうる。古生層系の礫種が認められることから言えば、少なくとも標高150m以上の六甲山地前山に起源する礫が一旦芦屋川を流下した後、湾岸を浮遊して再度打出浜に寄せられたことは考えられてよい。今回の調査結果もそれと抵触をきたさない葺石が含まれていたと言える。

さて、金津山古墳の築造された時代は、和泉・河内の百舌鳥古墳群、古市古墳群で超大型前方後円墳が次々と築かれた所謂「倭の五王」の時代に匹敵する。紀元400年前後からは、大王墓として上石津ミサンザイ古墳（履中陵）、誉田御廟山古墳（応神陵）、大仙古墳（仁徳陵）、市の山古墳（允恭陵）、土師ニサンザイ古墳などが継起的に営まれており、外部構造の特殊要素として二重周濠ないしは外堤区画溝を持つ金津山古墳の中央直属的な被葬者も畿内王権の膝下で倭国の軍事編成の末端を掌ったと考えられる。窖窯焼成の技術、Bb種・Bc種ヨコハケの導入初期に築造を見た誉田御廟山古墳（TK73型式段階）は、他を凌駕する圧倒的な姿、規模を大阪平野に誇示し、以後の大王権力の一統の成長と安定度の高さを窺わせる。金津山古墳に所用された円筒埴輪採用ヨコハケは多様であるが、Bc・Bd種を主体として、古い手法を一部引き連れている。TK208までは遡らぬ伴出須恵器の実情から察すれば、この古墳の築造時期も一定の枠組みの中には入り込む。5世紀の畿内王権は、『宋書』夷蛮伝に登

場する讃・珍・済・興・武の五王の系譜や大王の王統譜に現れた父子や兄弟相承の混在型の皇位継承形態の世襲化が図られ、権威・権限の行使の徹底と専有化が名実共に実修されており、数々の古墳副葬品にも政治的威信を伴う品々が下賜されている。東アジア世界において、倭国は鉄素材の入手や覇権を求めて対外関係の深化や軍事的活動を行い、直轄支配下の主要首長層も政治的手腕を振るったものと思われる。金津山古墳の埋葬施設は目下未発掘であるが、周濠をはじめ外部構造の周辺確認が進んできた現在、公開・活用に向けた環境整備とそれに伴う学術的な主体部調査も不可欠であり、上記してきたことの裏付けのためにも、より具体的資料による立証を待たねばならない。（森岡）

第5節 むすび

当該年度に発掘調査した4件の所見について、グローバルな視点から総括を試みた。それぞれの遺跡が論している时期的な変遷や性格が顕在化するのには、さらに時間を要するものとみられるが、既往のデータを十分索し、活用しつつ、随所に史眼を光らせ遺跡間の関係性にも目配りした地域史の物証としての埋蔵文化財の保護を、今後も毅然として断固目指せる自治体であらねばならない。

末筆となったが、市内の遺跡調査でかねてより大きな課題としてきたことを吐露しておきたい。その最たるものが過去の調査でまみ見られた焼土や、黄色粘土塊、炉壁状の残骸など、用途不詳のまま、等閑にしてきた火化遺構の再検討であり、状況証拠を保持した鍛冶工房施設の存在とその後世段階の削平を中心とする損壊など、個別に疑ってみる必要がある。とりわけ「地上式建物系鍛冶遺構」〔村上2007〕タイプの鍛冶専用施設は、立面的な本来あるべき姿の大部分を既に失っているだけに、調査者自体の問題意識や認識の度合いが問われるべき事態であり、常に前向きな研鑽が要求されよう。これらの検証に不可欠な鍛冶関連遺物の検出、鞆羽口・鉄滓・粒状滓・鍛造剥片・燃料残渣・製品などの把握は基層的なものであり、それぞれの性状理解に努める経験を積んでおくことが必須である。村上氏が力説するように、日本列島においては、古墳出現期以降に広い範囲で高温鍛冶技術を獲得しており、古墳時代後期以降には、高温・低温操業など併設機能分化的な仕分け、すなわち、切断・折り曲げ・鍛延などの簡易工程から高度な精錬鍛冶工程までを含み込んでいる蓋然性は大きい。寺田遺跡、月若遺跡、芦屋廃寺遺跡などでは、6～9世紀段階の遺構も頻出度が高く、各遺跡のどのエリアが手工業生産の工房域になるか、鍛冶関連施設が卓越するののか、透徹した洞察も養って、向後の遺跡調査と真剣に取り組まねばなるまい。（森岡）

引用・参考文献

- 芦屋市 1990 『芦屋のうつりかわり 市制施行50周年記念写真集』
- 芦屋市教育委員会 1980 『芦屋市埋蔵文化財遺跡分布地図及び地名表（第1分冊）』＜芦屋市文化財調査報告第12集＞
- 芦屋市教育委員会 1993 『芦屋市埋蔵文化財包蔵地分布地図および利用の手引き』＜芦屋市文化財調査報告第24集＞
- 芦屋市教育委員会 2000 『平成11年度国庫補助事業 金津山古墳〔第11地点〕（前方部西半域の周濠）埋蔵文化財発掘調査実績報告書－震災復興調査－』
- 芦屋市教育委員会 2001 『芦屋市埋蔵文化財包蔵地分布地図利用の手引き』＜芦屋市文化財調査報告第40集＞
- 芦屋市教育委員会 2005a 『平成8年度国庫補助事業 芦屋市内遺跡発掘調査－震災復興に伴う埋蔵文化財緊急確認・本発掘調査－実績報告書集』＜芦屋市文化財調査実績報告集1＞
- 芦屋市教育委員会 2005b 『平成9・10年度国庫補助事業 芦屋市内遺跡発掘調査－震災復興に伴う埋蔵文化財緊急確認・本発掘調査－実績報告書集』＜芦屋市文化財調査実績報告集2＞
- 芦屋市教育委員会 2006 『平成11・12年度国庫補助事業 芦屋市内遺跡発掘調査－震災復興に伴う埋蔵文化財緊急確認・本発掘調査－実績報告書集』＜芦屋市文化財調査実績報告集3＞
- 芦屋市教育委員会 2008 『金津山古墳（第17地点）発掘調査現地説明会資料』
- 芦屋市教育委員会 2009a 『現地説明会資料 50年ぶりの発掘調査－会下山遺跡の国史跡指定をめざして－』
- 芦屋市教育委員会 2009b 『芦屋市埋蔵文化財包蔵地分布地図利用の手引き』＜芦屋市文化財調査報告第80集＞
- 芦屋市教育委員会 2009c 『芦屋の遺跡シリーズ③ 二重濠をもつ前方後円墳 金津山古墳』
- 芦屋市立教育研究所 1978 『芦屋と古典文学』
- 芦屋市立美術博物館 1991 『芦屋の歴史と文化財－歴史資料展示室常設展示図録－』
- 石部正志・田中英夫・宮川 渉・堀田啓一 1979 「畿内大型前方後円墳の築造企画について」『古代学研究』第89号 古代学研究会
- 勇 正廣・藤岡 弘 1976 「古墳時代」『新修芦屋市史』資料篇1 考古・古代・中世 芦屋市役所
- 一瀬和夫 1992 「周濠」『古墳時代の研究』7 雄山閣出版
- 一瀬和夫・十河良和・河内一浩 2008 「古市・百舌鳥古墳群の埴輪」『近畿地方における大型古墳群の基礎的研究』＜平成17年度～19年度科学研究費補助金（基礎研究（A））研究成果報告書＞ 科研費研究「近畿地方における大型古墳群の基礎的研究」（研究代表者 白石太郎）研究グループ編 六一書房
- 今泉三郎 1977 『芦屋物語』 康寿倶楽部
- 魚澄惣五郎 編 1956 『芦屋市史』本編 兵庫県芦屋市教育委員会
- 柏原正民 1994 「周溝形態から見た帆立貝形式古墳」『文化財学論集』 奈良大学文学部文化財学科
- 金津山古墳周濠発掘調査会 1989 『＜現地説明会ノート＞金津山古墳周濠の発掘調査－第2地点における前方部の存在確認調査－』 芦屋市教育委員会
- 川上厚志・阿部 功・中村大介 2005 『兵庫県芦屋市 寺田遺跡発掘調査報告書 第150～153・157～160・166～168地点－都市計画道路山手幹線街路事業に伴う発掘調査IV－』＜芦屋市文化財調査報告第59集＞ 芦屋市・芦屋市教育委員会
- 川西宏幸 1978 「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』第64巻第2号 日本考古学会
- 紅野芳雄 1940 『考古小録』 西宮史談會
- 重藤輝行・竹村忠洋 編 1999 『寺田遺跡第95地点発掘調査概要報告書 阪神・淡路大震災復興に伴う埋蔵文化財発掘調査の成果』＜芦屋市文化財調査報告第32集＞ 芦屋市教育委員会
- 島 之夫 1929 『芦屋の里』 宝盛館
- 白石太郎 1983 「古墳の周濠」『角田文衛博士古稀記念 古代学叢論』 財団法人古代学協會
- 竹村忠洋 編 1999 『津知遺跡第17地点発掘調査概要報告書－芦屋西部第二地区土地区画整理事業（津知第2公園）に伴う震災復興調査－』＜芦屋市文化財調査報告第34集＞ 芦屋市教育委員会
- 竹村忠洋・白谷朋世 編 2005 『元塚発掘調査報告書』＜芦屋市文化財調査報告第56集＞ 芦屋市教育委員会

- 田辺昭三 1981 『須恵器大成』 角川書店
- 田辺真人・森岡秀人 ほか 1979 『芦屋の生活文化史－民俗と史跡をたずねて－』 芦屋市教育委員会
- 辻 康男 2003 「Ⅱ 1 遺跡をとりまく自然環境」『津知遺跡第142地点ほか発掘調査報告書－芦屋西部第二地区震災復興土地地区画整理事業に伴う震災復興調査の成果－』＜芦屋市文化財調査報告第46集＞ 芦屋市教育委員会
- 辻 康男 ほか 2002 「第3節 遺跡をとりまく自然環境」『六条遺跡発掘調査報告書－芦屋西部第一地区震災復興土地地区画整理事業・清水公園建設事業に伴う六条遺跡－』＜芦屋市文化財調査報告第41集＞ 芦屋市教育委員会
- 都出比呂志 1988 「古墳時代首長系譜の継続と断絶」『待兼山論叢』史学篇第22号 大阪大学文学部
- 中畔明日香・小長谷正治・瀬川眞美子 2008 「第3章 調査成果」『兵庫県伊丹市御願塚古墳発掘調査報告書－第8・9・10次調査－』＜伊丹市埋蔵文化財調査報告書第34集＞ 伊丹市教育委員会
- 西谷眞治 1974 「古墳と豪族」『兵庫県史』第1巻 兵庫県
- 沼澤 豊 2006 『前方後円墳と帆立貝古墳』＜考古学選書52＞ 雄山閣
- 白谷朋世 2008 「打出小槌古墳の全長を考える。～実録・打出小槌古墳～」『芦屋市立美術館研究紀要』第1号 芦屋市立美術館
- 白谷朋世・森岡秀人 編 2008 『金津山古墳発掘調査報告書－第17地点で検出した外周濠の発掘調査結果』＜芦屋市文化財調査報告第75集＞ 芦屋市教育委員会
- 櫃本誠一 1984 「帆立貝形古墳について」『考古学雑誌』第69巻第3号 日本考古学会
- 櫃本誠一・森岡秀人 1982 「兵庫県の60メートル級前方後円墳について」『韓国の前方後円墳』 社会思想社
- 福永伸哉 1999 「古墳時代の首長系譜変動と墳墓要素の変化」『古墳時代首長系譜変動パターンの比較研究』平成8年度～平成10年度科学研究費補助金（基盤B・一般2）研究成果報告書 大阪大学文学部
- 藤田和尊 2006 『古墳時代の王権と軍事』 学生社
- 細川道草 1963 『芦屋郷土誌』 芦屋史談会
- 前田保夫 1979 『六甲の断層をさぐる』＜神戸の自然1＞ 神戸市立教育研究所
- 前田佳久・石島三和・中村大介 ほか 2004 『兵庫県芦屋市 月若遺跡発掘調査報告書 第68・69・70地点－都市計画道路山手幹線街路事業に伴う発掘調査Ⅲ－』＜芦屋市文化財調査報告第57集＞ 芦屋市・芦屋市教育委員会
- 前田佳久・千種 浩・佐伯二郎・平田朋子・中居さやか 2003 『兵庫県芦屋市 寺田遺跡発掘調査報告書 第132・133・137・139・141・142地点－都市計画道路山手幹線街路事業に伴う発掘調査Ⅱ－』＜芦屋市文化財調査報告第45集＞ 芦屋市・芦屋市教育委員会
- 前田佳久・平田朋子・中居さやか 2002 『兵庫県芦屋市 寺田遺跡発掘調査報告書 第127・130・132・133地点－都市計画道路山手幹線街路事業に伴う発掘調査－』＜芦屋市文化財調査報告第43集＞ 芦屋市・芦屋市教育委員会
- 武藤 誠・村川行弘 1971 「第二章 考古学上からみた芦屋」『新修 芦屋市史』本篇 芦屋市役所
- 村上恭通 2007 『古代国家成立過程と鉄器生産』 青木書店
- 村川行弘 1976 「歴史時代」『新修芦屋市史』資料篇1 芦屋市役所
- 村川行弘・佐々木幸雄・藤岡 弘 1967 「Ⅰ. 芦屋市埋蔵文化財包蔵地台帳」『芦屋市埋蔵文化財包蔵地台帳 八十塚E号墳発掘調査報告書』＜芦屋市文化財調査報告第5集＞ 芦屋市教育委員会
- 村川行弘・藤岡 弘 1970 『芦屋廃寺址』＜芦屋市文化財調査報告第7集＞ 芦屋市教育委員会
- 森 郁夫 1998 『日本古代寺院造営の研究』 法政大学出版局
- 森岡秀人 1974 『芦屋市金津山古墳測量調査報告』 芦屋市史編集室
- 森岡秀人 1982 「芦屋風土記⑬ 黄金の埋蔵伝承－金津山古墳」『アイビー 芦屋市民センターだより』1982-6・7 芦屋市民センター
- 森岡秀人 1986 「打出小槌古墳」『埋蔵文化財調査メモリアル'80～'85』＜芦屋市文化財調査報告第14集＞ 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人 1987 「古墳時代の芦屋地方（上）－近年の遺跡調査をふりかえって－」『兵庫県の歴史』23 兵庫県（県史編集室）
- 森岡秀人 1988a 「古墳時代の芦屋地方（下）－近年の遺跡調査をふりかえって－」『兵庫県の歴史』24 兵庫県（県史編集室）

- 森岡秀人 1988b 「金津山古墳（周濠）」『兵庫県埋蔵文化財調査年報 昭和60年度』 兵庫県教育委員会
- 森岡秀人 1990 「前方後円墳からみた古墳時代の阪神地方」『考古学論集』第3集 考古学を学ぶ会
- 森岡秀人 1992 「打出小槌古墳」『兵庫県史 考古資料編』 兵庫県
- 森岡秀人 1995 「海浜の古墳－摂津・金津山古墳と打出小槌古墳について－」『西谷眞治先生古稀記念論文集』 西谷眞治先生古稀をお祝いする会
- 森岡秀人 2001 「摂津国菟原郡葦屋郷・賀美郷考証覚書」『考古学論集』第5集 考古学を学ぶ会
- 森岡秀人 2008a 「第1章 考古学が語る本庄地区周辺の地域史」『本庄村史 歴史編－神戸市東灘区深江・青木・西青木のあゆみ－』 本庄村史編纂委員会
- 森岡秀人 2008b 「金津山古墳被葬者考」『芦屋市立美術博物館研究紀要』第1号 芦屋市立美術博物館
- 森岡秀人・木南アツ子 1996 「金津山古墳（第9地点）」『平成7年度国庫補助事業 芦屋市内遺跡発掘調査－震災復興に伴う埋蔵文化財緊急確認（試掘）調査－概要報告書 寺田遺跡（第40・41・47・52・55・57地点） 芦屋廃寺遺跡（W地点・第29・38地点） 月若遺跡（第20・25・28・30・33地点） 打出岸造り遺跡（第1地点） 打出小槌遺跡（第17地点） 金津山古墳（第9地点） 久保遺跡（第15地点） 山芦屋遺跡（S8地点）』＜芦屋市文化財調査報告第27集＞ 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人・坂田典彦 編 2003 『平成12・13年度国庫補助事業 寺田遺跡（第128地点）発掘調査報告書－集落東端部の様相と知見－』＜芦屋市文化財調査報告第47集＞ 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人・坂田典彦 編 2004 『津知遺跡（第181地点）発掘調査報告書－共同住宅建設事業に伴う遺跡西限部の様相把握－』＜芦屋市文化財調査報告第50集＞ 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人・竹村忠洋 2000 「阪神・淡路大震災に伴う埋蔵文化財震災復興調査の経過と課題－芦屋市における5年間を振り返って－」『地震災害と考古学 I』 日本考古学協会
- 森岡秀人・竹村忠洋 編 2006 『徳川大坂城東六甲採石場Ⅵ 岩ヶ平刻印群発掘調査報告書 第32・33・45・67・70・79・81・91地点－平成9・11・14・15・16年度国庫補助事業－』＜芦屋市文化財調査報告第64集＞ 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人・竹村忠洋 編 2008 『平成14年度国庫補助事業 芦屋市内遺跡発掘調査概要報告書 市内遺跡及び震災復興に伴う埋蔵文化財緊急確認・本発掘調査の成果 芦屋廃寺遺跡（第74・75・77・79地点） 寺田遺跡（第143地点） 六条遺跡（第43地点） 津知遺跡（第43・69地点） 大原遺跡（第45地点） 打出岸造り遺跡（第35地点）』＜芦屋市文化財調査報告第72集＞ 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人・竹村忠洋・坂田典彦 編 2009 『平成14年度国庫補助事業 芦屋市内遺跡発掘調査概要報告書 震災復興に伴う埋蔵文化財発掘調査とその成果 城山南麓遺跡（E・F・G地点） 冠遺跡（第23地点） 芦屋廃寺遺跡（第81・88地点） 月若遺跡（第74地点） 寺田遺跡（第144地点） 津知遺跡（第123・187地点） 打出岸造り遺跡（第38・39地点） 久保遺跡（第47・48地点） 打出小槌遺跡（第36・37地点）』＜芦屋市文化財調査報告第78集＞ 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人・竹村忠洋・古川久雄 編 1999 『芦屋廃寺遺跡（第53地点）・寺田遺跡（第104地点）震災復興埋蔵文化財確認調査概要報告書 津知川排水区雨水管敷設工事（東川用水路推定地）に伴う確認調査』＜芦屋市文化財調査報告第35集＞ 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人・竹村忠洋・守田めぐみ 2009 『平成19年度国庫補助事業 芦屋市内遺跡発掘調査報告書 寺田遺跡（第191地点） 山芦屋遺跡（S14地点）』＜芦屋市文化財調査報告第79集＞ 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人・辻 康男 2000 『平成11年度国庫補助事業 金津山古墳〔第11地点〕（前方部西半域の周濠）埋蔵文化財発掘調査実績報告書－震災復興調査－』 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人・松村朋世・後神 泉 編 1991 『平成2年度国庫補助事業 寺田遺跡第23次地点 寺田遺跡第24次地点 寺田遺跡第25次地点 寺田遺跡第27次地点 芦屋廃寺遺跡M地点 芦屋廃寺遺跡N地点 発掘調査概要報告書』＜芦屋市文化財調査報告第21集＞ 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人・村川義典 1996 「摂津国」『兵庫県の考古学』 吉川弘文館
- 森岡秀人・和田秀寿 編 1991 『芦屋の歴史と文化

- 財－歴史資料展示室常設展示図録－』 芦屋市立美術博物館
- 森岡秀人・和田秀寿・後神 泉 編 1989 『昭和63年度国庫補助事業 芦屋廃寺遺跡K地点・寺田遺跡第16次地点発掘調査概要報告書』＜芦屋市文化財調査報告第17集＞ 芦屋市教育委員会
- 森岡秀人・和田秀寿・後神 泉 編 1990 『平成元年度国庫補助事業 寺田遺跡第20次地点 金津山古墳後円部範囲・構造確認調査 三条九ノ坪遺跡第4地点 発掘調査概要報告書』＜芦屋市文化財調査報告第19集＞ 芦屋市教育委員会
- 安田 滋 編 2006 『兵庫県芦屋市 業平遺跡第61地点 月若遺跡第79・81地点 寺田遺跡第178・181地点 発掘調査報告書－都市計画道路山手幹線街路事業に伴う発掘調査Ⅴ－』＜芦屋市文化財調査報告第62集＞ 芦屋市・芦屋市教育委員会
- 安田 滋 編 2007 『兵庫県芦屋市 月若遺跡発掘調査報告書第83地点－都市計画道路山手幹線街路事業に伴う発掘調査Ⅵ－』＜芦屋市文化財調査報告第68集＞ 芦屋市・芦屋市教育委員会
- 安田 滋・山本雅和 編 2008 『芦屋市山手幹線街路事業に伴う埋蔵文化財発掘調査の概要－総集編－』＜芦屋市文化財調査報告第74集＞ 芦屋市・芦屋市教育委員会
- 山田清朝 編 2001 『寺田遺跡（第117～124地点）発掘調査概要報告書 都市計画道路川西線建設に伴う発掘調査－震災復興調査－』＜芦屋市文化財調査報告第39集＞ 芦屋市教育委員会
- 遊佐和敏 1988 『帆立貝式古墳』 同成社

報告書抄録

ふりがな	へいせい15ねんどこっこほじょじぎょう あしやしないいせきはつくつちょうさがいようほうこくしょ
書名	平成15年度国庫補助事業 芦屋市内遺跡発掘調査概要報告書
副書名	芦屋廃寺遺跡（第89地点） 寺田遺跡（第171地点） 清水遺跡（第22地点） 金津山古墳（第12地点）
巻次	
シリーズ名	芦屋市文化財調査報告
シリーズ番号	第83集
編著者名	（執筆・編集）森岡秀人・竹村忠洋・坂田典彦・白谷朋世
編集機関	芦屋市教育委員会社会教育部生涯学習課（文化財担当）
所在地	〒659-8501 兵庫県芦屋市精道町7番6号 TEL. 0797-38-2115
発行年月日	2010年（平成22年）3月31日

ふりがな 所収遺跡名		あしやはいいせき だい ちてん 芦屋廃寺遺跡（第89地点）		発掘調査担当者		森岡秀人・坂田典彦					
ふりがな 所在地		ひょうごけんあしやしにしまちよう ばんち 兵庫県芦屋市西山町156番地									
コ ー ド		北 緯		東 経		調 査 期 間		調 査 面 積		調 査 原 因	
市 町 村	遺跡番号	34度73分14秒		135度29分97秒		20031104～20031125		68. 5㎡		個人住宅建設	
28206											
所収遺跡名	種 別	時 代		主 な 遺 構		主 な 遺 物		特 記 事 項			
芦屋廃寺遺跡 （第89地点）	集落跡 寺域	古墳時代 古代		土坑		弥生土器・土師器・須恵器・古代～ 近世の瓦・近世陶磁器		瓦当（聖武朝期の重圈文軒丸瓦）検出。			
要 約		芦屋廃寺中心域に近接する本地点では、該期の遺構こそ未検出であったが、重圈文軒丸瓦など増築や葺き替えを示す遺物が出土した。									

ふりがな 所収遺跡名		てらだいせき だい ちてん 寺田遺跡（第171地点）		発掘調査担当者		竹村忠洋・白谷朋世						
ふりがな 所 在 地		ひょうごけんあしやしにしあしやちよう ばん 兵庫県芦屋市西芦屋町28番 1										
コ ー ド		北 緯		東 経		調 査 期 間		調 査 面 積		調 査 原 因		
市 町 村	遺跡番号	34度73分31秒		135度29分78秒		20040130～20040227		41.7㎡		個人住宅建設		
28206												
所収遺跡名	種 別	時 代		主 な 遺 構		主 な 遺 物		特 記 事 項				
寺田遺跡 （第171地点）	集落跡	弥生時代後期後半 ～中世		竪穴住居・土坑・溝・ ピット		弥生土器・土師器・須恵器		弥生時代後期～飛鳥時代の遺構を多 数検出。				
要 約		弥生時代後期後半～終末期の竪穴住居、飛鳥時代の柱穴群など、平安時代前半を下限とする濃密な遺構の分布を確認した ことから、当該地が寺田遺跡の中心部に位置することが明らかになった。										

ふりがな 所収遺跡名		しみずいせき だい ちてん 清水遺跡（第22地点）		発掘調査担当者		森岡秀人・坂田典彦					
ふりがな 所在地		ひょうごけんあしやししみずちよう ばんち 兵庫県芦屋市清水町104番地 4									
コ ー ド		北 緯		東 経		調 査 期 間		調 査 面 積		調 査 原 因	
市 町 村	遺跡番号	34度73分36秒		135度29分75秒		20030630～20030708		33.72㎡		個人住宅建設	
28206											
所収遺跡名	種 別	時 代		主 な 遺 構		主 な 遺 物		特 記 事 項			
清水遺跡 （第22地点）	生産遺跡	中世		犁溝 自然流路		土師器・須恵器		津知遺跡とも関連する中世の耕作遺構を検出した。			
要 約		中世の耕作地（犁溝）と中世に埋没した自然流路を確認した。									

ふりがな 所収遺跡名		かなつやまこふん だい ちてん 金津山古墳（第12地点）		発掘調査担当者		森岡秀人・坂田典彦					
ふりがな 所在地		ひょうごけんあしやしあさがちよう ばんち 兵庫県芦屋市春日町149番地 1									
コ　　ド		北　　緯		東　　経		調　査　期　間		調　査　面　積		調　査　原　因	
市　町　村	遺跡番号	34度73分30秒		135度31分63秒		20031208～20040130		117.34㎡		個人住宅建設	
28206											
所収遺跡名	種　　別	時　　代		主　な　遺　構		主　な　遺　物		特　記　事　項			
金津山古墳 （第12地点）	古墳	古墳時代		周濠		井戸瓦・陶磁器・須恵器・土師器・埴輪・葺石		5世紀後半の築造と周濠形態を追認した。			
要　　約		本地点は後円部北東側に位置し、後円部周濠が完周することを前提とした事前調査を実施した。その結果、幅6 m以上の周濠が検出され、その堆積土を分層発掘することによって、廃絶過程の一端を窺い知ることができた。									

芦屋市文化財調査報告 第83集
平成15年度国庫補助事業
芦屋市内遺跡発掘調査概要報告書

平成22年(2010)3月31日 印刷発行

発行者 芦屋市教育委員会
〒659-8501 兵庫県芦屋市精道町7番6号
TEL. 0797-38-2115
編集者 芦屋市教育委員会社会教育部生涯学習課(文化財担当)
〒659-8501 兵庫県芦屋市精道町7番6号
TEL. 0797-38-2115
印刷所 有限会社 岸本出版印刷
〒652-0806 兵庫県神戸市兵庫区西柳原町3番地29
TEL. 078-681-2456(代)

Ashiya Archaeological Record 83

2 0 1 0 . 3

Ashiya City Board of Education, Japan